



Informatica® MDM Multidomain Edition  
10.2 HotFix 2

# インストールガイド

## Oracle Database with WebLogic

Informatica MDM Multidomain Edition インストールガイド Oracle Database with WebLogic

10.2 HotFix 2

2018 年 3 月

© 著作権 Informatica LLC 1998, 2020

本ソフトウェアおよびマニュアルは、使用および開示の制限を定めた個別の使用許諾契約のもとでのみ提供されています。本マニュアルのいかなる部分も、いかなる手段（電子的複製、写真複製、録音など）によっても、Informatica LLC の事前の承諾なしに複製または転載することは禁じられています。

米政府の権利プログラム、ソフトウェア、データベース、および関連文書や技術データは、米国政府の顧客に配信され、「商用コンピュータソフトウェア」または「商業技術データ」は、該当する連邦政府の取得規制と代理店固有の補足規定に基づきます。このように、使用、複製、開示、変更、および適応は、適用される政府の契約に規定されている制限およびライセンス条項に従うものとし、政府契約の条項によって適当な範囲において、FAR 52.227-19、商用コンピュータソフトウェアライセンスの追加権利を規定します。

Informatica、Informatica ロゴ、および ActiveVOS は、米国およびその他の国における Informatica LLC の商標または登録商標です。Informatica の商標の最新リストは、Web (<https://www.informatica.com/trademarks.html>) にあります。その他の企業名および製品名は、それぞれの企業の商標または登録商標です。

本ソフトウェアまたはドキュメンテーション（あるいはその両方）の一部は、第三者が保有する著作権の対象となります。必要な第三者の通知は、製品に含まれています。

本マニュアルの情報は、予告なしに変更されることがあります。このドキュメントで問題が見つかった場合は、[infa\\_documentation@informatica.com](mailto:infa_documentation@informatica.com) までご報告ください。

Informatica 製品は、それらが提供される契約の条件に従って保証されます。Informatica は、商品性、特定目的への適合性、非侵害性の保証等を含めて、明示的または黙示的ないかなる種類の保証をせず、本マニュアルの情報を「現状のまま」提供するものとします。

発行日: 2020-05-05

# 目次

<b>序文</b>	<b>7</b>
Informatica のリソース	7
Informatica Network	7
Informatica ナレッジベース	7
Informatica マニュアル	7
Informatica 製品可用性マトリックス	8
Informatica Velocity	8
Informatica Marketplace	8
Informatica グローバルカスタマサポート	8
<b>第 1 章 : インストールの概要</b>	<b>9</b>
MDM Multidomain Edition のインストール	9
インストールのトポロジ	11
インストールのタスク	12
<b>第 2 章 : インストール前のタスク</b>	<b>13</b>
インストールの準備	13
環境の準備	15
データベース環境の設定	16
手順 1. Oracle のインストールと設定	16
手順 2. データベースインスタンスの設定	17
手順 3. データベース特権と接続の設定	19
手順 4. ActiveVOS スキーマの作成	20
アプリケーションサーバー環境の設定	21
Java 仮想マシンの設定	21
WebLogic Server 認証の無効化	24
ActiveVOS コンソール管理ユーザーの作成	24
アプリケーションサーバーの追加設定 (オプション)	25
スタンドアロンプロセスサーバーインスタンス用の WebLogic の設定	25
複数の MDM Hub マスターデータベース用の WebLogic の設定	28
HTTPS プロトコルの設定	28
Informatica プラットフォームの JTA タイムアウトの設定	28
サイレントインストールのためのプロパティファイルの設定	28
Informatica プラットフォームのプロパティファイルの設定	29
Hub サーバーのプロパティファイルの設定	29
プロセスサーバーのプロパティファイルの設定	29
<b>第 3 章 : Hub ストアのインストール</b>	<b>30</b>
MDM Hub マスターデータベースの作成	30
オペレーショナル参照ストアの作成	32

MDM Hub マスターデータベースへのメタデータのインポート.....	34
オペレーショナル参照ストアへのメタデータのインポート.....	35
<b>第 4 章 : Hub ストアのインストール後のタスク.....</b>	<b>38</b>
Oracle コンポーネントへのアクセスの検証.....	38
<b>第 5 章 : Hub サーバーのインストール.....</b>	<b>40</b>
Hub サーバーのインストールモード.....	40
グラフィカルモードでの Hub サーバーのインストール.....	40
コンソールモードでの Hub Server のインストール.....	44
サイレントインストールのプロパティファイルの生成.....	47
サイレントモードでの Hub サーバーのインストール.....	48
管理対象サーバーがある環境での Hub サーバーのインストール.....	48
<b>第 6 章 : Hub サーバーのインストール後のタスク.....</b>	<b>52</b>
インストールログファイルのコピー.....	52
バージョンとビルド番号の確認.....	53
アプリケーションサーバー設定の検証と設定（条件付き）.....	54
アプリケーションサーバー設定の編集.....	54
管理対象サーバーがある環境での Hub サーバーのプロパティの設定.....	54
Hub サーバーアプリケーションのデプロイ（条件付き）.....	55
Hub サーバーアプリケーションをデプロイするスクリプトの使用（条件付き）.....	56
Hub サーバーアプリケーションの手動デプロイ（条件付き）.....	57
手順 1. データソースの作成.....	58
手順 2.JMS メッセージキューの設定.....	60
手順 3.Hub サーバーの EAR ファイルの再パッケージ化.....	62
手順 4.Hub サーバーアプリケーションのデプロイ.....	63
手順 5. Hub サーバーでの JMS メッセージキューの設定.....	64
手順 6.Informatica Data Director のサーバーリソースの設定.....	65
WebLogic の再起動.....	66
メタデータキャッシュの設定（オプション）.....	66
Infinispan 属性の編集.....	67
Hub コンソールの起動.....	68
オペレーショナル参照ストアの登録.....	68
<b>第 7 章 : Process サーバーのインストール.....</b>	<b>71</b>
プロセスサーバーのインストールモード.....	71
グラフィカルモードでのプロセスサーバーのインストール.....	71
コンソールモードでのプロセスサーバーのインストール.....	73
サイレントモードでのプロセスサーバーのインストール.....	75
管理対象サーバーがある環境でのプロセスサーバーのインストール.....	76

<b>第 8 章 : Process サーバーのインストール後のタスク</b> .....	78
インストールログファイルのコピー.....	78
バージョンとビルド番号の確認.....	79
プロセスサーバーアプリケーションのデプロイ（条件付き）.....	79
手順 1. データソースの作成（条件付き）.....	80
手順 2. プロセスサーバーアプリケーションのデプロイ（条件付き）.....	82
手順 3. 管理対象サーバーがある環境でのデプロイメントのターゲットの指定（条件付き）.....	83
プロセスサーバーでのスマート検索の設定.....	84
一致ポピュレーションの設定.....	84
一致ポピュレーションの有効化.....	84
プロセスサーバーとクレンジングエンジンの設定.....	85
<b>第 9 章 : アプリケーションサーバーに対する ActiveVOS のインストール後のタスク</b> .....	86
WebLogic 環境での信頼されたユーザーの作成.....	86
安全な ActiveVOS 通信のための WebLogic の設定.....	87
デフォルトのセキュリティレルムの編集.....	87
ActiveVOS ロールの追加.....	87
WebLogic でのユーザーおよびグループの設定.....	88
グループの作成.....	88
ユーザーの追加.....	88
abTaskClient ロールの編集.....	89
<b>第 10 章 : ビジネスエンティティアダプタに対する ActiveVOS のインストール後のタスク</b> .....	90
ActiveVOS Web アプリケーション.....	90
ビジネスエンティティワークフローアダプタの ActiveVOS URN の設定.....	91
ActiveVOS プロトコルの HTTPS への設定.....	91
プライマリワークフローエンジンの設定.....	92
ActiveVOS 用の MDM Identity Service の設定.....	92
タスクの設定.....	93
<b>第 11 章 : リソースキットのインストール</b> .....	94
MDM Hub サンプルオペレーショナル参照ストアの設定.....	94
Informatica MDM Hub サンプルオペレーショナルリファレンスストアの登録.....	97
グラフィカルモードでのリソースキットのインストール.....	99
コンソールモードでのリソースキットのインストール.....	102
サイレントモードでのリソースキットのインストール.....	104
プロパティファイルの設定.....	104
サイレントインストーラの実行.....	106

<b>第 12 章 : MDM Hub のトラブルシューティング</b>	<b>107</b>
インストールプロセスのトラブルシューティング	107
<b>第 13 章 : アンインストール</b>	<b>110</b>
アンインストールの概要	110
Hub Store のアンインストール	110
グラフィカルモードでの Process サーバーのアンインストール	111
UNIX におけるグラフィカルモードでのプロセスサーバーのアンインストール	111
Windows におけるグラフィカルモードでのプロセスサーバーのアンインストール	111
グラフィカルモードでの Hub サーバーのアンインストール	112
UNIX におけるグラフィカルモードでの Hub サーバーのアンインストール	112
Windows におけるグラフィカルモードでの Hub サーバーのアンインストール	112
グラフィカルモードでのリソースキットのアンインストール	113
UNIX でのグラフィカルモードによるリソースキットのアンインストール	113
Windows でのグラフィカルモードによるリソースキットのアンインストール	113
コンソールモードでのプロセスサーバーのアンインストール	114
コンソールモードでの Hub Server のアンインストール	114
コンソールモードでのリソースキットのアンインストール	114
手動によるプロセスサーバーのデプロイ解除	115
手動による Hub Server のデプロイ解除	115
<b>索引</b>	<b>116</b>

# 序文

この『Informatica MDM Multidomain Edition インストールガイド』は、データベース管理者、システム管理者、および Informatica<sup>®</sup> MDM Hub のインストールとセットアップを担当する技術者向けのドキュメントです。このガイドでは、オペレーティングシステム、データベース環境、アプリケーションサーバーの知識があることを前提としています。

## Informatica のリソース

### Informatica Network

Informatica Network は、Informatica グローバルカスタマサポート、Informatica ナレッジベースなどの製品リソースをホストします。Informatica Network には、<https://network.informatica.com> からアクセスしてください。

メンバーは以下の操作を行うことができます。

- 1 つの場所からすべての Informatica のリソースにアクセスできます。
- ドキュメント、FAQ、ベストプラクティスなどの製品リソースをナレッジベースで検索できます。
- 製品の提供情報を表示できます。
- 自分のサポート事例を確認できます。
- 最寄りの Informatica ユーザーグループネットワークを検索して、他のユーザーと共同作業を行えます。

### Informatica ナレッジベース

ドキュメント、ハウツー記事、ベストプラクティス、PAM などの製品リソースを Informatica Network で検索するには、Informatica ナレッジベースを使用します。

ナレッジベースには、<https://kb.informatica.com> からアクセスしてください。ナレッジベースに関する質問、コメント、ご意見の連絡先は、Informatica ナレッジベースチーム ([KB\\_Feedback@informatica.com](mailto:KB_Feedback@informatica.com)) です。

### Informatica マニュアル

使用している製品の最新のドキュメントを取得するには、[https://kb.informatica.com/\\_layouts/ProductDocumentation/Page/ProductDocumentSearch.aspx](https://kb.informatica.com/_layouts/ProductDocumentation/Page/ProductDocumentSearch.aspx) にある Informatica ナレッジベースを参照してください。

このマニュアルに関する質問、コメント、ご意見の電子メールの送付先は、Informatica マニュアルチーム ([infa\\_documentation@informatica.com](mailto:infa_documentation@informatica.com)) です。

## Informatica 製品可用性マトリックス

製品可用性マトリックス（PAM）には、製品リリースでサポートされるオペレーティングシステム、データベースなどのデータソースおよびターゲットが示されています。Informatica Network メンバである場合は、PAM (<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices>) にアクセスできます。

## Informatica Velocity

Informatica Velocity は、Informatica プロフェッショナルサービスによって開発されたヒントおよびベストプラクティスのコレクションです。数多くのデータ管理プロジェクトの経験から開発された Informatica Velocity には、世界中の組織と協力して優れたデータ管理ソリューションの計画、開発、展開、および維持を行ってきた弊社コンサルタントの知識が集約されています。

Informatica Network メンバである場合は、Informatica Velocity リソース (<http://velocity.informatica.com>) にアクセスできます。

Informatica Velocity についての質問、コメント、またはアイデアがある場合は、[ips@informatica.com](mailto:ips@informatica.com) から Informatica プロフェッショナルサービスにお問い合わせください。

## Informatica Marketplace

Informatica Marketplace は、お使いの Informatica 製品を強化したり拡張したりするソリューションを検索できるフォーラムです。Informatica の開発者およびパートナーの何百ものソリューションを利用して、プロジェクトで実装にかかる時間を短縮したり、生産性を向上させたりできます。Informatica Marketplace には、<https://marketplace.informatica.com> からアクセスできます。

## Informatica グローバルカスタマサポート

Informatica Network の電話またはオンラインサポートからグローバルカスタマサポートに連絡できます。

各地域の Informatica グローバルカスタマサポートの電話番号は、Informatica Web サイト (<http://www.informatica.com/us/services-and-training/support-services/global-support-centers>) を参照してください。

Informatica Network メンバである場合は、オンラインサポート (<http://network.informatica.com>) を使用できます。



# 第 1 章

## インストールの概要

この章では、以下の項目について説明します。

- [MDM Multidomain Edition のインストール, 9 ページ](#)
- [インストールのトポロジ, 11 ページ](#)
- [インストールのタスク, 12 ページ](#)

## MDM Multidomain Edition のインストール

MDM Multidomain Edition は、データの信頼性とデータ管理手順を向上するマスターデータ管理ソリューションです。MDM Multidomain Edition は、MDM Hub と呼ばれます。MDM Hub の機能には Hub コンソールを使用してアクセスできます。

MDM Hub は複数のコンポーネントで構成されています。MDM Hub は、グラフィカルモード、コンソールモード、またはサイレントモードでインストールできます。

### コアコンポーネント

インストールのコアコンポーネントを次の表に示します。

コンポーネント	説明
MDM Hub マスターデータベース	MDM Hub のビジネスデータの保存および統合を行うスキーマ。ユーザーアカウント、セキュリティ設定、オペレーショナル参照ストアレジストリ、メッセージキュー設定など、MDM Hub 環境設定が含まれている。MDM Hub マスターデータベースから、オペレーショナル参照ストアにアクセスして管理することができる。MDM Hub マスターデータベースのデフォルトの名前は CMX_SYSTEM ですが、カスタム名を使用できます。
オペレーショナル参照ストア	MDM Hub のビジネスデータの保存および統合を行うスキーマ。マスターデータ、コンテンツメタデータ、マスターデータを処理および管理するためのルールが含まれます。オペレーショナル参照ストアのデータベースは、地理的に異なる場所、組織内の異なる部署、開発環境およびプロダクション環境ごとに個別に設定できる。オペレーショナル参照ストアのデータベースは、複数のサーバーマシンにわたって分散できる。オペレーショナル参照ストアのデフォルト名は CMX_ORS。
Hub サーバー	アプリケーションサーバーにデプロイする J2EE アプリケーション。Hub サーバーでは MDM Hub の内部に保存されているデータを処理し、MDM Hub を外部アプリケーションと統合します。Hub サーバーは MDM Hub のコアサービスと共通サービスを管理します。

コンポーネント	説明
Process サーバー	アプリケーションサーバーにデプロイする J2EE アプリケーション。Process サーバーは、ロード、BVT の再計算、再検証、データクレンジングの実行、一致操作などのバッチジョブを処理します。Process サーバーは、データを標準化および最適化して一致および統合するように設定したクレンジングエンジンとインタフェースで接続します。
プロビジョニングツール	ビジネスエンティティモデルの作成や、Informatica Data Director のエンティティ 360 フレームワークの設定を行うツール。ビジネスエンティティモデルを作成したら、設定を MDM Hub にパブリッシュできます。
Informatica ActiveVOS <sup>(R)</sup>	MDM Hub の内部でデータ処理用に必要とされるビジネスプロセス管理 (BPM) ツールです。Informatica ActiveVOS は、データの変更承認プロセスなど、自動的なビジネスプロセスをサポートします。また、ベストバージョンオブトゥールズ (BVT) レコードに追加する前に、マスタデータの変更が必ず確認と承認のプロセスを経るには、Informatica ActiveVOS も使用できます。 ActiveVOS サーバーを Hub サーバーのインストールの一環としてインストールする場合は、ActiveVOS サーバー、ActiveVOS コンソール、および Process Central をインストールします。また、定義済みの MDM のワークフロー、タスク、およびロールもインストールします。
Informatica Data Director (IDD)	MDM Hub に格納されているデータを習得および管理するためのユーザーインタフェースです。IDD では、顧客、サプライヤ、従業員などのビジネスエンティティによってデータが整理されます。ビジネスエンティティは、組織にとって意味があるデータグループです。

## オプションコンポーネント

次の表に、インストールのオプションコンポーネントを示します。

コンポーネント	説明
リソースキット	MDM Hub をアプリケーションとワークフローに統合するサンプル、アプリケーション、およびユーティリティのセット。インストールするリソースキットコンポーネントは選択できます。
Informatica Platform	ソースデータのクレンジングおよび MDM Hub への転送に使用する Informatica サービスおよび Informatica クライアントから構成される環境です。データのクレンジングには、MDM Hub で利用可能なクレンジング機能の代わりに Informatica Platform を使用できます。 Informatica Platform を Hub サーバーのインストールの一環としてインストールする場合は、データ統合サービス、モデルリポジトリサービス、および Informatica Developer (Developer tool) をインストールします。
Dynamic Data Masking	MDM Hub とデータベースの間で動作して、機密情報への不正アクセスを防止するデータセキュリティツール。Dynamic Data Masking は、データベースに送信された要求をインターセプトし、その要求にデータマスキングルールを適用し、データをマスクしてから MDM Hub に返送します。

コンポーネント	説明
Informatica Data Controls (IDC)	サブジェクト領域データモデルのみに基づいて、Informatica Data Director (IDD) に適用されます。 IDC は、ビジネスユーザーが使用するサードパーティアプリケーションで MDM Hub データを公開する一連のユーザーインターフェースコントロールです。
Zero Downtime (ZDT) モジュール	MDM Hub のアップグレード時に、アプリケーションが MDM Hub のデータにアクセスできるようにするモジュール。ZDT 環境で、データベースを複製します (ソースデータベースとターゲットデータベース)。MDM Hub のアップグレード時に、ZDT モジュールは、ソースデータベースのデータ変更をターゲットデータベースにレプリケートします。 ZDT モジュールを購入するには、Informatica の担当者にお問い合わせください。Zero Downtime 環境のインストールについては、お使いのデータベースの『 <i>Informatica MDM Multidomain Edition Zero Downtime (ZDT) インストールガイド</i> 』を参照してください。

## インストールのトポロジ

MDM Hub をインストールする前に、インストールのトポロジを決定します。通常、インフラストラクチャの計画者およびマスタデータ管理ソリューションの設計者が実装するトポロジを決定します。

MDM Hub は、開発環境、テスト環境、プロダクション環境など、複数の環境にインストールできます。各タイプの環境の要件および優先順位は独自のものです。したがって、各環境によってインストールのトポロジも変わってきます。

次の表に、使用できる MDM Hub インストールのトポロジを示します。

トポロジ	説明
スタンドアロンのアプリケーションサーバーインスタンス	すべての MDM Hub コンポーネントがスタンドアロンのアプリケーションサーバーインスタンスにインストールされます。
複数のアプリケーションサーバーインスタンス	MDM Hub コンポーネントが複数のアプリケーションサーバーインスタンスにインストールされます。
アプリケーションサーバークラスター	MDM Hub コンポーネントがアプリケーションサーバークラスターにインストールされます。

インストールのトポロジの詳細については、『*Informatica MDM Multidomain Edition インフラストラクチャ計画ガイド*』を参照してください。

**注:** MDM Hub 実装のすべてのコンポーネントはバージョンが同じである必要があります。複数のバージョンの MDM Hub が存在する場合は、各バージョンを別々の環境にインストールする必要があります。

# インストールのタスク

MDM Hub コンポーネントをインストールするために、インストール前のタスクを完了します。インストールしたら、インストール後のタスクを実行します。

MDM Hub をインストールするには、以下のタスクを実行します。

1. インストール前のタスクを完了します。正常に Hub サーバーおよび Process サーバーのインストーラを実行し、Hub ストアを作成できるようにするには、インストール前のタスクを完了します。
2. MDM Hub マスターデータベースを作成します。Hub サーバーおよびプロセスサーバーをインストールする前に、MDM Hub マスターデータベースを作成します。  
MDM Hub ディストリビューションに付属するセットアップスクリプトを使用し、MDM Hub マスターデータベースを作成します。
3. オペレーショナル参照ストアを作成します。インストール前のタスクの完了後は、いつでもオペレーショナル参照ストアを作成できます。  
MDM Hub ディストリビューションに付属するセットアップスクリプトを使用し、オペレーショナル参照ストアを作成します。
4. Hub サーバーをインストールします。MDM Hub インストーラを使用して、Hub サーバーをインストールします。
5. プロセスサーバーをインストールします。MDM Hub インストーラを使用して、プロセスサーバーをインストールします。
6. インストール後の設定タスクの実行。データベースの接続をテストします。MDM Hub 機能を確実に使用できるようにするには、Hub サーバーとプロセスサーバーを設定します。

## 第 2 章

# インストール前のタスク

この章では、以下の項目について説明します。

- [インストールの準備, 13 ページ](#)
- [環境の準備, 15 ページ](#)
- [データベース環境の設定, 16 ページ](#)
- [アプリケーションサーバー環境の設定, 21 ページ](#)
- [アプリケーションサーバーの追加設定（オプション）, 25 ページ](#)
- [サイレントインストールのためのプロパティファイルの設定, 28 ページ](#)

## インストールの準備

MDM Hub をインストールする前に、インストールの準備をします。

次の表で、インストールの準備作業について説明します。

タスク	説明
リリースノートの確認	最新の『 <i>Informatica MDM Multidomain Edition</i> リリースノート』を読んで、インストールプロセスおよびアップグレードプロセスの最新情報を確認します。また、リリースの既知および固定の制限に関する情報や、インストールとアップグレードのプロセスに影響する緊急バグ修正に関する情報を見つけることもできます。
製品可用性マトリックスの確認	製品の要件とサポートされているプラットフォームに関する情報については、製品可用性マトリックス（PAM）を確認します。PAM には <a href="https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices">https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices</a> からアクセスできます。
MDM インフラストラクチャおよびアーキテクチャプランの把握	組織のインフラストラクチャの計画者または MDM ソリューションの設計者から MDM インフラストラクチャとアーキテクチャのプランを入手し、把握します。インフラストラクチャ計画と MDM アーキテクチャの詳細については、『 <i>Informatica MDM Multidomain Edition</i> インフラストラクチャ計画ガイド』を参照してください。

タスク	説明
インストーラファイルのダウンロードと抽出	<p>インストールファイルを Informatica 電子ソフトウェアダウンロードサイトからマシン上のディレクトリにダウンロードします。圧縮されたファイルを抽出するには、空のフォルダも抽出する抽出ユーティリティを使用します。</p> <p>次のインストールファイルをダウンロードして抽出します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- オペレーティングシステムに対応する MDM Hub インストーラ</li> <li>- データベースファイル</li> <li>- オペレーティングシステムに対応する ActiveVOS サーバーインストーラ</li> </ul> <p>Informatica プラットフォームをインストールする場合は、次のファイルをダウンロードします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- オペレーティングシステムに対応する Informatica プラットフォームのサーバーインストールファイル</li> <li>- Informatica プラットフォームのクライアントインストールファイル</li> </ul>
ライセンスキーの確認	<p>ライセンスキーを持っていることを確認します。ライセンスキーは、Informatica から送られてきた電子メールメッセージ内にあります。製品をインストールするユーザーアカウントにアクセス可能なディレクトリに、ライセンスキーファイルをコピーします。</p> <p>ライセンスキーがない場合は、Informatica グローバルカスタマサポートにお問い合わせください。</p>
インストールの記録を保存するディレクトリの作成	<p>検証結果、環境レポート、データベースデバッグログ、ログファイルなどの、インストールファイルのコピーを保存するディレクトリを作成します。</p> <p>例えば、ディレクトリ <code>install_doc</code> を作成します。インストールのトラブルシューティングを行う場合は、インストールの記録を保存するディレクトリのアーカイブファイルを作成し、それを Informatica グローバルカスタマサポートに送信して、分析を求めることができます。</p>

## 環境の準備

MDM Hub をインストールする前に、インストール環境を準備します。

次の表で、インストール用の環境を準備するために実行するタスクについて説明します。

タスク	説明
最小システム要件の確認	<p>マシンが、MDM Hub インストールのハードウェア要件とソフトウェア要件を満たしていることを確認します。ハードウェア要件は、データ、処理容量、およびビジネスルールによって異なります。</p> <p>MDM Hub をインストールするには、マシンが次の最小システム要件を満たしている必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>- ディスク容量。4.9GB</li><li>- 開発環境の RAM。4GB</li></ul> <p>MDM Hub コンポーネントのランタイム物理メモリ要件を確認するには、次の計算式を使用してください。</p> <p>Total run-time memory requirement for MDM Hub components = JDK JVM max heap size of the application server + operating system native heap size</p>
Java Development Kit (JDK) のインストール	<p>MDM Hub をインストールするマシンに、サポートされているバージョンの JDK をインストールします。JDK は、MDM Hub インストーラにバンドルされていません。</p> <p><b>注:</b> アプリケーションサーバーマシンと Hub コンソールを起動するマシンで、同じ Java バージョンを使用します。</p> <p>HP-UX に Informatica Platform をインストールするには、サポートされているバージョンの JDK を HP-UX マシンにインストールします。JDK は、HP-UX 用の Informatica Platform インストーラにバンドルされていません。JDK は、他のすべてのプラットフォーム用の Informatica Platform インストーラにはバンドルされています。</p>
Visual Studio 2015 の Visual C++再配付可能パッケージのインストール (Windows のみ)	<p>Windows システムでは、MDM Multidomain Edition は名前検索機能と照合機能をサポートするために Visual Studio 2015 の Visual C++再配付可能パッケージが必要です。</p>
環境変数の設定	<p>MDM Hub をインストールするための環境変数を設定します。</p> <p>適切な JDK を使用するには、次の環境変数を、JDK ディレクトリを参照するように設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>- JAVA_HOME。必須</li><li>- PATH。必須</li><li>- INFA_JDK_HOME。オプション。AIX または HP-UX に Informatica プラットフォームをインストールする場合は必須です。</li></ul> <p>Oracle 用の正しいロケール動作を設定するには、Oracle ローダー、MDM Hub コンポーネントなどのクライアントアプリケーション環境に、NLS_LANG 環境変数を設定します。</p> <p>NLS_LANG パラメータは以下の形式で指定します。</p> <p>NLS_LANG = &lt;language&gt;_&lt;territory&gt;.&lt;character set&gt;</p> <p><b>注:</b> 中国語、日本語、韓国語、またはアクセント記号付き文字を含んだレコードを保存および検索する場合は、文字セットを UTF-8 に設定します。</p> <p>NLS_LANG の設定の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。</p> <p>ドメインでのセキュリティが有効になっている Informatica プラットフォームをインストールするには、INFA_TRUSTSTORE 環境変数を、次のディレクトリを参照するように設定します。</p> <p>&lt;Informatica platform installation directory&gt;/Client/clients/shared/security</p>

タスク	説明
オペレーティングシステムのロケールの設定	Hub サーバー、MDM Hub マスタデータベース、オペレーショナル参照ストア、Hub コンソールに、同じオペレーティングシステムのロケールを設定します。
UNIX での X Window System の設定	インストーラを UNIX 上でグラフィカルモードで実行する場合は、X Window System を設定します。X Window System は、グラフィック表示サーバーです。X Window System の設定の詳細については、オペレーティングシステムのマニュアルを参照してください。

製品要件およびサポート対象プラットフォームの詳細については、次の Informatica Network で Product Availability Matrix を参照してください。

<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices>

## データベース環境の設定

MDM Hub マスターデータベースおよびオペレーショナル参照ストアを作成する前に、データベース環境を設定します。

データベース環境を設定するには、次のタスクを実行します。

1. Oracle のインストールおよび設定
2. データベースインスタンスを設定します。
3. データベースの特権と接続を設定します。
4. ActiveVOS<sup>(R)</sup>スキーマを作成します。

### 手順 1. Oracle のインストールと設定

Oracle のマニュアルに記載されている手順に従って、Oracle データベースをインストールして設定できます。

次の表に、Oracle のインストールおよび設定のタスクを示します。

タスク	説明
Oracle のインストール	サポートされているバージョンの Oracle データベースのインストール <b>注:</b> Oracle マルチテナント機能を使用する場合は、MDM Hub インストール用にプラグابلデータベース (PDB) を設定します。
クライアントとユーティリティのインストール	MDM Hub との通信や MDM Hub プロセスの実行をする Oracle クライアントおよびユーティリティソフトウェアをインストールします。 Hub サーバーまたはプロセスサーバーを実行する各マシンに、次のソフトウェアをインストールします。 - Oracle クライアント - SQL*Loader



タスク	説明
リサイクルビンの無効化	リサイクルビン (USER_RECYCLEBIN と DBA_RECYCLEBIN) を無効にします。リサイクルビンによって MDM Hub のプロセスが妨害されることがあります。 リサイクルビンをシステムレベルまたはセッションレベルで無効にします。また、リサイクルビン内の既存のオブジェクトを消去します。
初期化パラメータの設定	Oracle 初期化パラメータを init.ora ファイルに設定します。 Oracle 初期化パラメータの詳細については、『 <i>MDM Multidomain Edition パフォーマンスのチューニングの概要</i> 』を参照してください。

Oracle のインストールと設定の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

## 手順 2. データベースインスタンスの設定

Oracle データベースをインストールして設定したら、データベースインスタンスを作成して設定します。

次の表で、データベースインスタンスを設定するために実行する必要があるタスクについて説明します。

タスク	説明
データベースインスタンスの作成	データベースインスタンスを作成します。MDM Hub に複数のオペレーショナル参照ストアがあり、それらが異なるホストマシンに分散されている場合は、各ホストマシン上でデータベースインスタンスを作成します。
テーブルスペースの作成	MDM Hub データ用のテーブルスペースを作成します。MDM Hub にロードするデータ量に基づいて、デフォルトのテーブルスペースサイズおよびデータファイル数を調整します。 次のテーブルスペースを作成します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>- CMX_DATA。MDM Hub のメタデータおよびユーザーデータが含まれます。</li> <li>- CMX_INDX。MDM Hub で作成および使用されるインデックスが含まれます。</li> <li>- CMX_TEMP。Informatica MDM Hub 用の一時テーブルが含まれます。</li> </ul>

### オンプレミスのテーブルスペースの作成

オンプレミスの Oracle を使用する場合、ローカル管理または手動設定を行う永続テーブルスペースとしてテーブルスペースを作成します。

**注:** 大量のデータロードのデータベース管理を簡素化するには、ビッグファイルのテーブルスペースを作成します。ただし、必要に応じてスモールファイルのテーブルスペースを作成できます。

1. SYSTEM などのデータベース管理者ユーザーとして Oracle にログインします。
2. テーブルスペースを作成します。

次の表に、テーブルスペースを作成するサンプルの SQL 文を示します。

デフォルトのテーブルスペース名	サンプルの SQL 文
CMX_DATA	<pre>CREATE BIGFILE TABLESPACE CMX_DATA NOLOGGING DATAFILE '&lt;Oracle install directory&gt;/CMX_DATA1.dbf' SIZE 2048M REUSE EXTENT MANAGEMENT LOCAL;</pre> <p>リポジトリマネージャの検証エラーを防止するために、デフォルトのテーブルスペース名を変更しないでください。</p>
CMX_INDX	<pre>CREATE BIGFILE TABLESPACE CMX_INDX NOLOGGING DATAFILE '&lt;Oracle install directory&gt;/CMX_INDX1.dbf' SIZE 2048M REUSE EXTENT MANAGEMENT LOCAL;</pre>
CMX_TEMP	<pre>CREATE BIGFILE TABLESPACE CMX_TEMP NOLOGGING DATAFILE '&lt;Oracle install directory&gt;/CMX_TEMP1.dbf' SIZE 2048M REUSE EXTENT MANAGEMENT LOCAL;</pre>

## Amazon Relational Database Service でのテーブルスペースの作成

Amazon Relational Database Service (RDS) for Oracle を使用する場合、Amazon RDS でテーブルスペースを永続テーブルスペースとして作成します。

**注:** 大量のデータロードのデータベース管理を簡素化するには、ビッグファイルのテーブルスペースを作成します。ただし、必要に応じてスモールファイルのテーブルスペースを作成できます。

1. データベース管理者ユーザーとして Amazon RDS for Oracle にログインします。
2. テーブルスペースを作成します。

次の表に、テーブルスペースを作成するサンプルの SQL 文を示します。

デフォルトのテーブルスペース名	サンプルの SQL 文
CMX_DATA	<pre>CREATE BIGFILE TABLESPACE CMX_DATA DATAFILE SIZE 2048M AUTOEXTEND ON NEXT 2048M;</pre> <p>リポジトリマネージャの検証エラーを防止するために、デフォルトのテーブルスペース名を変更しないでください。</p>
CMX_INDX	<pre>CREATE BIGFILE TABLESPACE CMX_INDX DATAFILE SIZE 2048M AUTOEXTEND ON NEXT 2048M;</pre>
CMX_TEMP	<pre>CREATE BIGFILE TABLESPACE CMX_TEMP DATAFILE SIZE 2048M AUTOEXTEND ON NEXT 2048M;</pre>

## カスタムテーブルスペース名用のデータベース環境の設定

使用するテーブルスペース名が、CMX\_INDX または CMX\_TEMP のデフォルトテーブルスペース名と異なる場合は、初期化パラメータの DEFERRED\_SEGMENT\_CREATION を無効にします。このパラメータを無効にするのは、リポジットリマネージャの検証エラーを防止するためです。

- ▶ DEFERRED\_SEGMENT\_CREATION を無効にするには、次の SQL 文を実行して、データベースを再起動します。  
ALTER SYSTEM SET DEFERRED\_SEGMENT\_CREATION=FALSE SCOPE=BOTH;

## 手順 3. データベース特権と接続の設定

データベースの特権と接続を設定します。

次の表で、データベースの特権と接続を設定するために実行する必要のあるタスクについて説明します。

タスク	説明
データベース管理者ユーザーへの特権の付与	<p>データベース管理者ユーザーを使用して MDM Hub マスタデータベースとオペレーショナル参照ストアを作成する場合は、データベース管理者ユーザーに特権を付与します。ユーザーは、分散トランザクションと DBMS_LOCK のオプションを付与する特権を持っている必要があります。</p> <p>データベース管理者ユーザーに特権を付与するには、オプションを付与する特権を持つユーザーとしてデータベースに接続し、次の SQL 文を実行します。</p> <pre>GRANT SELECT ON sys.pending_trans\$ TO &lt;DBA user&gt; with grant option; GRANT SELECT ON sys.dbms_pending_transactions TO &lt;DBA user&gt; with grant option; GRANT SELECT ON sys.dbms_2pc_pending TO &lt;DBA user&gt; with grant option; GRANT EXECUTE ON sys.dbms_xa TO &lt;DBA user&gt; with grant option; GRANT EXECUTE ON sys.dbms_lock TO &lt;DBA user&gt; with grant option;</pre>
Oracle TNS 名の追加	<p>Oracle データベースに接続するには、TNS 名前エントリを Hub サーバーおよび Process サーバーマシン上の tnsnames.ora ファイルに追加します。</p> <p>TNS 名前エントリを追加するには、次の構文を使用します。</p> <pre>&lt;TNS NAME&gt; = (DESCRIPTION =   (ADDRESS_LIST =     (ADDRESS = (PROTOCOL = TCP)(Host = &lt;Oracle server host name&gt;)(Port = &lt;Oracle server port&gt;))   ) (CONNECT_DATA =   (SERVICE_NAME = &lt;Oracle SID&gt;) ) )</pre> <p><b>注:</b> Hub サーバーおよび Process サーバーマシン上の TNS 名は同じでなければなりません。</p>
データベース接続のテスト	<p>Hub サーバーまたは Process サーバーを実行する各マシンから、データベースへの接続をテストします。</p> <p>SQL*Plus で、次の SQL 文の構文を使用します。</p> <pre>sqlplus &lt;user name&gt; /&lt;password&gt;@&lt;TNS Name&gt;</pre>

## 手順 4.ActiveVOS スキーマの作成

ActiveVOS をインストールする場合は、ActiveVOS データベーススキーマを作成する必要があります。スキーマを作成するには、create\_bpm スクリプトを実行します。

**注:** Oracle マルチテナント機能を使用する場合は、プラグブルデータベース (PDB) に ActiveVOS データベーススキーマを作成します。

1. コマンドプロンプトを開き、次のディレクトリに移動します。

<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/database/bin

2. 次のコマンドを実行します。

UNIX の場合: ./sip\_ant.sh create\_bpm

Windows の場合: sip\_ant.bat create\_bpm

3. 表示されるプロンプトに回答します。

プロンプトでは、デフォルトのテキストが括弧内に表示されます。デフォルト値を使用して次のプロンプトに進むには、**Enter** キーを押します。

プロパティ	説明
Database Type	データベースのタイプ。Oracle データベースの場合、Oracle を指定します。データベースタイプは、MDM Hub マスターデータベースとオペレーショナル参照ストア用に選択したデータベースタイプと同じである必要があります。
Oracle Connection Type	接続タイプ。以下の値を使用する。 - SERVICE。Oracle に接続するサービス名を使用する。 - SID。Oracle に接続する Oracle システム ID を使用する。
ActiveVOS Database Host Name	データベースをホストするマシンの名前。
ActiveVOS Database Port	データベースリスナーが使用するポート番号。
データベースサービス名	Oracle サービスの名前。このプロパティは、選択した Oracle 接続タイプが SERVICE の場合に必要になります。
Oracle Net Connect Identifier (TNS Name)	Oracle TNS 名。
Database SID	Oracle システム ID の名前。このプロパティは、選択した Oracle 接続タイプが SID の場合に必要になります。
DBA User Name	データベース管理者ユーザーのユーザー名。
DBA Password	管理者ユーザーのパスワード。
ActiveVOS User Name	ActiveVOS サーバーの管理者ユーザーの名前。
ActiveVOS User Password	管理者ユーザーのパスワード。

プロパティ	説明
ActiveVOS User Tablespace	MDM ワークフローに関連するレコードを格納するテーブルスペースの名前。
ActiveVOS User Temp Tablespace	一時テーブルスペースの名前。

4. スキーマを作成したら、次のディレクトリの sip\_ant.log ファイルを確認します。

<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/database/bin

sip\_ant.log ファイルには、ActiveVOS データベースのスキーマを作成するために sip\_ant スクリプトを実行するときに発生するすべてのエラーが記録されます。

## アプリケーションサーバー環境の設定

MDM Hub は、WebLogic クラスタ環境またはスタンドアロンの WebLogic インスタンスにインストールできます。WebLogic のマニュアルに記載されている説明に従って、WebLogic をインストールし、設定します。

**注:** データベースサーバーと同じタイムゾーンのアプリケーションサーバーをインストールします。

Hub サーバーと Process サーバーを WebLogic アプリケーションサーバーにインストールする前に、WebLogic のドメインを作成します。WebLogic の管理コンソールを使用して、Hub サーバーおよび Process サーバーのアプリケーションのためのドメインを作成します。詳細については、WebLogic のマニュアルを参照してください。

## Java 仮想マシンの設定

Java 仮想マシン (JVM) を設定するには、JAVA\_OPTIONS 環境変数を使用して、Java のオプションを設定します。

Java のオプションは、次のファイルで設定できます。

UNIX の場合: <WebLogic domain: WebLogic ドメイン>/bin/setDomainEnv.sh

Windows の場合: <WebLogic domain: WebLogic ドメイン>\bin\setDomainEnv.cmd

次の表で、Java のオプションを説明します。

Java のオプション	説明
-server	起動速度は遅くなりますが、後続の操作は高速になります。
-Djgroups.bind_addr	JGroup がメッセージの送受信を行う必要があるインターフェース。 マルチノード環境またはクラスタ環境が必要です。各ノードが専用のネットワークインターフェースにバインドされていることを確認します。
-Djava.net.preferIPv4Stack	Java で Internet Protocol バージョン 4 (IPv4) を使用するかどうかを指定します。オペレーティングシステムで Internet Protocol バージョン 6 (IPv6) を使用する場合は、true に設定します。

Java のオプション	説明
-Doracle.jdbc.J2EE13Compliant	oracle.jdbc.J2EE13Compliant システム変数を設定します。true に設定します。 このパラメータを true に設定しない場合、Java データベース接続（JDBC）の問題が発生する可能性があります。
-Djavax.wsdl.factory.WSDLFactory	WebLogic 12.2.1 以降の環境でデフォルトの名前空間プレフィックスを持つサービス WSDL を呼び出すために必要です。com.ibm.wsdl.factory.WSDLFactoryImpl に設定します。
-DANTLR_USE_DIRECT_CLASS_LOADING	MDM Hub がデプロイされている WebLogic 12.2.1 以降の環境を起動するために必要です。true に設定します。
-Dmdm.node.groupid	MDM Hub 実装で Java 仮想マシンのグループ ID を指定します。Hub サーバーとプロセスサーバーを論理的にグループ化する場合にのみ必要です。
-De360.mdm.host	アプリケーションサーバーホスト。 Java のオプションは、次のいずれかのシナリオで設定します。 - MDM Hub アプリケーションを管理対象サーバーにのみデプロイする場合は、各管理対象サーバーのスクリプトに Java のオプションを追加します。管理対象サーバーの IP アドレスまたはシンボリック名に設定します。 - MDM Hub アプリケーションを 7001 以外の WebLogic ポートにデプロイする場合は、アプリケーションサーバーの起動スクリプトに Java のオプションを追加します。WebLogic ホストの IP アドレスまたはシンボリック名に設定します。 このパラメータを設定しない場合、エンティティ 360 フレームワークに基づく Informatica Data Director の画面が期待どおりに動作しない可能性があります。
-De360.mdm.port	アプリケーションサーバーのポート。 Java のオプションは、次のいずれかのシナリオで設定します。 - MDM Hub アプリケーションを管理対象サーバーにのみデプロイする場合は、各管理対象サーバーのスクリプトに Java のオプションを追加します。管理対象サーバーのポート番号に設定します。 - MDM Hub アプリケーションを 7001 以外の WebLogic ポートにデプロイする場合は、アプリケーションサーバーの起動スクリプトに Java のオプションを追加して、そのポート番号に設定します。 このパラメータを設定しない場合、エンティティ 360 フレームワークに基づく Informatica Data Director の画面が期待どおりに動作しない可能性があります。
-Dfile.encoding -Dweblogic.http.URIDecodeEncoding	Informatica Data Director を使用する場合、および REST API を使用してレコードを検索する場合に必要です。 UTF-8 文字を含むレコードを確実に検索および保存できるようにするには、両方の Java のオプションを UTF-8 に設定します。
-DFrameworksLogConfigurationPath	log4j.xml ファイルのコンフィギュレーションパスを設定します。
-DUseSunHttpHandler	MDM Hub と Informatica プラットフォーム間の HTTP 接続で、WebLogic が Sun HTTP ハンドラを使用するかどうかを指定します。true に設定します。

Java のオプション	説明
-Dtask.pageSize=<タスクの最大数>	各要求に対して取得される ActiveVOS タスクの最大数を指定します。デフォルトは 5000 です。環境に多数のタスクがある場合は、この数値を増やします。
-Dstricttransportsecurity.flag	HTTP 要求を使用して Informatica Data Director にアクセスするすべての試行を、代わりに HTTPS 要求に変換する必要があるかどうかを指定します。true に設定します。
WLS_MEM_ARGS_64BIT	メモリ変数。この変数を適切な値に設定します。
-Xms	初期ヒープサイズ 2048m に設定します。
-Xmx	最大 JVM ヒープサイズ。4 GB 以上に設定します。 例えば、-Xmx を 4096m に設定するには、次の JAVA_OPTIONS 環境変数設定を使用します。 <pre>set "JAVA_OPTIONS=-server ... -Xmx4096m"</pre>
XX:+UseCodeCacheFlushing	コードキャッシュがいっぱいになったときに、JVM がコンパイルされたコードを破棄するかどうかを指定します。
-XX:ReservedCodeCacheSize	JIT コードのキャッシュサイズ。MDM Hub 環境のパフォーマンスを高めるには、512m に設定します。

## Java 仮想マシンの論理的なグループ化の例

Java 仮想マシン（JVM）をグループ化することにより、Hub サーバーとプロセスサーバーの論理グループを取得できます。Hub サーバーとプロセスサーバーのアプリケーションを論理 JVM グループにデプロイすると、アプリケーション間のすべての通信がグループ内にとどまります。JVM をグループ化するには、MDM Hub 環境の各 JVM にグループ ID を割り当てます。

**注:** プロセスサーバーのグループ化は、クレンジングと一致プロセスのみに適用されます。Zookeeper サーバーとして有効になっており、スマート検索が有効になっているプロセスサーバーは、インデックス作成と検索処理のためにすべてのグループで使用できます。

次の表は、論理 JVM グループの例を示しています。

JVM グループ	JVM	Hub サーバー	プロセスサーバー
Group1	JVM1	○	はい
Group1	JVM4	-	○
Group2	JVM2	○	はい
Group3	JVM3	-	○

JVM1 では、起動スクリプトに次の Java オプションを追加します。

```
-Dmdm.node.groupid=Group1
```

JVM2 では、起動スクリプトに次の Java オプションを追加します。

```
-Dmdm.node.groupid=Group2
```

JVM3 では、起動スクリプトに次の Java オプションを追加します。

```
-Dmdm.node.groupid=Group3
```

JVM4 では、起動スクリプトに次の Java オプションを追加します。

```
-Dmdm.node.groupid=Group1
```

JVM を設定し、Hub サーバーとプロセスサーバーをデプロイすると、グループには次の特性があります。

- Group1 には 2 つのプロセスサーバーがあり、Group2 には 1 つのプロセスサーバーがあり、Group3 には 1 つのプロセスサーバーがあります。
- すべてのクレンジングとバッチ呼び出しは、スマート検索を除き、自分のグループにとどまります。例えば、Group1 の Hub サーバーでのリアルタイム呼び出しは、Group1 プロセスサーバー（JVM1 および JVM4）にのみ影響します。

## WebLogic Server 認証の無効化

MDM Hub は、WebLogic Server 認証を無効にする必要がある HTTP 基本認証を使用します。WebLogic Server 認証を無効にするには、config.xml ファイルを編集します。

1. 次の WebLogic ディレクトリに移動します。

```
<WebLogic installation directory: Weblogicのインストールディレクトリ>/user_projects/domains/<user domain>/config
```

2. テキストエディタで config.xml ファイルを開きます。

3. <security-configuration>要素内に次の要素を追加します。

```
<enforce-valid-basic-auth-credentials>
false
</enforce-valid-basic-auth-credentials>
```

## ActiveVOS コンソール管理ユーザーの作成

ActiveVOS を使用する場合、abAdmin ロールを使用して ActiveVOS コンソールの管理者ユーザーを作成します。管理者ユーザーを作成しない場合は、Hub サーバーのデプロイメントに失敗します。Hub サーバーインストーラから ActiveVOS コンソールの管理者ユーザーの資格情報を入力するように要求されたら、ActiveVOS コンソールの管理者ユーザー名およびパスワードを使用します。

1. WebLogic コンソールにログインします。
2. abAdmin ロールを作成します。
3. ActiveVOS コンソール管理ユーザーを作成します。
4. 管理者ユーザーを abAdmin ロールに割り当てます。



# アプリケーションサーバーの追加設定（オプション）

MDM Hub 環境の要件に基づいて、WebLogic の追加設定を行います。

次の表に、実行可能な設定を示します。

設定	説明
スタンドアロンプロセスサーバーインスタンス用の WebLogic の設定	次のシナリオでは、スタンドアロンプロセスサーバーインスタンス用に WebLogic を設定する必要があります。 <ul style="list-style-type: none"><li>- Hub サーバーがインストールされていない WebLogic インスタンスに Process サーバーインスタンスをインストールする必要がある。</li><li>- 複数のスタンドアロン Process サーバーインスタンスをインストールする。</li></ul>
複数の MDM Hub マスタデータベース用の WebLogic の設定	複数の MDM Hub マスタデータベースインスタンスを設定する場合に必要です。
HTTPS プロトコルの設定	MDM Hub 通信用に HTTPS プロトコルを設定する場合に必要です。
Informatica プラットフォームの JTA タイムアウトの設定	Informatica プラットフォームをインストールする場合に必要です。

## スタンドアロンプロセスサーバーインスタンス用の WebLogic の設定

複数のスタンドアロン Process サーバーインスタンスをインストールする場合、適切なデータソースを使用するように WebLogic を設定します。また、Hub サーバーをインストールしていない WebLogic インスタンスに Process サーバーインスタンスをインストールする場合、データソースを設定します。

以下のタスクを実行して、適切なデータソースを使用するように WebLogic を設定します。

1. JDBC ドライバをインストールします。
2. MDM Hub マスタデータベースのデータソースを作成します。
3. オペレーショナル参照ストアのデータソースを作成します。

### 手順 1. JDBC ドライバのインストール

MDM Hub マスタデータベースとオペレーショナル参照ストア（ORS）のデータソースを作成する前に、JDBC ドライバをインストールします。

サポートされているバージョンの JDBC ドライバの取得方法については、Oracle にお問い合わせください。

1. JDBC ドライバを次のディレクトリにコピーします。  
<WebLogic installation directory: Weblogic のインストールディレクトリ>/wlserver/server/lib
2. 次のファイルの \_\_CLASSPATH 変数に、JDBC ドライバへのパスを追加します。  
UNIX の場合:<WebLogic domain: WebLogic ドメイン>/bin/setDomainEnv.sh  
Windows の場合:<WebLogic domain: WebLogic ドメイン>\bin\setDomainEnv.cmd  
**注:** 他の WebLogic Server ライブラリへのパスの前に、JDBC ドライバへのパスを配置します。

## 手順 2.MDM Hub マスタデータベースのデータソースの作成

JDBC ドライバのインストール後、Process サーバマシンで、MDM Hub マスタデータベースのデータソースを作成します。

1. WebLogic 管理コンソールで、**【ロックして編集】** ボタンをクリックしてロックを取得します。
2. **【サービス】 > 【JDBC】 > 【データソース】** をクリックし、**【新規作成】** をクリックします。  
**【JDBC データソースのプロパティ】** ページが表示されます。
3. 以下のデータソースのプロパティを指定してください。

プロパティ	説明
名前	JDBC データソースの名前。「MDM Master Data Source」という名前を付けます。
JNDI 名	JDBC データソースが関連付けられる場所への JNDI パス。jdbc/siperian-cmx_system-ds と指定します。
データベースタイプ	接続先にするデータベースのタイプ。 <b>【Oracle】</b> を選択します。
データベースドライバ	データベースへの接続に使用する JDBC ドライバ。 <b>【Oracle ドライバ (Thin XA)】</b> を選択します。

4. **【次へ】** をクリックし、**【次へ】** をもう一度クリックします。  
**【接続プロパティ】** ページが表示されます。
5. 次の接続プロパティの値を入力します。

プロパティ	説明
データベース名	接続するデータベースの名前。
ホスト名	データベースをホストするサーバーの DNS 名または IP アドレス。
ポート	データベースサーバーが接続リクエストをリスンするポート。
データベースユーザー名	データソース内の各接続に使用するデータベースユーザー名。
パスワード	データベースユーザーアカウントのパスワード。
パスワードの確認	データベースユーザーアカウントのパスワード。

6. **【次へ】** をクリックします。  
**【データベース接続のテスト】** ページが表示されます。
7. **【設定のテスト】** をクリックして、ドライバ接続をテストします。  
テストに失敗した場合は、**【接続プロパティ】** ページ内の値を更新し、成功するまで接続を繰り返し試行する必要があります。
8. **【次へ】** をクリックし、データソースをデプロイするサーバーを選択します。
9. **【完了】** をクリックし、**【変更のアクティブ化】** をクリックします。

### 手順 3. オペレーショナル参照ストアのデータソースの作成

Process サーバマシンで、各オペレーショナル参照ストアのデータストアを作成します。

1. WebLogic 管理コンソールで、**[ロックして編集]** ボタンをクリックしてロックを取得します。
2. **[サービス] > [JDBC] > [データソース]** をクリックし、**[新規作成]** をクリックします。  
**[JDBC データソースのプロパティ]** ページが表示されます。
3. 以下のデータソースのプロパティを指定してください。

プロパティ	説明
名前	JDBC データソースの名前。「MDM ORS Data Source」という名前を付けます。
JNDI 名	JDBC データソースが関連付けられる場所への JNDI パス。「jdbc/siperian- <oracle host name>-<oracle sid>-<Operational reference Store name>-ds」と指定 します。
データベースタイプ	接続先にするデータベースのタイプ。 <b>[Oracle]</b> を選択します。
データベースドライ バ	データベースへの接続に使用する JDBC ドライバ。 <b>[Oracle ドライバ (Thin XA)]</b> を選択します。

4. **[次へ]** をクリックし、**[次へ]** をもう一度クリックします。  
**[接続プロパティ]** ページが表示されます。
5. 次の接続プロパティの値を入力します。

プロパティ	説明
データベース名	接続するデータベースの名前。
ホスト名	データベースをホストするサーバーの DNS 名または IP アドレス。
ポート	データベースサーバーが接続リクエストをリスンするポート。
データベースユーザー名	データソース内の各接続に使用するデータベースユーザー名。
パスワード	データベースユーザーアカウントのパスワード。
パスワードの確認	データベースユーザーアカウントのパスワード。

6. **[次へ]** をクリックします。  
**[データベース接続のテスト]** ページが表示されます。
7. **[設定のテスト]** をクリックして、ドライバ接続をテストします。  
テストに失敗した場合は、**[接続プロパティ]** ページ内の値を更新し、成功するまで接続を繰り返し試行す  
る必要があります。
8. **[次へ]** をクリックし、データソースをデプロイするサーバーを選択します。
9. **[完了]** をクリックし、**[変更のアクティブ化]** をクリックします。

## 複数の MDM Hub マスターデータベース用の WebLogic の設定

複数の MDM Hub マスターデータベースインスタンスを設定する場合、MDM Hub マスターデータベースインスタンスと同数の WebLogic ドメインを設定します。各 MDM Hub マスターデータベースインスタンスには、独自の MDM Hub インスタンスが必要です。そのため、同数の WebLogic ドメインを作成して各 MDM Hub インスタンスを個別の WebLogic ドメインでデプロイします。

## HTTPS プロトコルの設定

MDM Hub の通信には HTTPS プロトコルを設定できます。WebLogic Server 管理コンソールを使用して HTTPS プロトコルを設定します。または、デフォルトの JDK セキュリティ証明書を使用して HTTPS を有効化できます。

1. WebLogic Server 管理コンソールの **ホームページ** で、**[Environment]** セクションの下にある **[Servers]** をクリックします。  
**[Summary of Servers]** ページが表示されます。
2. サーバーのリストで、**[AdminServer(admin)]** リンクをクリックします。  
**AdminServer の設定** ページが表示されます。
3. **[SSL Listen Port Enabled]** オプションを有効にして、**[SSL Listen Port]** フィールドにポート番号を入力します。
4. **[SSL]** タブをクリックします。
5. **[Hostname Verification]** リストで **[None]** を選択し、**[Save]** をクリックします。

## Informatica プラットフォームの JTA タイムアウトの設定

Informatica プラットフォームをインストールする場合、Java Transaction API (JTA) タイムアウトを設定します。WebLogic Server 管理コンソールを使用して JTA タイムアウトを設定します。

1. WebLogic Server 管理コンソールの **ホームページ** で、**[Services Configurations]** セクションで **[JTA Configuration]** リンクをクリックします。
2. **[Timeout Seconds]** フィールドで、JTA タイムアウトを 1000 に設定します。

## サイレントインストールのためのプロパティファイルの設定

サイレントモードでユーザー操作を省いて Hub サーバーとプロセスサーバーをインストールする場合は、インストールプロパティファイルを設定します。複数回のインストールや、マシクラスタへのインストールが必要なときは、サイレントモードでの実行をお勧めします。サイレントインストールでは、進行状況や失敗に関するメッセージが表示されません。

インストーラによりサイレントインストールプロパティファイルが読み込まれ、インストールオプションが決定されます。プロパティファイルが正しく設定されていることを確認してください。サイレントインストールプロセスは、設定に誤りがあっても正常に完了する場合があります。

設定可能なサイレントインストールプロパティファイルを次に示します。

- Informatica プラットフォーム。MDM Hub のインストールの一環として Informatica プラットフォームをインストールする場合に必要です。

- Hub サーバー。Hub サーバーをサイレントモードでインストールする場合に必要です。
- プロセスサーバー。プロセスサーバーをサイレントモードでインストールする場合に必要です。

**注:** サイレントインストールプロパティファイルを手動で設定しない場合は、インストール時に `-r` コマンドラインオプションを使用するとサイレントインストールプロパティファイルを生成できます。

## Informatica プラットフォームのプロパティファイルの設定

MDM Hub インストールの一環として Informatica プラットフォームをインストールするには、Informatica プラットフォームのプロパティファイルを設定します。プロパティファイルにインストールのオプションを指定して、このファイルを「`SilentInput.properties`」という名前で保存します。

1. `<Distribution directory>/Informatica platform`ディレクトリで、`SilentInput.properties` ファイルを見つけます。
2. ファイルのバックアップコピーを作成します。
3. テキストエディタで `SilentInput.properties` ファイルを開きます。
4. インストールパラメータの値を設定し、ファイルを保存します。

## Hub サーバーのプロパティファイルの設定

Hub サーバーをサイレントモードでインストールする場合、Hub サーバーのプロパティファイルを設定します。プロパティファイルにインストールのオプションを指定して、このファイルを新しい名前で保存します。

1. `silentInstallServer_sample.properties` ファイルを `/silent_install/mrmserver` ディレクトリで見つけます。
2. `silentInstallServer_sample.properties` ファイルのバックアップコピーを作成します。
3. このファイルをテキストエディタで開き、インストールパラメータの値を設定します。
4. プロパティファイルを `silentInstallServer.properties` などの新しい名前で保存します。

## プロセスサーバーのプロパティファイルの設定

プロセスサーバーをサイレントモードでインストールする場合、Hub サーバーのプロパティファイルを設定します。プロパティファイルにインストールのオプションを指定して、このファイルを新しい名前で保存します。

1. `silentInstallCleanse_sample.properties` ファイルを `/silent_install/mrmcleanse` ディレクトリで見つけます。
2. `silentInstallCleanse_sample.properties` ファイルのバックアップコピーを作成します。
3. このファイルをテキストエディタで開き、インストールパラメータの値を設定します。
4. プロパティファイルに `silentInstallCleanse.properties` などの名前を付けて保存します。

## 第 3 章

# Hub ストアのインストール

この章では、以下の項目について説明します。

- [MDM Hub マスターデータベースの作成, 30 ページ](#)
- [オペレーショナル参照ストアの作成, 32 ページ](#)
- [MDM Hub マスターデータベースへのメタデータのインポート, 34 ページ](#)
- [オペレーショナル参照ストアへのメタデータのインポート, 35 ページ](#)

## MDM Hub マスターデータベースの作成

Oracle をインストールした後、MDM Hub マスターデータベースを作成します。MDM Hub マスターデータベースのデフォルト名は CMX\_SYSTEM ですが、カスタム名を使用できます。

**注:** 配布ディレクトリ内のフォルダ名を変更すると、メタデータのインポートが失敗します。

Oracle マルチテナント機能を使用する場合は、プラグブルデータベース（PDB）に MDM Hub マスターデータベースを作成します。

1. コマンドプロンプトを開き、次のディレクトリに移動します。  
<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/database/bin
2. MDM Hub マスターデータベースを作成するには、次のコマンドを実行します。  
UNIX の場合: ./sip\_ant.sh create\_system  
Windows の場合: sip\_ant.bat create\_system
3. 以下の表に説明する内容に従ってプロンプトに回答します。

**注:** プロンプトでは、デフォルトのテキストが括弧内に表示されます。デフォルト値を使用して次のプロンプトに進むには、**Enter** キーを押します。

プロンプト	説明
データベースタイプを入力 (ORACLE、MSSQL、DB2)	データベースタイプ。ORACLE を指定。
Oracle 接続タイプ (SERVICE、SID) を入力。[SERVICE]	接続タイプ。以下の値を使用する。 - SERVICE。Oracle に接続するサービス名を使用する。 - SID。Oracle に接続する Oracle システム ID を使用する。 デフォルトは SERVICE。
データベースホスト名を入力 [localhost]	データベースを実行するホストの名前。デフォルトは localhost。 <b>重要:</b> クラスタ環境では、キャッシュの問題を回避するために、絶対ホスト名または IP アドレスを指定します。
データベースポート番号を入力します ([1521])	データベースリスナーが使用するポート番号。デフォルトは 1521。
マスタユーザー名を入力 [cmx_system]	MDM Hub マスタデータベースにアクセスするためのユーザー名。デフォルトは cmx_system です。
マスタデータベースのユーザーパスワードを入力	MDM Hub マスタデータベースにアクセスするためのパスワード。
データベースサービス名を入力 [orcl]	Oracle サービスの名前。このプロンプトは、選択した Oracle 接続タイプが SERVICE の場合に表示される。デフォルトは orcl。
Oracle Net の接続 ID (TNS 名) を入力。[orcl]	Oracle データベースに接続するために使用される TNS 名。デフォルトは orcl。
マスターデータベースの接続 URL: "jdbc:oracle:thin:@// <host_name>:<port>/<service_name>"。 接続 URL を変更しますか (y/n) [n]	Oracle 接続タイプ SERVICE の接続 URL。デフォルトの接続 URL を変更する場合は、y を入力する。デフォルトの接続 URL を使用する場合は、n を入力する。
データベース SID を入力。[orcl]	Oracle システム ID の名前。このプロンプトは、選択した Oracle 接続タイプが SID の場合に表示される。
リストからロケール名を入力します (de、en_US、fr、ja、ko、zh_CN) [en_US]	オペレーティングシステムのロケール。デフォルトは en_US。
DBA ユーザー名を入力 [SYS]	管理者ユーザーの名前。デフォルトは SYS。
DBA のパスワードを入力	管理者ユーザーのパスワード。
MDM インデックステーブルスペースの名前を入力 [CMX_INDX]	MDM Hub マスタデータベース用のインデックスコンポーネントが含まれているテーブルスペースの名前。デフォルトは CMX_INDX。

プロンプト	説明
MDM 一時テーブルスペース名の入力 (Oracle 一時テーブルスペースではない) [CMX_TEMP]	MDM Hub マスターデータベース用の一時コンポーネントが含まれているテーブルスペースの名前。デフォルトは CMX_TEMP。
Oracle 一時テーブルスペース名を入力 [TEMP]	Oracle 一時テーブルスペースの名前。デフォルトは TEMP。

4. MDM Hub マスターデータベースが正常に作成されていることを確認するには、次のディレクトリの sip\_ant.log を確認します。
- <MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/database/bin
- sip\_ant.log ファイルには、MDM Hub マスターデータベースを作成するために sip\_ant スクリプトを実行するときに発生するすべてのエラーが記録されます。

## オペレーショナル参照ストアの作成

インストール前のタスクを完了したら、オペレーショナル参照ストア（ORS）を作成します。ORS のデフォルト名は CMX\_ORS です。

**注:** 配布ディレクトリ内のフォルダ名を変更すると、メタデータのインポートが失敗します。

Oracle マルチテナント機能を使用する場合は、プラガブルデータベース（PDB）に ORS を作成します。

1. コマンドプロンプトを開き、次のディレクトリに移動します。  
<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/database/bin
2. ORS を作成するには、次のコマンドを実行します。  
UNIX の場合: ./sip\_ant.sh create\_ors  
Windows の場合: sip\_ant.bat create\_ors

3. 以下の表に説明する内容に従ってプロンプトに回答します。

**注:** プロンプトでは、デフォルトのテキストが括弧内に表示されます。デフォルト値を使用して次のプロンプトに進むには、**Enter** キーを押します。

プロンプト	説明
データベースタイプを入力 (ORACLE、MSSQL、DB2)	データベースタイプ。ORACLE を指定。
Oracle 接続タイプ (SERVICE、SID) を入力。 [SERVICE]	接続タイプ。以下の値を使用する。 - SERVICE。Oracle に接続するサービス名を使用する。 - SID。Oracle に接続する Oracle システム ID を使用する。 デフォルトは SERVICE。
オペレーショナル参照ストアスキーマのホスト名を入力 [localhost]	データベースを実行しているホストの名前。デフォルトは localhost。



プロンプト	説明
オペレーショナル参照ストアスキーマのポート番号を入力 [1521]	データベースリスナが使用するポート番号。デフォルトは 1521。
オペレーショナル参照ストアのデータベースサービス名を入力 [orcl]	Oracle サービスの名前。このプロンプトは、選択した Oracle 接続タイプが SERVICE の場合に表示される。
Oracle Net の接続 ID (TNS 名) を入力。[orcl]	Oracle TNS 名。デフォルトは orcl。
マスターデータベースの接続 URL: "jdbc:oracle:thin:@//<host_name>:<port>/ <service_name>"。 接続 URL を変更しますか (y/n) [n]	Oracle 接続タイプ SERVICE の接続 URL。デフォルトの接続 URL を変更する場合は、y を入力する。デフォルトの接続 URL を使用する場合は、n を入力する。
データベース SID を入力。[orcl]	Oracle システム ID の名前。このプロンプトは、選択した Oracle 接続タイプが SID の場合に表示される。
オペレーショナル参照ストアのデータベースユーザー名を入力[cmx_ors]	オペレーショナル参照ストアにアクセスするためのユーザー名。デフォルトは cmx_ors。
オペレーショナル参照ストアのデータベースのユーザーパスワードを入力	オペレーショナル参照ストアにアクセスするためのパスワード。
リストからロケール名を入力します (de、en_US、fr、ja、ko、zh_CN) [en_US]	オペレーティングシステムのロケール。
DBA ユーザー名を入力 [SYS]	管理者ユーザーの名前。デフォルトは SYS。
DBA のパスワードを入力	管理者ユーザーのパスワード。
MDM インデックステーブルスペースの名前を入力 [CMX_INDX]	オペレーショナル参照ストア用のインデックスコンポーネントが含まれているテーブルスペースの名前。デフォルトは CMX_INDX。
MDM 一時テーブルスペースの名前を入力 [CMX_TEMP]	オペレーショナル参照ストア用の一時コンポーネントが含まれているテーブルスペースの名前。デフォルトは CMX_TEMP。
Oracle 一時テーブルスペース名を入力 [TEMP]	Oracle 一時テーブルスペースの名前。デフォルトは TEMP。

4. ORS が正常に作成されていることを確認するには、次のディレクトリの sip\_ant.log を確認します。

<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/database/bin

sip\_ant.log ファイルには、ORS を作成するために sip\_ant スクリプトを実行するときに発生するすべてのエラーが記録されます。

# MDM Hub マスターデータベースへのメタデータのインポート

MDM Hub マスターデータベースを作成したら、初期メタデータを MDM Hub マスターデータベースにインポートします。初期メタデータには、リポジトリテーブルや、MDM Hub が Hub ストアで必要とするその他のオブジェクトがあります。

**注:** 配布ディレクトリ内のフォルダ名を変更すると、メタデータのインポートが失敗します。

1. コマンドプロンプトを開き、次のディレクトリに移動します。

<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/database/bin

2. 初期メタデータをインポートするには、次のコマンドを実行します。

UNIX の場合: ./sip\_ant.sh import\_system

Windows の場合: sip\_ant.bat import\_system

3. 以下の表に説明する内容に従ってプロンプトに回答します。

**注:** プロンプトでは、デフォルトのテキストが括弧内に表示されます。デフォルト値を使用して次のプロンプトに進むには、**Enter** キーを押します。

プロンプト	説明
データベースタイプを入力 (ORACLE、MSSQL、DB2)	データベースタイプ。ORACLE を指定。
Oracle 接続タイプ (SERVICE、SID) を入力。 [SERVICE]	接続タイプ。以下の値を使用する。 SERVICE Oracle に接続するサービス名を使用する。 SID Oracle に接続する Oracle システム ID を使用する。 デフォルトは SERVICE。
データベースホスト名を入力 [localhost]	データベースを実行しているホストの名前。
データベースポート番号を入力 [1521]	データベースリスナーが使用するポート番号。デフォルトは 1521。
MDM Hub マスターデータベースのサービス名を入力 [orcl]	Oracle サービスの名前。このプロンプトは、選択した Oracle 接続タイプが SERVICE の場合に表示される。デフォルトは orcl。
Oracle Net の接続 ID (TNS 名) を入力。 [orcl]	Oracle データベースに接続するために使用される TNS 名。デフォルトは orcl。
マスターデータベースの接続 URL: "jdbc:oracle:thin:@//<host_name>:<port>/<service_name>"。 接続 URL を変更しますか (y/n) [n] :	Oracle 接続タイプ SERVICE の接続 URL。デフォルトの接続 URL を変更する場合は、y を入力する。デフォルトの接続 URL を使用する場合は、n を入力する。
データベース SID を入力	Oracle システム ID の名前。このプロンプトは、選択した Oracle 接続タイプが SID の場合に表示される。

プロンプト	説明
マスタユーザー名を入力 [cmx_system]	MDM Hub マスタデータベースにアクセスするためのユーザー名。デフォルトは cmx_system です。
マスタデータベースのユーザーパスワードを入力	MDM Hub マスタデータベースにアクセスするためのパスワード。
リストからロケール名を入力します (de、en_US、fr、ja、ko、zh_CN) [en_US]	オペレーティングシステムのロケール。デフォルトは en_US。

- 初期メタデータをインポートした後、次のログファイルでエラーがないかどうかを確認します。
  - seed.log。データベースエラーがあります。  
seed.log ファイルは次のディレクトリにあります。<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/database/bin/oracle
  - sip\_ant.log。ユーザー入力エラーがあります。  
sip\_ant.log ファイルは次のディレクトリにあります。<distribution directory>/database/bin

## オペレーショナル参照ストアへのメタデータのインポート

オペレーショナル参照ストアを作成したら、初期メタデータをオペレーショナル参照ストアにインポートします。初期メタデータには、リポジトリテーブルや、MDM Hub が Hub ストアで必要とするその他のオブジェクトがあります。

**注:** 配布ディレクトリ内のフォルダ名を変更すると、メタデータのインポートが失敗します。

- コマンドプロンプトを開き、次のディレクトリに移動します。  
<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/database/bin
- 初期メタデータをインポートするには、次のコマンドを実行します。  
UNIX の場合: ./sip\_ant.sh import\_ors  
Windows の場合: sip\_ant.bat import\_ors
- 以下の表に説明する内容に従ってプロンプトに回答します。

**注:** プロンプトでは、デフォルトのテキストが括弧内に表示されます。デフォルト値を使用して次のプロンプトに進むには、**Enter** キーを押します。

プロンプト	説明
データベースタイプを入力 (ORACLE、MSSQL、DB2)	データベースタイプ。ORACLE を指定。
Oracle 接続タイプ (SERVICE、SID) を入力。 [SERVICE]	接続タイプ。以下の値を使用する。 SERVICE Oracle に接続するサービス名を使用する。 SID Oracle に接続する Oracle システム ID を使用する。 デフォルトは SERVICE。
オペレーショナル参照ストアのデータベースホスト名を入力 [localhost]	データベースを実行しているホストの名前。
オペレーショナル参照ストアのデータベースポート番号を入力 ([1521])	データベースリスナーが使用するポート番号。デフォルトは 1521。
オペレーショナル参照ストアのデータベースサービス名を入力	Oracle サービスの名前。このプロンプトは、選択した Oracle 接続タイプが SERVICE の場合に表示される。
Oracle Net の接続 ID (TNS 名) を入力。[orcl]	Oracle データベースに接続するために使用される TNS 名。デフォルトは orcl。
マスターデータベースの接続 URL: "jdbc:oracle:thin:@//<host_name>:<port>/<service_name>"。 接続 URL を変更しますか (y/n) [n] :	Oracle 接続タイプ SERVICE の接続 URL。デフォルトの接続 URL を変更する場合は、y を入力する。デフォルトの接続 URL を使用する場合は、n を入力する。
データベース SID を入力	Oracle システム ID の名前。このプロンプトは、選択した Oracle 接続タイプが SID の場合に表示される。
オペレーショナル参照ストアのデータベースユーザー名を入力[cmx_ors]	オペレーショナル参照ストアにアクセスするためのユーザー名。デフォルトは cmx_ors。
オペレーショナル参照ストアのデータベースのユーザーパスワードを入力	オペレーショナル参照ストアにアクセスするためのパスワード。

プロンプト	説明
リストからロケール名を入力します (de、en_US、fr、ja、ko、zh_CN) [en_US]	オペレーティングシステムのロケール。デフォルトは en_US。
オペレーショナル参照ストアのタイムラインの粒度の整数コードを入力: 5 (年)、4 (月)、3 (日)、2 (時間)、1 (分)、0 (秒) [3]	<p>使用するタイムラインの単位を指定する。デフォルトは日 (日数)。</p> <p>注: 設定したタイムラインの粒度は後から変更できない。</p> <p>タイムラインの詳細については、『<i>Informatica MDM Multidomain Edition Configuration Guide</i>』を参照。</p>

4. 初期メタデータをインポートした後、次のログファイルでエラーがないかどうかを確認します。
- seed.log。データベースエラーがあります。  
seed.log ファイルは次のディレクトリにあります。<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/database/bin/oracle
  - sip\_ant.log。ユーザー入力エラーがあります。  
sip\_ant.log ファイルは次のディレクトリにあります。<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/database/bin

## 第 4 章

# Hub ストアのインストール後のタスク

- [Oracle コンポーネントへのアクセスの検証, 38 ページ](#)

## Oracle コンポーネントへのアクセスの検証

Hub ストアが必要な Oracle コンポーネントにアクセスできることを確認します。

Hub ストアは、次の Oracle コンポーネントにアクセスする必要があります。

Oracle Java Virtual Machine  
Oracle XML Database  
ALL\_CONSTRAINTS  
ALL\_CONS\_COLUMNS  
ALL\_DIRECTORIES  
ALL\_INDEXES  
ALL\_IND\_COLUMNS  
ALL\_JOBS（移行で使用）  
ALL\_TABLES  
ALL\_TAB\_COLUMNS  
ALL\_VIEWS  
DBMS\_APPLICATION\_INFO  
DBMS\_JOB  
DBMS\_OUTPUT  
DBMS\_STANDARD  
DBMS\_SQL  
DBMS\_STATS  
DBMS\_UTILITY  
DUAL  
PLITBLM  
STANDARD

SYS\_STUB\_FOR\_PURITY\_ANALYSIS  
USER\_CONSTRAINTS  
USER\_CONS\_COLUMNS  
USER\_EXTERNAL\_TABLES  
USER\_INDEXES  
USER\_JAVA\_POLICY  
USER\_OBJECTS  
USER\_SEQUENCES  
USER\_SOURCE  
USER\_TABLES  
USER\_TAB\_COLS  
USER\_TAB\_COLUMNS  
USER\_TRIGGERS  
UTL\_FILE  
V\$NLS\_PARAMETERS  
V\$VERSION

## 第 5 章

# Hub サーバーのインストール

この章では、以下の項目について説明します。

- [Hub サーバーのインストールモード, 40 ページ](#)
- [グラフィカルモードでの Hub サーバーのインストール, 40 ページ](#)
- [コンソールモードでの Hub Server のインストール, 44 ページ](#)
- [サイレントインストールのプロパティファイルの生成, 47 ページ](#)
- [サイレントモードでの Hub サーバーのインストール, 48 ページ](#)
- [管理対象サーバーがある環境での Hub サーバーのインストール, 48 ページ](#)

## Hub サーバーのインストールモード

Hub サーバーをインストールするには、次のいずれかのモードを使用します。

- グラフィカルモード
- コンソールモード
- サイレントモード

## グラフィカルモードでの Hub サーバーのインストール

グラフィカルモードで Hub サーバーをインストールできます。

Hub サーバーと Process サーバーをインストールするには、同じユーザー名を使用する必要があります。

1. アプリケーションサーバーを起動します。
2. コマンドプロンプトを開き、配布ディレクトリ内の Hub サーバーのインストーラに移動します。

デフォルトでは、インストーラは以下のディレクトリにあります。

<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/<operating system name: オペレーティングシステム名>/mrmsserver

3. 次のコマンドを実行します。

UNIX の場合: ./hub\_install.bin



Windows の場合: hub\_install.exe

4. インストールの言語を選択し、**[OK]** をクリックします。  
    **[概要]** ウィンドウが表示されます。
  5. **[次へ]** をクリックします。  
    **[ライセンスキー]** ウィンドウが表示されます。
  6. **[使用許諾契約に同意する]** オプションを選択し、**[次へ]** をクリックします。  
    **[インストールフォルダの選択]** ウィンドウが表示されます。
  7. Hub サーバーをインストールする場所を選択します。
    - デフォルトの場所を選択するには、**[次へ]** をクリックします。
    - パスを入力するには、インストールフォルダのパスを入力して **[次へ]** をクリックします。  
        **注:** ディレクトリまたはフォルダ名にスペースが含まれているパスを指定すると、インストールは失敗します。
    - 別の場所を指定するには、**[選択]** をクリックして **[次へ]** をクリックします。
  8. UNIX の場合、リンクフォルダを選択するか、リンクを作成しないというオプションを選択して、**[次へ]** をクリックします。Windows の場合、製品アイコンを作成する場所を選択するか、製品アイコンを作成しないというオプションを選択します。
  9. **[次へ]** をクリックします。  
    **[ライセンスファイルの場所の入力]** ウィンドウが表示されます。
  10. **[選択]** をクリックしてライセンスファイルを選択し、**[次へ]** をクリックします。  
    **[詳細セキュリティ]** ウィンドウが開きます。
  11. MDM Hub のセキュリティ設定を選択します。
    - 必要に応じて、**[カスタムハッシュキー]** フィールドに 128 ビットまでのハッシュキーを入力します。
    - デフォルトの設定を選択する場合は、**[次へ]** をクリックします。**[ハブ証明書プロバイダ]** ウィンドウが開きます。
    - MDM Hub のカスタムのセキュリティ設定を選択する場合は、**[カスタム]** を選択して、**[次へ]** をクリックします。
  12. 前の手順で **[カスタム]** を選択した場合は、**[ハッシュアルゴリズム]** ページが表示されます。
    - MDM Hub でのパスワードのハッシュ化でデフォルトのハッシュアルゴリズムを使用する場合は、**[次へ]** をクリックします。**[ハブ証明書プロバイダ]** ウィンドウが開きます。
    - カスタムのハッシュアルゴリズムを選択する場合は、**[その他]** を選択してから、**[次へ]** をクリックします。
  13. 前の手順で **[その他]** を選択した場合は、カスタムのハッシュアルゴリズムについて次の情報を指定してから、**[次へ]** をクリックします。
    - ハッシュアルゴリズム名
    - ハッシュアルゴリズムのアーカイブの場所。  
        **注:** ハッシュアルゴリズムのアーカイブは、ZIP ファイルでなければなりません。アーカイブに複数の JAR ファイルとサポートしている他のファイルが含まれている場合、それらがすべて ZIP ファイル内にあることを確認してください。
    - ハッシュアルゴリズム実装の標準クラス名。  
        **注:** 例えば、「\$HASHING\_CLASS\_NAME\$」と入力します。
- [ハブ証明書プロバイダ]** ウィンドウが開きます。

14. MDM Hub の証明書プロバイダを選択して、信頼されたアプリケーションを認証するには、次のオプションのいずれかを選択します。
  - デフォルトの証明書プロバイダを選択する場合は、**【次へ】** をクリックします。**【アプリケーションサーバー】** ウィンドウが表示されます。
  - カスタムの証明書プロバイダを選択する場合は、**【カスタム】** を選択します。
15. 前の手順で **【カスタム】** を選択した場合は、カスタムの証明書プロバイダについて次の情報を指定します。
  - a. 証明書プロバイダのアーカイブの場所を入力します。
 

**注:** 証明書プロバイダのアーカイブは、ZIP ファイルでなければなりません。カスタムの証明書プロバイダを使用する場合は、<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/server/resources/certificates ディレクトリが空であることを確認します。
  - b. 証明書プロバイダのクラス名を入力してから、**【次へ】** をクリックします。**【アプリケーションサーバー】** ウィンドウが表示されます。
16. WebLogic を選択し、**【次へ】** をクリックします。**【WebLogic アプリケーションサーバー: ホーム】** ウィンドウが表示されます。
17. 次の WebLogic Server を設定します。
  - a. MDM Hub で使用するドメインとして、WebLogic ドメインのインストールディレクトリのパスを選択します。**【次へ】** をクリックします。**【WebLogic アプリケーションサーバー: ログイン】** ウィンドウが表示されます。
  - b. 次の WebLogic Server のログイン情報を入力します。

フィールド名	説明
ホスト	WebLogic をインストールしたホストコンピュータの名前。
サーバー	WebLogic がデプロイされているドメイン内の WebLogic Server インスタンスの名前。
ユーザー名	WebLogic インストールのユーザー名。
パスワード	WebLogic のユーザー名に対応するパスワード。
ポート番号	WebLogic Server がリスンするポート番号。

18. **【次へ】** をクリックします。**【データベースの選択】** ウィンドウが表示されます。
19. Oracle バージョンを選択して、**【次へ】** をクリックします。**【Oracle データベース: 接続タイプの選択】** ウィンドウが表示されます。
20. サービス名または SID 接続タイプを選択し、**【次へ】** をクリックする。**【Oracle データベース情報】** ウィンドウが表示されます。

21. 接続する Oracle データベースの以下の設定を入力し、**【次へ】** をクリックします。

フィールド名	説明
サーバー	MDM Hub マスターデータベースサーバーのホスト名。
ポート	MDM Hub マスターデータベースのポート番号。
サービス名または Oracle SID	MDM Hub マスターデータベースを作成する際に選択する接続タイプを指定する。
システムスキーマ	MDM Hub マスターデータベースの名前。
システムスキーマパスワード	MDM Hub マスターデータベースに接続するための、システムスキーマユーザーのパスワード。

22. **【次へ】** をクリックします。

Oracle 接続タイプにサービス名を選択した場合は、**【接続 URL のカスタマイズ】** ウィンドウが表示されます。

23. 以下のいずれかの接続 URL カスタマイズオプションを選択する。

- はい。MDM Hub マスターデータベースに接続するためのカスタム接続 URL を入力できる。
- いいえ。MDM Hub マスターデータベースへの接続には、Oracle サーバー、ポート、およびサービス名に基づいて MDM Hub のインストーラによって生成されるデフォルトの URL が使用される。

**【ActiveVOS のインストール】** ウィンドウが表示される。

24. 必要に応じて接続 URL を変更し、**【次へ】** をクリックします。

**【ActiveVOS のインストール】** ウィンドウが表示される。

25. バンドルとしてライセンス供与された Informatica ActiveVOS のバージョンをインストールする場合、**【はい】** を選択し、以下の手順を実行します。そうでない場合は、**【いいえ】** を選択し、**【次へ】** をクリックします。

- 【ActiveVOS インストールフォルダを選択】** ページで、デフォルトのインストールパスを受け入れるか、または希望する場所を指定します。**【次へ】** をクリックします。
- 【データベース情報】** ページで、ActiveVOS データベーススキーマを作成したときに指定したデータベース情報を入力し、**【次へ】** をクリックします。
- 【アプリケーションサーバー Web URL】** ページで、デフォルトの URL を受け入れるか、または ActiveVOS Web サービスを呼び出すために使用する URL を指定します。URL にアプリケーションサーバーに接続するための正しいポート番号が含まれていることを確認します。**【次へ】** をクリックします。

この URL は、インストール後のセットアップスクリプトによって、ActiveVOS Web サービスの呼び出し、定義済みの MDM ワークフローの ActiveVOS へのデプロイ、および URN マッピングの作成に使用されます。

- 【ActiveVOS インストーラ】** ページで、**【選択】** をクリックし、配布パッケージ内の ActiveVOS\_Server インストールファイルを参照します。**【次へ】** をクリックします。
- 管理者ユーザー名とパスワードを入力し、ActiveVOS コンソールの管理者ユーザーを作成します。  
**重要:** このユーザー名とパスワードは、アプリケーションサーバーで作成した ActiveVOS コンソールのユーザー名とパスワードと同じにする必要があります。
- 【次へ】** をクリックします。

26. Informatica Platform の次のいずれかのインストールオプションを選択します。

- **【はい】**。Informatica Platform をインストールする。
  - **【いいえ】**。Informatica Platform をインストールしない。
27. 前の手順で **【はい】** を選択した場合は、**【選択】** をクリックして、次の Informatica Platform のファイルの場所を参照します。
- インストール応答ファイル
  - Platform インストールファイル
28. [製品使用ツールキット] ページで、組織が属する業種と環境タイプを選択します。
29. プロキシサーバーを使用する場合は、**【はい】** を選択してプロキシサーバーの詳細情報を入力します。そうでない場合は、**【いいえ】** を選択します。
- 次のプロキシサーバーの詳細を入力できます。
- プロキシサーバーの名前/IP
  - プロキシサーバーのポート
  - プロキシサーバーのドメイン名。不要な場合は空白のままにします。
  - プロキシサーバーのユーザー名。不要な場合は空白のままにします。
  - プロキシサーバーのパスワード。不要な場合は空白のままにします。
30. **【次へ】** をクリックします。
- [デプロイ] ページが表示されます。
31. 次の postInstallSetup スクリプトオプションの 1 つを選択します。
- **【スクリプトをこのインストール中に実行する】**。インストール中に postInstallSetup スクリプトを実行します。
  - **【後で実行する】**。インストール中に postInstallSetup スクリプトを実行しません。インストール後に postInstallSetup スクリプトを実行するか、Hub サーバーアプリケーションを手動でデプロイする必要があります。
- postInstallSetup スクリプトは、Hub サーバーアプリケーションを再パッケージ化してデプロイします。また、スクリプトによってデータソースの作成と JMS メッセージキューの設定も行われます。
- 重要:** WebLogic 12.2.1.3 以降の環境で、ActiveVOS をインストールすることにした場合、または WebLogic T3S プロトコルを使用することにした場合は、**【後で実行する】** を選択します。
32. **【次へ】** をクリックします。
- [インストール前のサマリ] ウィンドウが表示されます。
33. **【インストール前のサマリ】** ウィンドウで設定内容を確認したら、[インストール] をクリックしてインストールプロセスを開始します。
- インストールが完了すると、**【インストールの完了】** ウィンドウが表示されます。
34. **【完了】** をクリックして Hub サーバーインストーラを終了します。

## コンソールモードでの Hub Server のインストール

UNIX では、Hub サーバーをコンソールモードでインストールできます。

1. アプリケーションサーバーを起動します。
2. コマンドプロンプトを開き、MDM Hub ディストリビューション内の次のディレクトリに移動します。

<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/<operating system name: オペレーティングシステム名>/mrmsrver

3. 次のコマンドを実行します。  
./hub\_install.bin -i console
  4. インストールで選択するロケールに対応する番号を入力し、**Enter** を押します。  
インストールに関する概要情報が表示されます。
  5. **Enter** キーを押します。  
使用許諾契約が表示されます。
  6. 使用許諾契約に目を通します。使用許諾契約の条項に同意する場合は **Y** と入力し、同意しない場合は **N** と入力してインストールプログラムを終了します。
  7. **Enter** キーを押します。  
前の手順で **Y** と入力した場合、インストールフォルダに関する情報が表示されます。
  8. Hub サーバーをインストールするフォルダを選択します。
    - デフォルトのフォルダを選択する場合は、**Enter** キーを押します。
    - パスを変更する場合は、インストールフォルダの絶対パスを入力し、**Enter** キーを押します。
  9. インストールフォルダの場所を確認します。インストールフォルダを確認して **Y** と入力するか、または **N** と入力してインストールフォルダを変更します。
  10. **Enter** キーを押します。  
リンク場所のオプションのリストが表示されます。
  11. リンク場所のオプションを番号で入力します。  
ライセンスファイルの場所を尋ねるプロンプトが表示されます。
  12. ライセンスファイルの場所を絶対パスで入力し、**Enter** を押します。  
詳細セキュリティオプションのリストが表示されます。
  13. MDM Hub のセキュリティ設定を選択します。
    - デフォルトの設定を選択する場合は、**Enter** キーを押します。
    - MDM Hub のカスタムのセキュリティ設定を選択する場合は、「カスタム」と入力して、**Enter** キーを押します。
    - カスタマハッシュキューを要求された場合は、最大 128 ビットの値を入力できます。
  14. 前の手順で「カスタム」と入力した場合は、次のオプションのいずれかを選択します。
    - MDM Hub でのパスワードのハッシュ化でデフォルトのハッシュアルゴリズムを使用する場合は、**Enter** キーを押します。
    - カスタムのハッシュアルゴリズムを選択する場合は、「その他」と入力して、**Enter** キーを押します。
  15. 前の手順で「その他」と入力した場合は、カスタムのハッシュアルゴリズムについて次の情報を指定します。
    - ハッシュアルゴリズム名
    - ハッシュアルゴリズムのアーカイブの場所。  
**注:** ハッシュアルゴリズムのアーカイブは、ZIP ファイルでなければなりません。アーカイブに複数の JAR ファイルとサポートしている他のファイルが含まれている場合、それらがすべて ZIP ファイル内にあることを確認してください。
    - ハッシュアルゴリズム実装の標準クラス名。  
**注:** 例えば、「\$HASHING\_CLASS\_NAME\$」と入力します。
- 証明書プロバイダオプションのリストが表示されます。

16. MDM Hub の証明書プロバイダを選択して、信頼されたアプリケーションを認証するには、次のオプションのいずれかを選択します。
  - デフォルトの証明書プロバイダを選択する場合は、**Enter** キーを押します。
  - カスタムの証明書プロバイダを選択する場合は、「カスタム」と入力して、**Enter** キーを押します。
17. 前の手順で「カスタム」と入力した場合は、カスタムの証明書プロバイダについて次の情報を指定します。
  - a. 証明書プロバイダのアーカイブの場所を入力します。

**注:** 証明書プロバイダのアーカイブは、ZIP ファイルでなければなりません。カスタムの証明書プロバイダを使用する場合は、<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/server/resources/certificates ディレクトリが空であることを確認します。WebSphere 環境では、MDM Hub ユーザーは、証明書ディレクトリに対するアクセス権限と書き込み権限も持っている必要があります。
  - b. 証明書プロバイダのクラス名を入力して、**Enter** キーを押します。

アプリケーションサーバーのオプションのリストが表示されます。
18. 選択するアプリケーションサーバーの数を入力し、**Enter** キーを押します。

アプリケーションサーバーの情報が表示されます。
19. WebLogic 設定を設定します。
  - a. Hub サーバーのインストール先にする WebLogic ドメインへのパスを指定して、**Enter** を押します。

WebLogic アプリケーションサーバーのログイン情報を尋ねるプロンプトが表示されます。
  - b. ホスト名、サーバー名、ユーザー名、パスワード、および WebLogic Server のリスナポートを入力するか、デフォルト値を受け入れて、**Enter** キーを押します。
20. **Enter** キーを押します。

データベースの選択プロンプトが表示されます。
21. Oracle を選択し、**Enter** キーを押します。
22. 使用する Oracle データベース接続タイプ（サービス名または SID）を選択し、**Enter** キーを押します。
23. 接続する Oracle データベースの設定を指定します。

**Enter** キーを押してデフォルト値を受け入れるか、修正した値でデフォルト値を置き換えます。この設定にはサーバー名、ポート番号、サービス名または Oracle SID、MDM Hub システムのマスタースキーマ名（CMX\_SYSTEM など）、システムスキーマのユーザー名に対するシステムスキーマのパスワードが含まれています。
24. **Enter** キーを押します。
25. 選択した Oracle 接続タイプが Service Name の場合は、接続 URL の確定または変更を求められます。必要に応じてシステム生成の URL を変更し、**Enter** キーを押します。
26. バンドルとしてライセンス供与された ActiveVOS サーバーのバージョンをインストールする場合、続行するには **Enter** キーを押します。インストールせずにキャンセルする場合は、2 を入力して **Enter** を押します。

続行を選択した場合は、インストーラにより、お使いの ActiveVOS インストールに関する情報を入力するよう求められます。

  - a. ActiveVOS サーバーをインストールする場所を指定します。
  - b. MDM Web サービスおよび ActiveVOS Web サービスを呼び出すのに使用する URL を指定します。
  - c. ActiveVOS スキーマを作成したときに指定した ActiveVOS データベースに関する情報を入力します。
  - d. ActiveVOS サーバーのインストールファイルの場所を指定します。

- e. ユーザー名とパスワードを入力し、ActiveVOS サーバー管理コンソールで管理者ユーザーを作成します。
- 重要:** このユーザー名とパスワードは、アプリケーションサーバーで作成した ActiveVOS コンソールのユーザー名とパスワードと同じにする必要があります。
27. **Enter** キーを押します。
- Informatica Platform のインストールプロンプトが表示されます。
28. Informatica Platform をインストールする場合、続行するには **Enter** キーを押します。インストールせずにキャンセルする場合は、2 を入力して **Enter** を押します。
- Informatica Platform のインストール応答ファイルおよびアーカイブファイルの場所に関するプロンプトが表示されます。
29. Informatica Platform のインストール応答ファイルおよびアーカイブファイルの場所を入力して、**Enter** キーを押します。
30. 製品使用ツールキットオプションを指定します。
- a. 組織が属する業界を入力し、**Enter** キーを押します。
- b. 環境タイプを入力します。Production に 1、Test/QA に 2、Development に 3 を入力してから **Enter** キーを押します。
31. プロキシサーバーがあるかどうかを選択します。ある場合は、**Enter** キーを押します。そうでない場合は、2 を入力して **Enter** キーを押します。
- 次のプロキシサーバーの詳細を入力できます。
- プロキシサーバーの名前/IP
  - プロキシサーバーのポート
  - プロキシサーバーのドメイン名。不要な場合は空白のままにします。
  - プロキシサーバーのユーザー名。不要な場合は空白のままにします。
  - プロキシサーバーのパスワード。不要な場合は空白のままにします。
- インストールの設定のサマリが表示されます。
32. インストール中に postInstallSetup を実行するか、後で手動で実行するか、いずれかの方法を選択します。
- 重要:** WebLogic 12.2.1.3 以降の環境で、ActiveVOS をインストールすることにした場合、または WebLogic T3S プロトコルを使用することにした場合は、**【後で実行する】** を選択します。
33. インストール前のサマリに表示された情報を確認します。設定内容に問題がなければ、**Enter** キーを押してインストールを開始します。
- 指定した設定情報に従って Hub Server がインストールされます。プロセスが完了すると、インストールの完了に関するメッセージが表示されます。
34. **Enter** キーを押してインストーラを終了します。

## サイレントインストールのプロパティファイルの生成

サイレントインストールを実行するために使用できる、サイレントプロパティファイルを生成できます。サイレントプロパティファイルを生成するには、-r コマンドラインオプションを使用します。

1. アプリケーションサーバーを起動します。

2. コマンドプロンプトを開き、次のコマンドを実行します。

UNIX の場合:./hub\_install.bin -r <応答ファイルの場所へのパス> installer.properties

Windows の場合:hub\_install.exe -r <応答ファイルの場所へのパス> installer.properties

installer.properties 応答ファイルは、指定された場所に生成されます。

## サイレントモードでの Hub サーバーのインストール

サイレントモードで Hub サーバーをインストールできます。サイレントインストールを開始する前に、サイレントインストールのプロパティファイルが設定されていることを確認します。

1. アプリケーションサーバーを起動します。

2. コマンドプロンプトを開き、次のコマンドを実行します。

UNIX の場合:./hub\_install.bin -f <Path to the Hub Server silent installation properties file: Hub サーバーサイレントインストールプロパティファイルへのパス>

Windows の場合:hub\_install.exe -f <Path to the Hub Server silent installation properties file: Hub サーバーサイレントインストールプロパティファイルへのパス>

自動インストーラがバックグラウンドで実行します。プロセスにしばらく時間がかかる場合があります。

3. Hub サーバーの postInstallSetup スクリプトをサイレントインストールの一部として実行した場合、postinstallSetup.log をチェックしてインストールが正常に行われたことを確認します。

ログファイルは次のディレクトリにあります。<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/logs

## 管理対象サーバーがある環境での Hub サーバーのインストール

環境に管理サーバーと管理対象サーバーがある場合には、Hub サーバーを管理サーバーと各管理対象サーバーにインストールします。クラスタ化された環境とクラスタ化されていない環境のどちらでもインストールできます。

Hub サーバーのインストールのディレクトリ構造がすべてのノードで同じになるようにしてください。

1. すべてのマシンで、WebLogic 管理サーバーと管理対象サーバーを開始します。

2. コマンドプロンプトを開き、配布ディレクトリ内の Hub サーバーのインストーラに移動します。

デフォルトでは、インストーラは以下のディレクトリにあります。

<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/<operating system name: オペレーティングシステム名>/mrmsrver

3. Hub サーバーのインストーラを起動するには、次のコマンドを実行します。

UNIX の場合:./hub\_install.bin -DSIPERIAN\_INSTALL\_PREREQ\_VALIDATION=false

Windows の場合:hub\_install.exe -DSIPERIAN\_INSTALL\_PREREQ\_VALIDATION=false

クラスタの管理サーバーとすべての管理対象サーバーで Hub サーバーのインストーラを起動する必要があります。



4. インストールの言語を選択し、**[OK]** をクリックします。  
**[概要]** ウィンドウが表示されます。
5. **[次へ]** をクリックします。  
**[ライセンスキー]** ウィンドウが表示されます。
6. **[使用許諾契約に同意する]** オプションを選択し、**[次へ]** をクリックします。  
**[インストールフォルダの選択]** ウィンドウが表示されます。
7. Hub サーバーをインストールする場所を選択します。
  - デフォルトの場所を選択するには、**[次へ]** をクリックします。
  - パスを入力するには、インストールフォルダのパスを入力して **[次へ]** をクリックします。  
**注:** ディレクトリまたはフォルダ名にスペースが含まれているパスを指定すると、インストールは失敗します。
  - 別の場所を指定するには、**[選択]** をクリックして **[次へ]** をクリックします。
8. UNIX の場合、リンクフォルダを選択するか、リンクを作成しないというオプションを選択して、**[次へ]** をクリックします。Windows の場合、製品アイコンを作成する場所を選択するか、製品アイコンを作成しないというオプションを選択します。
9. **[次へ]** をクリックします。  
**[ライセンスファイルの場所の入力]** ウィンドウが表示されます。
10. **[選択]** をクリックしてライセンスファイルを選択し、**[次へ]** をクリックします。  
**[詳細セキュリティ]** ウィンドウが開きます。
11. WebLogic を選択し、**[次へ]** をクリックします。  
**[WebLogic アプリケーションサーバー: ホーム]** ウィンドウが表示されます。
12. 次の WebLogic Server を設定します。
  - a. MDM Hub で使用するドメインとして、WebLogic ドメインのインストールディレクトリのパスを選択します。**[次へ]** をクリックします。  
**[WebLogic アプリケーションサーバー: ログイン]** ウィンドウが表示されます。
  - b. 次の WebLogic Server のログイン情報を入力します。

フィールド名	説明
ホスト	WebLogic をインストールしたホストコンピュータの名前。
サーバー	WebLogic がデプロイされているドメイン内の WebLogic Server インスタンスの名前。
ユーザー名	WebLogic インストールのユーザー名。
パスワード	WebLogic のユーザー名に対応するパスワード。
ポート番号	管理サーバーがリスンするポート番号。

13. **[次へ]** をクリックします。  
**[データベースの選択]** ウィンドウが表示されます。
14. Oracle バージョンを選択して、**[次へ]** をクリックします。  
**[Oracle データベース: 接続タイプの選択]** ウィンドウが表示されます。

15. サービス名または SID 接続タイプを選択し、**【次へ】** をクリックする。

**【Oracle データベース情報】** ウィンドウが表示されます。

16. 接続する Oracle データベースの以下の設定を入力し、**【次へ】** をクリックします。

フィールド名	説明
サーバー	MDM Hub マスターデータベースサーバーのホスト名。
ポート	MDM Hub マスターデータベースのポート番号。
サービス名または Oracle SID	MDM Hub マスターデータベースを作成する際に選択する接続タイプを指定する。
システムスキーマ	MDM Hub マスターデータベースの名前。
システムスキーマパスワード	MDM Hub マスターデータベースに接続するための、システムスキーマユーザーのパスワード。

17. **【次へ】** をクリックします。

Oracle 接続タイプにサービス名を選択した場合は、**【接続 URL のカスタマイズ】** ウィンドウが表示されます。

18. 以下のいずれかの接続 URL カスタマイズオプションを選択する。

- はい。MDM Hub マスターデータベースに接続するためのカスタム接続 URL を入力できる。
- いいえ。MDM Hub マスターデータベースへの接続には、Oracle サーバー、ポート、およびサービス名に基づいて MDM Hub のインストーラによって生成されるデフォルトの URL が使用される。

**【ActiveVOS のインストール】** ウィンドウが表示される。

19. 必要に応じて接続 URL を変更し、**【次へ】** をクリックします。

**【ActiveVOS のインストール】** ウィンドウが表示される。

20. バンドルとしてライセンス供与された Informatica ActiveVOS のバージョンをインストールする場合、**【はい】** を選択し、以下の手順を実行します。そうでない場合は、**【いいえ】** を選択し、**【次へ】** をクリックします。

- 【ActiveVOS インストールフォルダを選択】** ページで、デフォルトのインストールパスを受け入れるか、または希望する場所を指定します。**【次へ】** をクリックします。
- 【データベース情報】** ページで、ActiveVOS データベーススキーマを作成したときに指定したデータベース情報を入力し、**【次へ】** をクリックします。
- 【アプリケーションサーバー Web URL】** ページで、デフォルトの URL を受け入れるか、または ActiveVOS Web サービスを呼び出すために使用する URL を指定します。URL にアプリケーションサーバーに接続するための正しいポート番号が含まれていることを確認します。**【次へ】** をクリックします。  
  
この URL は、インストール後のセットアップスクリプトによって、ActiveVOS Web サービスの呼び出し、定義済みの MDM ワークフローの ActiveVOS へのデプロイ、および URN マッピングの作成に使用されます。
- 【ActiveVOS インストーラ】** ページで、**【選択】** をクリックし、配布パッケージ内の ActiveVOS\_Server インストールファイルを参照します。**【次へ】** をクリックします。
- 管理者ユーザー名とパスワードを入力し、ActiveVOS コンソールの管理者ユーザーを作成します。

**重要:** このユーザー名とパスワードは、アプリケーションサーバーで作成した ActiveVOS コンソールのユーザー名とパスワードと同じにする必要があります。

- f. **【次へ】** をクリックします。
21. Informatica Platform の次のいずれかのインストールオプションを選択します。
- **【はい】**。Informatica Platform をインストールする。
  - **【いいえ】**。Informatica Platform をインストールしない。
22. 前の手順で **【はい】** を選択した場合は、**【選択】** をクリックして、次の Informatica Platform のファイルの場所を参照します。
- インストール応答ファイル
  - Platform インストールファイル
23. **【製品使用ツールキット】** ページで、組織が属する業種と環境タイプを選択します。
24. プロキシサーバーを使用する場合は、**【はい】** を選択してプロキシサーバーの詳細情報を入力します。そうでない場合は、**【いいえ】** を選択します。
- 次のプロキシサーバーの詳細を入力できます。
- プロキシサーバーの名前/IP
  - プロキシサーバーのポート
  - プロキシサーバーのドメイン名。不要な場合は空白のままにします。
  - プロキシサーバーのユーザー名。不要な場合は空白のままにします。
  - プロキシサーバーのパスワード。不要な場合は空白のままにします。
25. **【次へ】** をクリックします。
- 【デプロイ】** ページが表示されます。
26. インストール後のセットアップスクリプトオプションとして **【後で実行する】** を選択します。
- 【後で実行する】** オプションによって、インストール後のセットアップスクリプトを後から手動で実行できます。
27. **【次へ】** をクリックします。
- 【インストール前のサマリ】** ウィンドウが表示されます。
28. **【次へ】** をクリックします。
- 【インストール前のサマリ】** ウィンドウが表示されます。
29. **【インストール前のサマリ】** ウィンドウで設定内容を確認したら、**【インストール】** をクリックしてインストールプロセスを開始します。
- インストールが完了すると、**【インストールの完了】** ウィンドウが表示されます。
30. **【完了】** をクリックして Hub サーバーインストーラを終了します。
- 開発用のクラスタ IP アドレスを使用している場合、クラスタ内のノードを通して Hub サーバーにアクセスできます。本番用のクラスタ IP アドレスを使用している場合、クラスタ名を使用して Hub サーバーにアクセスできます。Hub サーバーアプリケーションの起動後は、EJB クラスタリングが管理対象サーバー間に要求を分配し、フェイルオーバーを管理します。

## 第 6 章

# Hub サーバーのインストール後のタスク

この章では、以下の項目について説明します。

- [インストールログファイルのコピー, 52 ページ](#)
- [バージョンとビルド番号の確認, 53 ページ](#)
- [アプリケーションサーバー設定の検証と設定（条件付き）, 54 ページ](#)
- [Hub サーバーアプリケーションのデプロイ（条件付き）, 55 ページ](#)
- [Hub サーバーアプリケーションをデプロイするスクリプトの使用（条件付き）, 56 ページ](#)
- [Hub サーバーアプリケーションの手動デプロイ（条件付き）, 57 ページ](#)
- [WebLogic の再起動, 66 ページ](#)
- [メタデータキャッシュの設定（オプション）。, 66 ページ](#)
- [Hub コンソールの起動, 68 ページ](#)
- [オペレーショナル参照ストアの登録, 68 ページ](#)

## インストールログファイルのコピー

インストールログファイルは、Hub サーバーのインストールに失敗した場合に、問題を解決するのに役立ちます。ログファイルは、インストールドキュメントディレクトリにコピーしておきます。インストールの問題に

ついて問い合わせした場合は、Informatica グローバルカスタマサポートによりログファイルのコピーを求められることがあります。

次の表に、さまざまなタイプのインストールログファイルの説明を示します。

ログファイルのタイプ	説明
インストールログ	<ul style="list-style-type: none"><li>- ファイル名。Informatica_MDM_Hub_Server_Install_&lt;timestamp&gt;.xml</li><li>- 場所。&lt;MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ&gt;/hub/server/UninstallerData/logs</li><li>- 内容。作成されたディレクトリおよびレジストリエントリ、インストールされたファイルおよび実行されたコマンドの名前、およびインストールされた各ファイルのステータス。</li></ul>
インストール前提条件ログ	<ul style="list-style-type: none"><li>- ファイル名。installPrereq.log</li><li>- 場所。&lt;MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ&gt;/hub/server/logs</li><li>- 内容。インストーラによって実行される前提条件チェックのログ。</li></ul>
デバッグログ	<ul style="list-style-type: none"><li>- ファイル名。infamdm_installer_debug.txt</li><li>- 場所。&lt;MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ&gt;/hub/server</li><li>- 内容。インストール中に行う選択、およびインストーラによって実行されるアクションに関する詳細情報。</li></ul>
インストール後のセットアップログ	<ul style="list-style-type: none"><li>- ファイル名。postInstallSetup.log</li><li>- 場所。&lt;MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ&gt;/hub/server/logs</li><li>- 内容。インストール後プロセス中にインストーラによって実行されるアクション、およびインストール後プロセスで発生するエラーのサマリ。</li></ul>
Hub サーバーログ	<ul style="list-style-type: none"><li>- ファイル名。cmxserver.log</li><li>- 場所。&lt;MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ&gt;/hub/server/logs</li><li>- 内容。Hub サーバーの操作のサマリ。</li></ul>
WebLogic ログ	<ul style="list-style-type: none"><li>- ファイル名。access.log、&lt;Weblogic server: WebLogic Server&gt;.log、および&lt;WebLogic domain: WebLogic ドメイン&gt;.log</li><li>- 場所。&lt;WebLogic domain: WebLogic ドメイン&gt;/servers/&lt;Weblogic server: WebLogic Server&gt;/logs</li><li>- 内容。メッセージ処理ステータス、JMS 接続ステータス、トランザクション詳細、Java 例外、ファイルアクセス詳細などの、WebLogic サーバードキュメント情報。</li></ul>

## バージョンとビルド番号の確認

バージョンとビルド番号が正しい Hub サーバーがインストールされていることを確認します。

1. コマンドプロンプトを開き、次のディレクトリに移動します。<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/bin
2. Hub サーバードキュメントとビルド番号を確認するには、次のコマンドを実行します。

UNIX の場合: versionInfo.sh

Windows の場合: versionInfo.bat

**注:** AIX システムの場合は、</jre/bin ディレクトリから Java を実行するように、Java home: Java homeversionInfo.sh スクリプトを変更します。

# アプリケーションサーバー設定の検証と設定（条件付き）

MDM Hub 環境の要件に基づいて、アプリケーションサーバー設定を検証および設定します。

次の表に、実行可能な設定タスクを示します。

環境設定タスク	説明
アプリケーションサーバー設定の編集	インストール中に <code>postInstallSetup</code> スクリプトを実行し、不適切なアプリケーションサーバー設定が原因でスクリプトに失敗した場合は必須です。
管理対象サーバーがある環境での Hub サーバーの設定	管理対象サーバーがある環境に Hub サーバーをインストールした場合は必須です。

## アプリケーションサーバー設定の編集

インストール中に `postInstallSetup` スクリプトを実行しても、アプリケーションサーバー設定が正しくないためスクリプトが失敗する場合、`build.properties` ファイルを編集します。また、アプリケーションサーバー設定を変更する場合も、このファイルを編集します。

1. 次のディレクトリにある `build.properties` ファイルを開きます。

<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/bin

2. アプリケーションサーバー設定を編集して保存します。

`build.properties` ファイルを編集した後、`postInstallSetup` スクリプトを実行して Hub サーバーアプリケーションをデプロイするようにします。

## 管理対象サーバーがある環境での Hub サーバーのプロパティの設定

管理対象サーバーがある環境で Hub サーバーをインストールした場合、管理サーバーと各管理対象サーバーで Hub サーバーのプロパティを設定します。`cmxserver.properties` ファイルで Hub サーバーのプロパティを設定します。

例えば、WebLogic 環境には 2 つの管理対象サーバーがあり、それらは `host1` および `host2` で実行され、RMI ポート 8001 および 8002 を使用しています。両方の管理対象サーバーで WebLogic クラスタのプロパティを設定する必要があります。

1. クラスタの管理サーバーとすべての管理対象サーバーで WebLogic アプリケーションサーバーを停止します。
2. 管理サーバーとすべての管理対象サーバーで、次のディレクトリにある `cmxserver.properties` ファイルを開きます。

<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/resources

3. 以下のプロパティを設定します。

プロパティ	説明
cmx.appserver.hostname	すべての管理対象サーバーのマシン名をカンマで区切って指定します。 例えば、WebLogic 環境に 2 つの管理対象サーバーがあり、それらが host1 および host2 で実行されている場合、プロパティを <code>cmx.appserver.hostname=host1,host2</code> に設定します。
cmx.appserver.rmi.port	管理対象サーバーが使用する RMI ポート番号をカンマで区切って指定します。 例えば、WebLogic クラスタ環境の管理対象サーバーが RMI ポート 8001 と 8002 を使用している場合、プロパティを <code>cmx.appserver.rmi.port=8001,8002</code> に設定します。

プロパティの記述で、1 つ目のサーバーのホスト名およびポート番号は host1 および 8001、2 つ目のサーバーのホスト名およびポート番号は host2 および 8002 です。

## Hub サーバーアプリケーションのデプロイ（条件付き）

Hub サーバーアプリケーションは、Hub サーバーをインストールするマシンと同じマシンにデプロイする必要があります。

Hub サーバーアプリケーションから、デプロイ元の Hub サーバーインストールを見つけられるようにする必要があります。そのため、EAR ファイルを移動して別のマシンにアプリケーションをデプロイしないでください。例えば、Hub サーバーをテストマシンにインストールし、アプリケーションを本番マシンにデプロイしたとします。本番マシンにデプロイしたアプリケーションは、テストマシン上のインストールにアクセスしてロギング設定などの情報を見つけることができません。

次のいずれかのシナリオで Hub サーバーアプリケーションをデプロイする必要があります。

- インストールは、アプリケーションサーバーのマルチノード環境またはクラスタ環境にあります。
- インストールは完了したが、インストール中に実行した `postInstallSetup` スクリプトが失敗する。
- インストール中に `postInstallSetup` スクリプトをスキップした。

Hub サーバーアプリケーションをデプロイするには、以下の表で説明されている次のいずれかの手順を使用します。

プロシージャ	説明
デプロイメント用スクリプトの使用	<code>postInstallSetup</code> スクリプトを実行して、Hub サーバーアプリケーションをデプロイします。また、スクリプトによってデータソースの作成と JMS メッセージキューの設定も行われます。 管理対象サーバーがある環境にデプロイする場合、WebLogic Server 管理コンソールを使用してデプロイメントのターゲットを指定するようにします。
手動デプロイ	Hub サーバーアプリケーションを手動でデプロイします。また、手動でデータソースを作成して JMS メッセージキューを設定する必要もあります。

**重要:** インストールがアプリケーションサーバーのマルチノード環境またはクラスタ環境にある場合は、まず 1 つのノードに Hub サーバーアプリケーションをデプロイします。Hub サーバーアプリケーションを他のノード

ドにデプロイする前に、デプロイメントがあるノード上の certificates ディレクトリからのすべてのファイルを、他のすべてのノード上の certificates ディレクトリにコピーします。certificates ディレクトリは次の場所にあります。<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/resources

## Hub サーバーアプリケーションをデプロイするスクリプトの使用（条件付き）

インストール中に postInstallSetup スクリプトをスキップした場合は、スクリプトを実行します。インストール後のプロセスでは、Hub サーバーアプリケーションをデプロイし、データソースを作成し、JMS メッセージキューを設定します。

1. 管理対象サーバーを含む環境を使用し、管理サーバーと管理対象サーバーが異なるマシンにある場合は、次のデプロイメントファイルを管理サーバーの MDM Hub インストールディレクトリにコピーします。

デプロイメントファイル名	説明
siperian-mrm.ear	必須。Hub サーバーアプリケーション。
provisioning-ear.ear	必須。プロビジョニングツールアプリケーション。
entity360view-ear.ear	オプション。エンティティ 360 フレームワーク。
informatica-mdm-platform-ear.ear	オプション。Informatica Platform アプリケーション。
ave_weblogic.ear	オプション。ActiveVOS サーバーアプリケーション。
activevos-central.war	オプション。ActiveVOS Central アプリケーション。

デプロイメントファイルは次のディレクトリにあります。

<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server

2. コマンドプロンプトを開き、次のディレクトリに移動します。

<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server

3. postInstallSetup スクリプトを実行します。

**注:** MDM Hub インストーラにバンドルされている ActiveVOS をインストールしなかった場合は、コマンドに ActiveVOS のユーザー名とパスワードを含めないでください。WebLogic 12.2.1 以降の環境では、MDM Hub インストーラにバンドルされている ActiveVOS バージョンをインストールした場合、-Dinstall.avos.patch=true オプションを追加してスクリプトを実行します。

UNIX の場合:

```
./postInstallSetup.sh -Dweblogic.password=<WebLogic password>  
-Ddatabase.password=<MDM Hub Master database password>  
-Davos.username=<ActiveVOS Console username>  
-Davos.password=<ActiveVOS Console password>  
-Davos.jdbc.database.username=<ActiveVOS database username>  
-Davos.jdbc.database.password=<ActiveVOS database password>
```

**注:** パスワードに感嘆符 (!) が含まれている場合、感嘆符の前にバックスラッシュを付ける必要があります。例えば、パスワードが!! cmx!!の場合、次のパスワードを入力します: \! \!cmx\! \!



Windows の場合:

```
postInstallSetup.bat
-Dweblogic.password=<WebLogic password>
-Ddatabase.password=<MDM Hub Master database password>
-Davos.username=<ActiveVOS Console username>
-Davos.password=<ActiveVOS Console password>
-Davos.jdbc.database.username=<ActiveVOS database username>
-Davos.jdbc.database.password=<ActiveVOS database password>
```

ActiveVOS コンソールの資格情報は、アプリケーションサーバーの管理者ユーザーの資格情報と同じです。

ActiveVOS データベースの資格情報は、create\_bpm スクリプトを実行するために使用した資格情報と同じです。

4. 管理対象サーバーがある環境にデプロイする場合、WebLogic Server 管理コンソールでデプロイメントのターゲットを指定するようにします。
  - a. 次の Hub サーバーデプロイメントのターゲットとしてすべての管理対象サーバーを指定します。

デプロイメントファイル名	説明
siperian-mrm.ear	必須。Hub サーバーアプリケーション。
provisioning-ear.ear	必須。プロビジョニングツールアプリケーション。
entity360view-ear.ear	オプション。エンティティ 360 フレームワーク。
informatica-mdm-platform-ear.ear	オプション。Informatica Platform アプリケーション。
ave_weblogic.ear	オプション。ActiveVOS サーバーアプリケーション。
activevos-central.war	オプション。ActiveVOS Central アプリケーション。

- b. JMS モジュール SiperianModule のターゲットとしてすべての管理対象サーバーを指定します。
    - c. 次のデータソースのターゲットとしてすべての管理対象サーバーを指定します。
      - MDM Hub マスタデータベースのデータソース
      - オペレーショナル参照ストアのデータソース
    - d. スタートアップクラスとシャットダウンクラスのターゲットとしてすべての管理対象サーバーを指定します。

詳細については、WebLogic のマニュアルを参照してください。

## Hub サーバーアプリケーションの手動デプロイ（条件付き）

postInstallSetup スクリプトをインストール中にスキップしたか、postInstallSetup スクリプトが失敗する場合、Hub サーバーアプリケーションを手動でデプロイできます。Hub サーバーアプリケーションのデプロイは、Hub サーバーのインストールディレクトリから行う必要があります。

Hub サーバーアプリケーションをデプロイするには、次のタスクを実行します。

1. データソースの作成

2. JMS メッセージキューの設定
3. Hub サーバーアプリケーションの再パッケージ化
4. Hub サーバーアプリケーションのデプロイ
5. Hub サーバーでの JMS メッセージキューの設定
6. Informatica Data Director (IDD) 用のサーバーリソースの設定

## 手順 1. データソースの作成

Hub サーバーアプリケーションを手動でデプロイする前に、データソースを作成します。また複数のプロセスサーバーを設定したり、インストール問題をトラブルシューティングしたりする場合も、データソースを作成します。

1. JDBC ドライバをインストールします。
2. MDM Hub マスタデータベースのデータソースを作成します。
3. オペレーショナル参照ストアのデータソースを作成します。

### 手順 1. JDBC ドライバのインストール

MDM Hub マスタデータベースとオペレーショナル参照ストア（ORS）のデータソースを作成する前に、JDBC ドライバをインストールします。

サポートされているバージョンの JDBC ドライバの取得方法については、Oracle にお問い合わせください。

1. JDBC ドライバを次のディレクトリにコピーします。  
 <WebLogic installation directory: WebLogic のインストールディレクトリ>/wlserver/server/lib
2. 次のファイルの `__CLASSPATH` 変数に、JDBC ドライバへのパスを追加します。  
 UNIX の場合:<WebLogic domain: WebLogic ドメイン>/bin/setDomainEnv.sh  
 Windows の場合:<WebLogic domain: WebLogic ドメイン>\bin\setDomainEnv.cmd  
**注:** 他の WebLogic Server ライブラリへのパスの前に、JDBC ドライバへのパスを配置します。

### 手順 2.MDM Hub マスタデータベースのデータソースの作成

JDBC ドライバをインストールした後で、MDM Hub マスタデータベース用のデータソースを作成します。

1. WebLogic 管理コンソールで、**【ロックして編集】** ボタンをクリックしてロックを取得します。
2. **【サービス】 > 【JDBC】 > 【データソース】** をクリックし、**【新規作成】** をクリックします。  
**【JDBC データソースのプロパティ】** ページが表示されます。
3. 以下のデータソースのプロパティを指定してください。

プロパティ	説明
名前	JDBC データソースの名前。「MDM Master Data Source」という名前を付けます。
JNDI 名	JDBC データソースが関連付けられる場所への JNDI パス。jdbc/siperian-cmx_system-ds と指定します。

プロパティ	説明
データベースタイプ	接続先にするデータベースのタイプ。[Oracle] を選択します。
データベースドライバ	データベースへの接続に使用する JDBC ドライバ。[Oracle ドライバ (Thin XA)] を選択します。

4. **【次へ】** をクリックし、**【次へ】** をもう一度クリックします。

**【接続プロパティ】** ページが表示されます。

5. 次の接続プロパティの値を入力します。

プロパティ	説明
データベース名	接続するデータベースの名前。
ホスト名	データベースをホストするサーバーの DNS 名または IP アドレス。
ポート	データベースサーバーが接続リクエストをリスンするポート。
データベースユーザー名	データソース内の各接続に使用するデータベースユーザー名。
パスワード	データベースユーザーアカウントのパスワード。
パスワードの確認	データベースユーザーアカウントのパスワード。

6. **【次へ】** をクリックします。

**【データベース接続のテスト】** ページが表示されます。

7. **【設定のテスト】** をクリックして、ドライバ接続をテストします。

テストに失敗した場合は、**【接続プロパティ】** ページ内の値を更新し、成功するまで接続を繰り返し試行する必要があります。

8. **【次へ】** をクリックし、データソースをデプロイするサーバーを選択します。

9. **【完了】** をクリックし、**【変更のアクティブ化】** をクリックします。

### 手順 3. オペレーショナル参照ストアのデータソースの作成

各オペレーショナル参照ストアのデータソースを作成します。

1. WebLogic 管理コンソールで、**【ロックして編集】** ボタンをクリックしてロックを取得します。
2. **【サービス】** > **【JDBC】** > **【データソース】** をクリックし、**【新規作成】** をクリックします。  
**【JDBC データソースのプロパティ】** ページが表示されます。

3. 以下のデータソースのプロパティを指定してください。

プロパティ	説明
名前	JDBC データソースの名前。「MDM ORS Data Source」という名前を付けます。
JNDI 名	JDBC データソースが関連付けられる場所への JNDI パス。「jdbc/siperian-<oracle host name>-<oracle sid>-<Operational reference Store name>-ds」と指定します。
データベースタイプ	接続先にするデータベースのタイプ。[Oracle] を選択します。
データベースドライバ	データベースへの接続に使用する JDBC ドライバ。[Oracle ドライバ (Thin XA)] を選択します。

4. [次へ] をクリックし、[次へ] をもう一度クリックします。

[接続プロパティ] ページが表示されます。

5. 次の接続プロパティの値を入力します。

プロパティ	説明
データベース名	接続するデータベースの名前。
ホスト名	データベースをホストするサーバーの DNS 名または IP アドレス。
ポート	データベースサーバーが接続リクエストをリスンするポート。
データベースユーザー名	データソース内の各接続に使用するデータベースユーザー名。
パスワード	データベースユーザーアカウントのパスワード。
パスワードの確認	データベースユーザーアカウントのパスワード。

6. [次へ] をクリックします。

[データベース接続のテスト] ページが表示されます。

7. [設定のテスト] をクリックして、ドライバ接続をテストします。

テストに失敗した場合は、[接続プロパティ] ページ内の値を更新し、成功するまで接続を繰り返し試行する必要があります。

8. [次へ] をクリックし、データソースをデプロイするサーバーを選択します。

9. [完了] をクリックし、[変更のアクティブ化] をクリックします。

## 手順 2.JMS メッセージキューの設定

Hub サーバーアプリケーションを手動でデプロイする前に、JMS メッセージキューを設定します。また問題をトラブルシューティングする場合にも、JMS メッセージキューを手動で設定しなければならない場合があります。例えば、自動化されたキュー作成プロセスが失敗したり、インストール後に誤ってキューを削除した場合などには、メッセージキューを手動で設定する必要があります。

サービス統合フレームワーク (SIF) は、JMS メッセージキュー上のメッセージ駆動型 Bean を使用して、受信非同期 SIF 要求を処理します。MDM Hub の実装に使用するアプリケーションサーバーに対して、メッセージ

キューと接続ファクトリを設定します。JMS メッセージキューを設定する際に、接続ファクトリも作成できます。

JMS メッセージキューを設定するには、次のタスクを実行します。

1. JMS サーバーとモジュールを作成します。
2. モジュールの接続ファクトリを作成します。
3. モジュールに JMS メッセージキューを追加します。
4. サブデプロイメントキューを作成します。

**注:** クラスタ環境で MDM Hub に JMS メッセージキューを作成する場合、移行可能なターゲットサーバーを選択していることを確認してください。JMS モジュールを設定する場合は、「**クラスタ内のすべてのサーバー**」をターゲットにします。詳細については、WebLogic のマニュアルを参照してください。

## 手順 1.JMS サーバーおよびモジュールの作成

Weblogic の管理コンソールを使用して、JMS メッセージキューを作成します。このメッセージキューに対して JMS サーバーおよびモジュールを作成します。

1. WebLogic コンソールを起動し、**[ロックして編集]** をクリックします。
2. **[サービス] > [メッセージング] > [JMS サーバー]** の順に移動します。
3. SiperianJMSServer という名前の JMS サーバーを作成し、**[次へ]** をクリックします。
4. **[ターゲット]** リストでサーバー名を選択して、**[完了]** をクリックします。
5. **[サービス] > [メッセージング] > [JMS モジュール]** の順に移動します。
6. SiperianModule という名前の JMS モジュールを作成し、**[次へ]** をクリックします。
7. **[ターゲットサーバー]** チェックボックスをオンにします。
8. **[次へ]** をクリックし、**[完了]** をクリックします。

## 手順 2.モジュールの接続ファクトリの設定

作成したモジュールに対して接続ファクトリを作成、設定します。

1. [「手順 1.JMS サーバーおよびモジュールの作成」 \(ページ 61\)](#)で作成した SiperianModule に移動します。
2. **[リソースの概要]** で **[新規作成]** をクリックします。
3. **[接続ファクトリ]** を選択し、**[次へ]** をクリックします。
4. 名前と JNDI 名の両方に siperian.mrm.jms.xaconnectionfactory を指定し、**[次へ]** をクリックします。
5. **[ターゲットサーバー]** を選択し、**[完了]** をクリックします。  
siperian.mrm.jms.xaconnectionfactory 接続ファクトリが作成されます。
6. **[設定]** で、作成した siperian.mrm.jms.xaconnectionfactory 接続ファクトリに移動します。
7. **[トランザクション]** をクリックします。
8. **[XA 接続ファクトリが有効]** をオンにして、**[保存]** をクリックします。

## 手順 3. モジュールへのメッセージキューの追加

作成したモジュールには、JMS メッセージキューを追加することができます。

1. **[SiperianModule]** に移動して、**[リソースのサマリ]** の下の **[新規作成]** をクリックします。
2. **[キュー]** を選択して **[次へ]** をクリックします。
3. 名前と JNDI 名の両方に siperian.sif.jms.queue を指定し、**[次へ]** をクリックします。

4. [「手順 1.JMS サーバーおよびモジュールの作成」 \(ページ 61\)](#)で作成した JMS サーバーを選択し、**[完了]** をクリックします。
5. **[変更のアクティブ化]** をクリックします。

## 手順 4。サブデプロイメントキューの作成

作成したモジュールに JMS メッセージキューを追加したら、サブデプロイメントキューを作成します。

1. **[リソースの概要]** の [SiperianModule] に移動して、**[新規]** をクリックします。
2. **[キュー]** を選択して **[次へ]** をクリックします。
3. **[新しいサブデプロイメントの作成]** ボタンをクリックします。
4. **[サブデプロイメント名]** が siperian.sif.jms.queue になっていることを確認し、**[OK]** をクリックします。
5. 名前と JNDI 名の両方に siperian.sif.jms.queue を指定し、**[次へ]** をクリックします。
6. 作成した JMS サーバーを選択し、**[完了]** をクリックします。
7. **[変更のアクティブ化]** をクリックします。

## 手順 3.Hub サーバーの EAR ファイルの再パッケージ化

cmxserver.properties ファイルで cmx.home プロパティを編集するか、アプリケーションサーバークラスタをインストールした場合は、管理サーバーで Hub サーバーの EAR ファイルを再パッケージ化します。

1. EAR という名前のディレクトリを作成します。
  - a. 次のディレクトリに移動します。  
    <MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/lib
  - b. 次のコマンドを実行します。  
    mkdir ear
2. カスタム JAR ファイルがある場合は、各カスタム JAR ファイルを前の手順で作成した EAR ディレクトリにコピーします。

カスタム JAR ファイルを EAR ディレクトリにコピーするには、次のコマンドを実行します。

```
copy <location of custom JAR file: カスタム JAR ファイルの場所>/<custom JAR file name: カスタム JAR ファイル名>.jar ear
```

カスタムユーザーイグジット用にカスタム JAR ファイルが必要になる場合があります。
3. EAR ファイルを再パッケージ化します。
  - a. 次のディレクトリに移動します。  
    <MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/bin
  - b. 次のコマンドを実行します。  
    UNIX の場合: ./sip\_ant.sh repack  
    Windows の場合: sip\_ant.bat repack

## 手順 4.Hub サーバーアプリケーションのデプロイ

Hub サーバーアプリケーションを手動でデプロイできます。Hub サーバーアプリケーションのデプロイは、Hub サーバーのインストールディレクトリから行う必要があります。

1. 既存のデプロイメントがある場合は、WebLogic Server 管理コンソールを使用して、次のデプロイメントファイルのデプロイを解除します。

デプロイメントファイル名	説明
siperian-mrm.ear	必須。Hub サーバーアプリケーション。
provisioning-ear.ear	必須。プロビジョニングツールアプリケーション。
entity360view-ear.ear	オプション。エンティティ 360 フレームワーク。
informatica-mdm-platform-ear.ear	オプション。Informatica Platform アプリケーション。
ave_weblogic.ear	オプション。ActiveVOS サーバーアプリケーション。
activevos-central.war	オプション。ActiveVOS Central アプリケーション。

2. WebLogic Server 管理コンソールを使用して、デプロイメントファイルをデプロイします。
3. 管理対象サーバーがある環境にデプロイする場合、WebLogic Server 管理コンソールでデプロイメントのターゲットを指定するようにします。
  - a. 次の Hub サーバーデプロイメントのターゲットとしてすべての管理対象サーバーを指定します。

デプロイメントファイル名	説明
siperian-mrm.ear	必須。Hub サーバーアプリケーション。
provisioning-ear.ear	必須。プロビジョニングツールアプリケーション。
entity360view-ear.ear	オプション。エンティティ 360 フレームワーク。
informatica-mdm-platform-ear.ear	オプション。Informatica Platform アプリケーション。
ave_weblogic.ear	オプション。ActiveVOS サーバーアプリケーション。
activevos-central.war	オプション。ActiveVOS Central アプリケーション。

- b. JMS モジュール SiperianModule のターゲットとしてすべての管理対象サーバーを指定します。
- c. 次のデータソースのターゲットとしてすべての管理対象サーバーを指定します。
  - MDM Hub マスタデータベースのデータソース
  - オペレーショナル参照ストアのデータソース
- d. スタートアップクラスとシャットダウンクラスのターゲットとしてすべての管理対象サーバーを指定します。

詳細については、WebLogic Server のマニュアルを参照してください。

## 手順 5. Hub サーバーでの JMS メッセージキューの設定

Hub サーバーアプリケーションを手動でデプロイしたら、Hub サーバーに JMS メッセージキューを設定します。

Hub サーバーに JMS メッセージキューを設定するには、次のタスクを実行します。

1. Hub コンソールを起動します。
2. メッセージキューサーバーを追加します。
3. メッセージキューを追加します。

### 手順 1. Hub コンソールの起動

MDM Hub にアクセスするには、Hub コンソールを起動します。

1. ブラウザウィンドウを開いて、以下の URL を入力します。  
`http://<MDM Hub host: MDM Hub ホスト>:<port number: ポート番号>/cmx/`  
ポート番号が正しいかどうかを管理者に確認してください。  
**【ハブコンソールの起動】** ウィンドウが表示されます。
2. Hub コンソールを起動します。
3. ユーザー名とパスワードを入力し、**【ログイン】** をクリックします。  
Java Web Start によってアプリケーションファイルがダウンロードされます。  
**【Informatica MDM Hub ログイン】** ダイアログボックスが表示されます。
4. ユーザー名とパスワードを入力して、**【OK】** をクリックします。  
**【データベースの変更】** ダイアログボックスが表示されます。
5. ターゲットデータベースを選択します。  
ターゲットデータベースは MDM Hub マスターデータベースです。
6. リストから言語を選択して、**【接続】** をクリックします。  
Hub コンソールのユーザーインターフェイスが、選択した言語で表示されます。Hub コンソールユーザーインターフェイスを表示する言語を変更する場合は、言語を選択して Hub コンソールを再起動します。

### 手順 2. メッセージキューサーバーの追加

メッセージキューを追加する前に、メッセージキューサーバーを MDM Hub 実装に追加する必要があります。

1. Hub コンソールの設定ワークベンチで、**【メッセージキュー】** をクリックします。
2. **【書き込みロック】** > **【ロックの取得】** の順にクリックします。
3. メッセージキューツールの中央のペインを右クリックして、**【メッセージキューサーバーの追加】** をクリックします。  
**【メッセージキューサーバーの追加】** ダイアログボックスが表示されます。
4. メッセージキューサーバーの詳細情報を入力します。



次の表に、JMS メッセージキューサーバーを設定するために使用するフィールドを示します。

フィールド名	値
接続ファクトリ名	接続ファクトリの名前。 siperian.mrm.jms.xaconnectionfactory を指定します。
表示名	Hub コンソールに表示される必要のあるメッセージキューサーバーの名前。 siperian.mrm.jms.xaconnectionfactory を指定します。

5. **[OK]** をクリックします。  
メッセージキューサーバーが追加されました。

### 手順 3. メッセージキューの追加

メッセージキューサーバーにメッセージキューを追加できます。

1. Hub コンソールの設定ワークベンチで、**[メッセージキュー]** をクリックします。
2. **[書き込みロック]** > **[ロックの取得]** の順にクリックします。
3. メッセージキューツールの中央のペインでメッセージキューサーバーを右クリックしてから、**[メッセージキューの追加]** をクリックします。  
**[メッセージキューの追加]** ダイアログボックスが表示されます。
4. JMS メッセージキューの詳細を入力します。  
次の表に、JMS メッセージキューのフィールドを示します。

フィールド名	値
Queue Name	メッセージキューの名前。 java:/queue/siperian.sif.jms.queue を指定します。
表示名	Hub コンソールに表示されるメッセージキューの名前。 java:/queue/siperian.sif.jms.queue を指定します。

5. **[OK]** をクリックします。  
メッセージキューがメッセージキューサーバーに追加されました。
6. 右ペインで、**[メッセージトリガで使用]** オプションを選択します。
7. **[テスト]** をクリックします。  
メッセージキューのテスト結果が表示されます。

## 手順 6. Informatica Data Director のサーバーリソースの設定

Informatica Data Director (IDD) を使用する場合は、JNDI URL リソースを設定します。

1. weblogic-jndi-startup-1.3.jar ファイルをソースディレクトリからターゲットディレクトリにコピーします。  
ソース:<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/lib  
ターゲット:<WebLogic インストールディレクトリ>/domains/<ドメイン名>/lib

- WebLogic Server 管理コンソールで、[環境] > [スタートアップクラスとシャットダウンクラス] をクリックします。
- JNDI URL リソースを設定するには、JndiServerDir スタートアップクラスの次のプロパティを設定します。

クラスプロパティ	値
クラス名	nz.co.senanque.jndi.WebLogicJndiStartup
デプロイメント順序	1000
引数	url/hubserver/home<java.net.URL>=file:///<Hub サーバーインストールディレクトリ>

- スタートアップクラスのターゲットを設定します。

## WebLogic の再起動

インストールプロセスにより、WebLogic Server の AnonymousAdminLookupEnabled メソッドが有効になります。AnonymousAdminLookupEnabled メソッドは、オペレーショナル参照ストアの登録のために有効にされる必要があります。Hub Server のインストール後に WebLogic Server を再起動しないと、オペレーショナル参照ストアが失敗します。

## メタデータキャッシュの設定（オプション）。

メタデータキャッシュは、データオブジェクト、リポジトリオブジェクト、検索トークンなどのアイテムを管理します。MDM Hub は、Infinispan を使用してメタデータキャッシュを実行します。Infinispan は、Hub サーバーと共にインストールされます。Hub サーバーが使用するキャッシュの場合、Infinispan 設定ファイルにはデフォルトの属性値が含まれます。

キャッシュのデフォルトの属性値を使用して MDM Hub ハブを実行します。パフォーマンスの問題が発生した場合は、環境にさらに適合するように属性値を微調整できます。

次の表は、デフォルトの属性値をまとめたものです。

Infinispan の要素と属性	デフォルト値	説明
locking acquire- timeout	60000	Hub サーバーがロックを取得しようとする最大時間。
transaction stop-timeout	30000	キャッシュが停止したときに、この属性は、Hub サーバーがリモートおよびローカルトランザクションを完了するまでに Infinispan が待機する最大時間を設定します。

Infinispan の要素と属性	デフォルト値	説明
transport-cluster	infinispan-cluster	基本になるグループ通信クラスタの名前。
transport-stack	UDP	設定のタイプ: UDP または TCP。設定は、jgroups-udp.xml ファイルおよび jgroups-tcp.xml ファイルで定義されます。
transport-node-name	\$node\$	現在のノードの名前。Hub サーバーはこの属性を設定します。 ノード名のデフォルトは、ホスト名と乱数の組み合わせです。この番号は、同じホスト上の複数のノードを区別します。
transport-machine	\$machine\$	ノードが実行されるマシンの ID。Hub サーバーはこの属性を設定します。
expiration-lifespan	--	キャッシュエントリの最大存続期間（ミリ秒単位）。キャッシュエントリが存続期間を超えると、エントリはクラスタ内で有効期限が切れます。 パフォーマンスを最適化する必要がある場合は、DISABLE_WHEN_LOCK、DATA_OBJECTS、および REPOS_OBJECTS の各キャッシュの存続期間を長くします。 例えば、存続期間を長くして、1 時間（3600000）から 1 日（86400000）にすることができます。 各キャッシュには、この属性の独自のデフォルト値があります。デフォルト値を見つけるには、infinispanConfig.xml ファイルを開きます。
expiration-interval	--	存続期間を確認するための最大間隔。パフォーマンスを最適化する必要がある場合は、DISABLE_WHEN_LOCK、DATA_OBJECTS、および REPOS_OBJECTS の各キャッシュの間隔を長くします。 例えば、間隔を 5 秒（5000）から 5 分（300000）に増やすことができます。 各キャッシュには、この属性の独自のデフォルト値があります。デフォルト値を見つけるには、infinispanConfig.xml ファイルを開きます。

## Infinispan 属性の編集

メタデータキャッシュ属性を設定するには、Hub サーバーの `infinispanConfig.xml` ファイルを編集します。  
Infinispan 設定のヘルプについては、Infinispan のマニュアルを参照してください。

**注:** プロセスサーバーには、Infinispan 設定ファイルもあります。デフォルトの属性値は十分に機能するはずですが、プロセスサーバーのパフォーマンスに問題があることに気付く場合は、属性値を微調整できます。

1. 次のディレクトリに移動します。<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/resources
2. 次のファイルのバックアップコピーを作成します。infinispanConfig.xml
3. infinispanConfig.xml ファイルを開き、Infinispan バージョン番号を見つけます。これは xsi:schemaLocation 属性内にあります。
4. その Infinispan バージョンのマニュアルを確認します。

**注:** 次の URL で、パスに # が含まれている場合は、バージョン番号を置き換えます。#.

- 設定スキーマを表示するには、ファイルの xsi:schemaLocation 属性に含まれている URL に移動します。
- 属性の詳細を知るには、<https://docs.jboss.org/infinispan/<#. #.x>/configdocs/>に移動してください。

- Infinispan の詳細を知るには、<http://infinispan.org/docs/<#.x>>に移動し、「Frequently Asked Questions」リンクを選択します。
5. ファイルを編集して保存します。

## Hub コンソールの起動

MDM Hub にアクセスするには、Hub コンソールを起動します。HTTP または HTTPS 接続を使用して Hub コンソールを起動します。

Hub コンソールを起動する前に、ユーザー名とパスワードが設定されていることを確認します。

1. ブラウザウィンドウを開いて、以下の URL を入力します。  
`http://<MDM Hub host: MDM Hub ホスト>:<port number: ポート番号>/cmx/`  
ポート番号が正しいかどうかを管理者に確認してください。  
**【ハブコンソールの起動】** ウィンドウが表示されます。
2. Hub コンソールを起動します。
3. ユーザー名とパスワードを入力し、**【ログイン】** をクリックします。  
Java Web Start によってアプリケーションファイルがダウンロードされます。  
**【Informatica MDM Hub ログイン】** ダイアログボックスが表示されます。
4. ユーザー名とパスワードを入力して、**【OK】** をクリックします。  
**【データベースの変更】** ダイアログボックスが表示されます。
5. ターゲットデータベースを選択します。  
ターゲットデータベースは MDM Hub マスターデータベースです。
6. リストから言語を選択して、**【接続】** をクリックします。  
Hub コンソールのユーザーインターフェースが、選択した言語で表示されます。Hub コンソールユーザーインターフェースを表示する言語を変更する場合は、言語を選択して Hub コンソールを再起動します。

## オペレーショナル参照ストアの登録

オペレーショナル参照ストアを作成したら、それを Hub コンソールで登録する必要があります。オペレーショナル参照ストアを単一の MDM Hub マスターデータベースに登録します。

1. Hub コンソールを起動します。  
**【データベースの変更】** ダイアログボックスが表示されます。
2. **【MDM Hub マスタデータベース】** を選択して、**【接続】** をクリックします。
3. **【設定】** ワークベンチで、**【データベース】** ツールをクリックします。
4. **【書き込みロック】** メニューから **【ロックの取得】** をクリックします。
5. **【データベース】** ペインで、**【データベースの登録】** ボタンをクリックします。  
**Informatica MDM Hub 接続ウィザード**が表示されます。
6. Oracle データベースタイプオプションを選択して、**【次へ】** をクリックします。

7. データベースの接続プロパティを設定します。

- a. Oracle の接続方式を選択して、**【次へ】** をクリックします。

次の表に、選択できる Oracle の接続方式を示します。

接続方式	説明
サービス	サービス名を使用して Oracle に接続します。
SID	Oracle のシステム ID を使用して Oracle に接続します。

サービス名と SID 名の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

**【接続プロパティ】** ページが表示されます。

- b. 選択する接続タイプの接続プロパティを指定し、**【次へ】** をクリックします。

以下の表に、接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
データベース表示名	Hub コンソールに表示される必要のあるオペレーショナル参照ストアの名前。
マシン識別子	Hub ストアインスタンスからのレコードを一意に識別するためにキーに割り当てられるプレフィックス。
データベースホスト名	Oracle データベースをホストするサーバーの IP アドレスまたは名前。
SID	サーバー上で実行される Oracle データベースのインスタンスを参照する Oracle システム識別子。[SID] フィールドは、[SID] 接続タイプを選択した場合に表示される。
サービス	Oracle データベースへの接続に使用する Oracle サービスの名前。 <b>【サービス】</b> フィールドは、 <b>【サービス】</b> 接続タイプを選択した場合に表示される。
ポート	Oracle データベースサーバー上で実行される Oracle リスナの TCP ポート。デフォルトは 1521。
Oracle TNS 名	TNSNAMES.ORA ファイルで定義されている、ネットワーク上のデータベース名。Oracle TNS 名は、Oracle データベースのインストール時に設定します。Oracle TNS 名の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。
スキーマ名	オペレーショナル参照ストアの名前。
パスワード	オペレーショナル参照ストアユーザー名に関連付けられているパスワード。
DDM 接続 URL	オプション。Dynamic Data Masking アプリケーションに接続するための URL。この Dynamic Data Masking アプリケーションの URL は、Dynamic Data Masking のホスト名およびポート番号を使用する点を除けば、データベースへの接続に使用する URL と似ています。

**注: スキーマ名とユーザー名は、どちらもオペレーショナル参照ストアを作成するときに指定したオペレーショナル参照ストアの名前です。この情報が必要な場合はデータベース管理者に問い合わせます。**

サマリページが表示されます。

- c. サマリを確認し、追加の接続プロパティを指定します。  
以下の表に、設定可能な追加の接続プロパティを示します。

プロパティ	説明
接続 URL	接続 URL。接続ウィザードでは、デフォルトで接続 URL が生成されます。 次のリストに、Oracle 接続タイプの接続 URL のフォーマットを示します。 - サービス接続タイプ。jdbc:oracle:thin:@//database_host:port/service_name - SID 接続タイプ。jdbc:oracle:thin:@//database_host:port:sid [サービス] 接続タイプの場合、カスタマイズし、後で別の接続 URL をテストするオプションがあります。
登録後にデータソースを作成する	登録後にアプリケーションサーバーのデータソースを作成する場合は選択します。このオプションを選択しない場合、手動でデータソースを設定する必要があります。 <b>注:</b> アプリケーションサーバークラスタ環境で、オペレーショナル参照ストア用のデータソースと接続プールを手動で作成します。

- d. サービス接続タイプには、デフォルトの URL を変更する場合、**[編集]** ボタンをクリックし、URL を指定して **[OK]** をクリックします。
8. **[完了]** をクリックします。  
**[データベースの登録]** ダイアログボックスが表示されます。
9. **[OK]** をクリックします。  
MDM Hub でオペレーショナル参照ストアが登録されます。
10. 登録したオペレーショナル参照ストアを選択して、**[データベース接続のテスト]** ボタンをクリックします。  
[データベースのテスト] ダイアログに、データベース接続テストの結果が表示されます。
11. **[OK]** をクリックします。  
オペレーショナル参照ストアが登録され、データベースへの接続がテストされます。

## 第 7 章

# Process サーバーのインストール

この章では、以下の項目について説明します。

- [プロセスサーバーのインストールモード, 71 ページ](#)
- [グラフィカルモードでのプロセスサーバーのインストール, 71 ページ](#)
- [コンソールモードでのプロセスサーバーのインストール, 73 ページ](#)
- [サイレントモードでのプロセスサーバーのインストール, 75 ページ](#)
- [管理対象サーバーがある環境でのプロセスサーバーのインストール, 76 ページ](#)

## プロセスサーバーのインストールモード

プロセスサーバーをインストールするには、次のいずれかのモードを使用します。

- グラフィカルモード
- コンソールモード
- サイレントモード

## グラフィカルモードでのプロセスサーバーのインストール

グラフィカルモードで Process サーバーをインストールできます。

Hub サーバーと Process サーバーをインストールするには、同じユーザー名を使用する必要があります。

**注:** Process サーバーを RedHat Linux 上にインストールする場合は、root ユーザーを使用しないでください。root ユーザーには、InstallAnywhere に必要な .profile がありません。代わりに、別のユーザープロファイルを作成して、Process サーバーのインストールに使用します。

1. アプリケーションサーバーを起動します。
2. コマンドプロンプトを開き、次のディレクトリに移動します。  
`<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/<operating system name: オペレーティングシステム名>/mrncleanse`
3. 次のコマンドを実行します。

UNIX の場合:hub\_cleanse\_install.bin

Windows の場合:hub\_cleanse\_install.exe

4. インストールの言語を選択し、**[OK]** をクリックします。

**[概要]** ウィンドウが表示されます。

5. **[次へ]** をクリックします。

**[使用許諾契約]** ウィンドウが表示されます。

6. **[使用許諾契約に同意する]** オプションを選択し、**[次へ]** をクリックします。

**[インストールフォルダの選択]**ウィンドウが表示されます。

7. デフォルトのプロセスサーバーのインストール先を使用するか、別のインストール先を選択します。**[次へ]** をクリックします。

**重要:** パスの全長が 256 文字を超えているか、ディレクトリまたはフォルダ名にスペースが含まれていると、Process サーバーはロードに失敗します。

UNIX の場合、**[リンクフォルダの選択]** ウィンドウが表示されます。

Windows の場合、**[ショートカットフォルダの選択]** ウィンドウが表示されます。

8. 製品アイコンの場所を選択し、**[次へ]** をクリックします。

**[ライセンスファイルの場所の入力]** ウィンドウが表示されます。

9. **[選択]** をクリックしてライセンスファイルを選択し、**[次へ]** をクリックします。

**[アプリケーションサーバー]** ウィンドウが表示されます。

10. WebLogic を選択し、**[次へ]** をクリックします。

**[WebLogic アプリケーションサーバー: ホーム]** ウィンドウが表示されます。

11. 次の WebLogic Server を設定します。

- a. MDM Hub で使用するドメインとして、WebLogic ドメインのインストールディレクトリのパスを選択します。 **[次へ]** をクリックします。

**[WebLogic アプリケーションサーバー: ログイン]** ウィンドウが表示されます。

- b. ログインパラメータに値を入力します。

以下の表に、ログインパラメータを示します。

パラメータ	説明
ホスト	WebLogic がインストールされているホストコンピュータの名前。
サーバー	WebLogic がデプロイされているドメイン内の WebLogic Server インスタンスの名前。例えば、[AdminServer] など。
ユーザー名	WebLogic インストールのユーザー名。
パスワード	WebLogic のユーザー名に対応するパスワード。
ポート番号	WebLogic Server がリスンするポート番号。

12. 使用するクレンジングエンジンに合わせて、クレンジングエンジンを設定します。

- Informatica Address Verification を使用している場合は、構成ファイルとパラメータファイルの場所、および修正タイプのパラメータを指定します。
- Business Objects DQ XI を使用している場合は、Business Objects DQ XI クレンジングエンジンのホスト、ポート、サブファイルにパラメータを指定します。



13. [製品使用ツールキット] ページで [環境タイプ] を選択します。
14. プロキシサーバーがある場合は、[はい] を選択してプロキシサーバーの詳細を入力します。そうでない場合は、[いいえ] を選択し、[次へ] をクリックします。  
次のプロキシサーバーの詳細を入力できます。
  - プロキシサーバーの名前/IP
  - プロキシサーバーのポート
  - プロキシサーバーのドメイン名。不要な場合は空白のままにします。
  - プロキシサーバーのユーザー名。不要な場合は空白のままにします。
  - プロキシサーバーのパスワード。不要な場合は空白のままにします。
15. [デプロイ] ページで [後で実行する] オプションを選択します。インストール後スクリプトを後で手動で実行できます。
16. [次へ] をクリックします。  
[インストール前のサマリ] ウィンドウが表示されます。
17. サマリウィンドウで設定内容を確認したら、[インストール] をクリックしてインストールプロセスを開始します。  
インストールが完了すると、[インストールの完了] ウィンドウが表示されます。
18. システムを今すぐ再起動するか、後で再起動するかを選択します。
19. [完了] をクリックして Process サーバーインストーラを終了します。  
インストール後、『*Informatica MDM Multidomain Edition Cleanse Adapter Guide*』の手順に従ってクレンジングエンジンに追加の設定を実行する必要があります。

## コンソールモードでのプロセスサーバーのインストール

UNIX では、Process サーバーをコンソールモードでインストールできます。

**注:** Process サーバーを RedHat Linux 上にインストールする場合は、root ユーザーを使用しないでください。root ユーザーには、InstallAnywhere に必要な .profile がありません。代わりに、別のユーザープロファイルを作成して、Process サーバーのインストールに使用します。

1. アプリケーションサーバーを起動します。
2. コマンドプロンプトを開き、次のディレクトリ内のプロセスサーバーのインストーラに移動します。  
<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/<operating system name: オペレーティングシステム名>/mrncleanse
3. コマンドプロンプトで次のコマンドを実行します。  
./hub\_cleanse\_install.bin -i console
4. インストールで選択するロケールに対応する番号を入力し、**Enter** を押します。  
インストールに関する概要情報が表示されます。
5. **Enter** キーを押します。  
使用許諾契約が表示されます。
6. 使用許諾契約に目を通します。**Y** と入力して、使用許諾契約に同意するか、または使用許諾契約に同意しない場合は、**N** と入力してインストールプログラムを終了します。

7. **Enter** キーを押します。  
前の手順で **Y** と入力した場合、インストールフォルダに関する情報が表示されます。
8. Process サーバーをインストールするフォルダを選択します。
  - デフォルトの場所を選択する場合は、**Enter** キーを押します。
  - パスを変更する場合は、インストールフォルダの絶対パスを入力し、**Enter** キーを押します。
9. インストールフォルダの場所を確認します。インストールフォルダを確認して **Y** と入力するか、または **N** と入力してインストールフォルダを変更します。
10. **Enter** キーを押します。  
ライセンスファイルの場所を尋ねるプロンプトが表示されます。
11. ライセンスファイルの場所を絶対パスで入力し、**Enter** を押します。  
アプリケーションサーバーのオプションのリストが表示されます。
12. 選択するアプリケーションサーバーの数を入力し、**Enter** キーを押します。  
アプリケーションサーバーの情報が表示されます。
13. WebLogic 設定を設定します。
  - a. Hub サーバーのインストール先にする WebLogic ドメインへのパスを指定して、**Enter** を押します。  
WebLogic アプリケーションサーバーのログイン情報を尋ねるプロンプトが表示されます。
  - b. ホスト名、サーバー名、ユーザー名、パスワード、および WebLogic Server のリスナポートを入力するか、デフォルト値を受け入れて、**Enter** キーを押します。
14. **Enter** キーを押します。
15. クレンジングエンジン設定を設定します。
  - Informatica Address Verification を使用する場合は、次のパラメータを設定します。
    - 構成ファイルの場所を指定し、**Enter** キーを押します。
    - パラメータファイルの場所を指定し、**Enter** キーを押します。
    - デフォルトの修正タイプを指定して、**Enter** キーを押します。
  - Business Objects DQ XI を使用する場合、以下のパラメータを設定します。
    - ホスト名を指定し、**Enter** キーを押します。
    - ポートを指定し、**Enter** キーを押します。
    - サブファイルの場所を指定し、**Enter** キーを押します。
16. [製品使用ツールキット] オプションから、環境タイプを選択します。Production に 1、Test/QA に 2、Development に 3 を入力してから **Enter** キーを押します。
17. プロキシサーバーがあるかどうかを選択します。ある場合は、**Enter** キーを押します。そうでない場合は、2 を入力して **Enter** キーを押します。  
次のプロキシサーバーの詳細を入力できます。
  - プロキシサーバーの名前/IP
  - プロキシサーバーのポート
  - プロキシサーバーのドメイン名。不要な場合は空白のままにします。
  - プロキシサーバーのユーザー名。不要な場合は空白のままにします。
  - プロキシサーバーのパスワード。不要な場合は空白のままにします。インストールの設定のサマリが表示されます。
18. インストール中に postInstallSetup を実行するか、後で手動で実行するか、いずれかの方法を選択します。

19. **Enter** キーを押します。  
インストールの設定のサマリが表示されます。
20. インストール前のサマリに表示された情報を確認します。設定内容に問題がなければ、**Enter** キーを押してインストールを開始します。変更する必要がある場合は、特定の情報に対して BACK と入力して変更を行います。  
指定した設定情報に従って Hub Server がインストールされます。プロセスが完了すると、インストールの完了に関する情報が表示されます。
21. **Enter** キーを押します。  
指定した情報に従って Process サーバーがインストールされ、インストールの完了に関する情報が表示されます。
22. **Enter** キーを押してインストーラを終了します。

## サイレントモードでのプロセスサーバーのインストール

サイレントモードでプロセスサーバーをインストールできます。サイレントインストールを開始する前に、サイレントインストールのプロパティファイルが設定されていることを確認します。

**注:** Process サーバーを RedHat Linux 上にインストールする場合は、root ユーザーを使用しないでください。root ユーザーには、InstallAnywhere に必要な .profile がありません。代わりに、別のユーザープロファイルを作成して、Process サーバーのインストールに使用します。

1. アプリケーションサーバーを起動します。
2. コマンドプロンプトを開き、次のコマンドを実行します。  
UNIX の場合: `./hub_cleansetup_install.bin -f <Path to the Process Server silent installation properties file: プロセスサーバーサイレントインストールプロパティファイルへのパス>`  
Windows の場合: `hub_cleansetup_install.exe -f <Path to the Process Server silent installation properties file: プロセスサーバーサイレントインストールプロパティファイルへのパス>`  
自動インストーラがバックグラウンドで実行します。プロセスにしばらく時間がかかる場合があります。
3. プロセスサーバーの postInstallSetup スクリプトをサイレントインストールの一部として実行した場合、postinstallSetup.log でインストールが正常に行われたことを確認します。  
ログファイルは次のディレクトリにあります。<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/cleansetup/logs

# 管理対象サーバーがある環境でのプロセスサーバーのインストール

プロセスサーバーアプリケーションをデプロイする必要がある管理サーバーとすべての管理対象サーバーで、プロセスサーバーをインストールします。クラスタ環境では、プロセスサーバーのインストールパスがすべてのクラスタノードで同じになるようにしてください。

**注:** Process サーバーを RedHat Linux 上にインストールする場合は、root ユーザーを使用しないでください。root ユーザーには、InstallAnywhere に必要な .profile がありません。代わりに、別のユーザープロファイルを作成して、Process サーバーのインストールに使用します。

1. すべてのマシンで、WebLogic 管理サーバーと管理対象サーバーを開始します。
2. コマンドプロンプトを開き、次のディレクトリに移動します。  
<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/<operating system name: オペレーティングシステム名>/mrmcleanse
3. プロセスサーバーのインストーラを起動するには、次のコマンドを実行します。  
UNIX の場合: ./hub\_cleansse\_install.bin -DSIPERIAN\_INSTALL\_PREREQ\_VALIDATION=false  
Windows の場合: hub\_cleansse\_install.exe -DSIPERIAN\_INSTALL\_PREREQ\_VALIDATION=false
4. インストールの言語を選択し、**[OK]** をクリックします。  
**[概要]** ウィンドウが表示されます。
5. **[次へ]** をクリックします。  
**[使用許諾契約]** ウィンドウが表示されます。
6. **[使用許諾契約に同意する]** オプションを選択し、**[次へ]** をクリックします。  
**[インストールフォルダの選択]** ウィンドウが表示されます。
7. デフォルトのプロセスサーバーのインストール先を使用するか、別のインストール先を選択します。**[次へ]** をクリックします。  
**重要:** パスの全長が 256 文字を超えているか、ディレクトリまたはフォルダ名にスペースが含まれていると、Process サーバーはロードに失敗します。  
UNIX の場合、**[リンクフォルダの選択]** ウィンドウが表示されます。  
Windows の場合、**[ショートカットフォルダの選択]** ウィンドウが表示されます。
8. 製品アイコンの場所を選択し、**[次へ]** をクリックします。  
**[ライセンスファイルの場所の入力]** ウィンドウが表示されます。
9. **[選択]** をクリックしてライセンスファイルを選択し、**[次へ]** をクリックします。  
**[アプリケーションサーバー]** ウィンドウが表示されます。
10. WebLogic を選択し、**[次へ]** をクリックします。  
**[WebLogic アプリケーションサーバー: ホーム]** ウィンドウが表示されます。
11. 次の WebLogic Server を設定します。
  - a. MDM Hub で使用するドメインとして、WebLogic ドメインのインストールディレクトリのパスを選択します。 **[次へ]** をクリックします。  
**[WebLogic アプリケーションサーバー: ログイン]** ウィンドウが表示されます。
  - b. ログインパラメータに値を入力します。

以下の表に、ログインパラメータを示します。

パラメータ	説明
ホスト	WebLogic 管理サーバーが作成されたホストコンピュータの名前。
サーバー	WebLogic がデプロイされているドメイン内の WebLogic Server インスタンスの名前。例えば、[AdminServer] など。
ユーザー名	WebLogic インストールのユーザー名。
パスワード	WebLogic のユーザー名に対応するパスワード。
ポート番号	クラスタが開発用クラスタの IP アドレスで設定されている場合、WebLogic クラスタのすべてのノードに管理サーバーポート番号を指定します。 本番用のクラスタ IP アドレスを使用している場合、クラスタのポート番号を指定します。

12. 使用するクレンジングエンジンに合わせて、クレンジングエンジンを設定します。
  - Informatica Address Verification を使用している場合は、構成ファイルとパラメータファイルの場所、および修正タイプのパラメータを指定します。
  - Business Objects DQ XI を使用している場合は、Business Objects DQ XI クレンジングエンジンのホスト、ポート、サブファイルにパラメータを指定します。
13. [製品使用ツールキット] ページで **【環境タイプ】** を選択します。
14. プロキシサーバーがある場合は、**【はい】** を選択してプロキシサーバーの詳細を入力します。そうでない場合は、**【いいえ】** を選択し、**【次へ】** をクリックします。

次のプロキシサーバーの詳細を入力できます。

  - プロキシサーバーの名前/IP
  - プロキシサーバーのポート
  - プロキシサーバーのドメイン名。不要な場合は空白のままにします。
  - プロキシサーバーのユーザー名。不要な場合は空白のままにします。
  - プロキシサーバーのパスワード。不要な場合は空白のままにします。
15. **【デプロイ】** ページで、インストール後のセットアップスクリプトオプションとして **【後で実行する】** を選択します。

**【後で実行する】** オプションによって、手動でインストール後のセットアップスクリプトを後から実行できます。
16. **【次へ】** をクリックします。

**【インストール前のサマリ】** ウィンドウが表示されます。
17. サマリウィンドウで設定内容を確認したら、**【インストール】** をクリックしてインストールプロセスを開始します。

インストールが完了すると、**【インストールの完了】** ウィンドウが表示されます。
18. システムを今すぐ再起動するか、後で再起動するかを選択します。
19. **【完了】** をクリックして Process サーバーインストーラを終了します。

## 第 8 章

# Process サーバーのインストール後のタスク

この章では、以下の項目について説明します。

- [インストールログファイルのコピー, 78 ページ](#)
- [バージョンとビルド番号の確認, 79 ページ](#)
- [プロセスサーバーアプリケーションのデプロイ \(条件付き\), 79 ページ](#)
- [プロセスサーバーでのスマート検索の設定, 84 ページ](#)
- [一致ポピュレーションの設定, 84 ページ](#)
- [プロセスサーバーとクレンジングエンジンの設定, 85 ページ](#)

## インストールログファイルのコピー

インストールログファイルは、Process サーバーのインストールに失敗した場合に、問題を解決するのに役立ちます。ログファイルは、インストールドキュメントディレクトリにコピーしておきます。インストールの問題について問い合わせた場合は、Informatica グローバルカスタマサポートによりログファイルのコピーを求められることがあります。

次の表に、さまざまなタイプのインストールログファイルの説明を示します。

ログファイルのタイプ	説明
インストールログ	<ul style="list-style-type: none"><li>- ファイル名。Informatica_MDM_Cleanse_Match_Server_Install_&lt;timestamp&gt;.xml</li><li>- 場所。&lt;MDM Hub installation directory&gt;/hub/cleanse/UninstallerData/Logs</li><li>- 内容。作成されたディレクトリ、インストールされたファイルおよび実行されたコマンドの名前、インストールされた各ファイルのステータス。</li></ul>
インストール前提条件ログ	<ul style="list-style-type: none"><li>- ファイル名。installPrereq.log</li><li>- 場所。&lt;MDM Hub installation directory&gt;/hub/cleanse/Logs</li><li>- 内容。インストーラによって実行される前提条件チェックのログ。</li></ul>
デバッグログ	<ul style="list-style-type: none"><li>- ファイル名。infamdm_installer_debug.txt</li><li>- 場所。&lt;MDM Hub installation directory&gt;/hub/cleanse/</li><li>- 内容。インストール中に行う選択、およびインストーラによって実行されるアクションに関する詳細情報。</li></ul>

ログファイルのタイプ	説明
インストール後のセットアップログ	<ul style="list-style-type: none"> <li>- ファイル名。postInstallSetup.log</li> <li>- 場所。&lt;MDM Hub installation directory&gt;/hub/cleanse/logs</li> <li>- 内容。インストール後プロセス中にインストーラによって実行されるアクション、およびインストール後プロセスで発生するエラーのサマリ。</li> </ul>
プロセスサーバーのログ	<ul style="list-style-type: none"> <li>- ファイル名。cmxserver.log</li> <li>- 場所。&lt;MDM Hub installation directory&gt;/hub/cleanse/logs</li> <li>- 内容。プロセスサーバーの操作のサマリ。</li> </ul>
WebLogic サーバーのログ	<ul style="list-style-type: none"> <li>- ファイル名。access.log、&lt;WebLogic server&gt;.log、および&lt;WebLogic domain&gt;.log</li> <li>- 場所。&lt;Weblogic domain&gt;/servers/&lt;Weblogic server&gt;/logs</li> <li>- 内容。メッセージの処理ステータス、JMS の接続ステータス、トランザクション詳細、Java 例外、ファイルアクセス詳細が含まれます。</li> </ul>

## バージョンとビルド番号の確認

正しいバージョンとビルド番号のプロセスサーバーがインストールされていることを確認します。

1. コマンドプロンプトを開き、次のディレクトリに移動します。<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/cleanse/bin
2. プロセスサーバーのバージョンとビルド番号を確認するには、次のコマンドを実行します。  
 UNIX の場合: versionInfo.sh  
 Windows の場合: versionInfo.bat  
**注:** AIX システムの場合は、</jre/bin ディレクトリから Java を実行するように、Java home: Java homeversionInfo.sh スクリプトを変更します。

## プロセスサーバーアプリケーションのデプロイ（条件付き）

プロセスサーバーアプリケーションのデプロイメントが必要なシナリオがある場合は、プロセスサーバーアプリケーションをデプロイします。

次のいずれかのシナリオでプロセスサーバーアプリケーションをデプロイする必要があります。

- インストールは、アプリケーションサーバーのマルチノード環境またはクラスタ環境にあります。
- インストールは完了したが、インストール中に実行した postInstallSetup スクリプトが失敗する。
- インストール中に postInstallSetup スクリプトをスキップした。

次の手順を実行して、プロセスサーバーアプリケーションをデプロイします。

1. プロセスサーバーが Hub サーバーと同じアプリケーションサーバーインスタンスにインストールされていない場合は、データソースを作成します。
2. プロセスサーバーアプリケーション siperian-mrm-cleanse.ear をデプロイします。

3. 管理対象サーバーがある環境にデプロイする場合は、デプロイメントのターゲットを指定します。

## 手順 1. データソースの作成（条件付き）

Process サーバーが Hub サーバーと同じアプリケーションサーバーインスタンスにデプロイされていない場合は、アプリケーションサーバーのデータソースを設定します。

1. JDBC ドライバをインストールします。
2. MDM Hub マスタデータベースのデータソースを作成します。
3. オペレーショナル参照ストアのデータソースを作成します。

### 手順 1. JDBC ドライバのインストール

MDM Hub マスタデータベースとオペレーショナル参照ストア（ORS）のデータソースを作成する前に、JDBC ドライバをインストールします。

サポートされているバージョンの JDBC ドライバの取得方法については、Oracle にお問い合わせください。

1. JDBC ドライバを次のディレクトリにコピーします。  
    <WebLogic installation directory: WebLogic のインストールディレクトリ>/wlserver/server/lib
2. 次のファイルの `__CLASSPATH` 変数に、JDBC ドライバへのパスを追加します。  
    UNIX の場合:<WebLogic domain: WebLogic ドメイン>/bin/setDomainEnv.sh  
    Windows の場合:<WebLogic domain: WebLogic ドメイン>\bin\setDomainEnv.cmd  
    **注:** 他の WebLogic Server ライブラリへのパスの前に、JDBC ドライバへのパスを配置します。

### 手順 2. MDM Hub マスタデータベースのデータソースの作成

JDBC ドライバをインストールした後で、MDM Hub マスタデータベース用のデータソースを作成します。

1. WebLogic 管理コンソールで、**[ロックして編集]** ボタンをクリックしてロックを取得します。
2. **[サービス]** > **[JDBC]** > **[データソース]** をクリックし、**[新規作成]** をクリックします。  
    **[JDBC データソースのプロパティ]** ページが表示されます。
3. 以下のデータソースのプロパティを指定してください。

プロパティ	説明
名前	JDBC データソースの名前。「MDM Master Data Source」という名前を付けます。
JNDI 名	JDBC データソースが関連付けられる場所への JNDI パス。jdbc/siperian-cmx_system-ds と指定します。
データベースタイプ	接続先にするデータベースのタイプ。 <b>[Oracle]</b> を選択します。
データベースドライバ	データベースへの接続に使用する JDBC ドライバ。 <b>[Oracle ドライバ (Thin XA)]</b> を選択します。

4. **[次へ]** をクリックし、**[次へ]** をもう一度クリックします。  
    **[接続プロパティ]** ページが表示されます。



5. 次の接続プロパティの値を入力します。

プロパティ	説明
データベース名	接続するデータベースの名前。
ホスト名	データベースをホストするサーバーの DNS 名または IP アドレス。
ポート	データベースサーバーが接続リクエストをリスンするポート。
データベースユーザー名	データソース内の各接続に使用するデータベースユーザー名。
パスワード	データベースユーザーアカウントのパスワード。
パスワードの確認	データベースユーザーアカウントのパスワード。

6. **【次へ】** をクリックします。  
**【データベース接続のテスト】** ページが表示されます。
7. **【設定のテスト】** をクリックして、ドライバ接続をテストします。  
テストに失敗した場合は、**【接続プロパティ】** ページ内の値を更新し、成功するまで接続を繰り返し試行する必要があります。
8. **【次へ】** をクリックし、データソースをデプロイするサーバーを選択します。
9. **【完了】** をクリックし、**【変更のアクティブ化】** をクリックします。

### 手順 3. オペレーショナル参照ストアのデータソースの作成

各オペレーショナル参照ストアのデータソースを作成します。

- WebLogic 管理コンソールで、**【ロックして編集】** ボタンをクリックしてロックを取得します。
- 【サービス】 > 【JDBC】 > 【データソース】** をクリックし、**【新規作成】** をクリックします。  
**【JDBC データソースのプロパティ】** ページが表示されます。
- 以下のデータソースのプロパティを指定してください。

プロパティ	説明
名前	JDBC データソースの名前。「MDM ORS Data Source」という名前を付けます。
JNDI 名	JDBC データソースが関連付けられる場所への JNDI パス。「jdbc/siperian- <oracle host name>-<oracle sid>-<Operational reference Store name>-ds」と指定 します。
データベースタイプ	接続先にするデータベースのタイプ。 <b>【Oracle】</b> を選択します。
データベースドライバ	データベースへの接続に使用する JDBC ドライバ。 <b>【Oracle ドライバ (Thin XA)】</b> を選択します。

4. **【次へ】** をクリックし、**【次へ】** をもう一度クリックします。  
**【接続プロパティ】** ページが表示されます。

5. 次の接続プロパティの値を入力します。

プロパティ	説明
データベース名	接続するデータベースの名前。
ホスト名	データベースをホストするサーバーの DNS 名または IP アドレス。
ポート	データベースサーバーが接続リクエストをリスンするポート。
データベースユーザー名	データソース内の各接続に使用するデータベースユーザー名。
パスワード	データベースユーザーアカウントのパスワード。
パスワードの確認	データベースユーザーアカウントのパスワード。

6. **【次へ】** をクリックします。

**【データベース接続のテスト】** ページが表示されます。

7. **【設定のテスト】** をクリックして、ドライバ接続をテストします。

テストに失敗した場合は、**【接続プロパティ】** ページ内の値を更新し、成功するまで接続を繰り返し試行する必要があります。

8. **【次へ】** をクリックし、データソースをデプロイするサーバーを選択します。

9. **【完了】** をクリックし、**【変更のアクティブ化】** をクリックします。

## 手順 2。プロセスサーバーアプリケーションのデプロイ（条件付き）

インストールがアプリケーションサーバーのマルチノード環境またはクラスタ環境内にある場合、あるいは postInstallSetup スクリプトがスキップされたか失敗した場合は、プロセスサーバーアプリケーションをデプロイします。

プロセスサーバーアプリケーションを、プロセスサーバーをインストールしたのと同じマシンにデプロイします。プロセスサーバーアプリケーションは、それに関連付けられているプロセスサーバーのインストールを見つけることができる必要があります。そのため、アプリケーション EAR ファイルを別のマシンへのデプロイメントのためにコピーしないでください。例えば、プロセスサーバーをテストマシンにインストールし、アプリケーションを本番マシンにデプロイしたとします。本番マシンにデプロイされたアプリケーションは、テストマシン上のインストールを見つけることができません。

次のいずれかの手順を使用して、プロセスサーバーアプリケーションをデプロイします。

### デプロイメント用スクリプトの使用

postInstallSetup スクリプトを実行して、プロセスサーバーアプリケーションをデプロイします。

### 手動デプロイ

プロセスサーバーアプリケーションを手動でデプロイします。

## プロセスサーバーアプリケーションのデプロイでのスクリプトの使用（条件付き）

PostInstallSetup スクリプトを実行して、プロセスサーバーアプリケーションをデプロイできます。WebLogic 管理サーバーで PostInstallSetup スクリプトを実行する必要があります。

**重要:** インストールがアプリケーションサーバーのマルチノード環境またはクラスタ環境にある場合は、まず 1 つのノードにプロセスサーバーアプリケーションをデプロイし、次に他方のノードにプロセスサーバーアプリケーションをデプロイします。プロセスサーバーアプリケーションは、必ずプロセスサーバーをインストールしたのと同じマシンにデプロイしてください。

1. WebLogic を起動します。管理対象サーバーがある環境にインストールした場合は、WebLogic 管理サーバーとすべての管理対象サーバーを起動します。
2. 管理対象サーバーがあり、管理サーバーと管理対象サーバーはそれぞれ異なるマシン上にある環境を使用している場合は、siperian-mrm-cleanse.ear デプロイメントファイルを、管理サーバーのプロセスサーバーインストールディレクトリにコピーします。

デプロイメントファイルは、次のディレクトリにあります。<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/cleanse

3. コマンドプロンプトを開き、次のディレクトリに移動します。

<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/cleanse

4. PostInstallSetup スクリプトを実行します。

UNIX の場合: ./postInstallSetup.sh -Dweblogic.password=<Weblogic のパスワード> -Ddatabase.password=<データベースのパスワード>

Windows の場合: postInstallSetup.bat -Dweblogic.password=<Weblogic のパスワード> -Ddatabase.password=<データベースのパスワード>

詳細については、WebLogic のマニュアルを参照してください。

## プロセスサーバーアプリケーションの手動でのデプロイ（条件付き）

WebLogic アプリケーションサーバーに Process サーバーを手動でデプロイできます。プロセスサーバーアプリケーションは、プロセスサーバーのインストールディレクトリからデプロイする必要があります。

1. 既存のデプロイメントがある場合は、WebLogic Server 管理コンソールを使用して、siperian-mrm-cleanse.ear をデプロイ解除します。
2. WebLogic Server 管理コンソールを使用して、siperian-mrm-cleanse.ear をデプロイします。

EAR ファイルは、Process サーバーインストールディレクトリからデプロイする必要があります。

アプリケーションのデプロイの詳細については、WebLogic のマニュアルを参照してください。

## 手順 3. 管理対象サーバーがある環境でのデプロイメントのターゲットの指定（条件付き）

管理対象サーバーがある環境にデプロイする場合、WebLogic Server 管理コンソールでデプロイメントのターゲットを指定します。

1. WebLogic Server 管理コンソールを起動します。
2. siperian-mrm-cleanse.ear デプロイメントのターゲットとしてすべての管理対象サーバーを指定します。

3. プロセスサーバーと Hub サーバーインスタンスが異なる管理対象サーバーにある場合、以下のデータソースのターゲットとしてプロセスサーバーインスタンスのすべての管理対象サーバーを指定します。
  - MDM Hub マスタデータベースのデータソース
  - オペレーショナルリファレンスストアのデータソース
4. すべての管理対象サーバーが、起動クラスおよびシャットダウンクラスのためのターゲットであることを確認します。

詳細については、WebLogic のマニュアルを参照してください。

## プロセスサーバーでのスマート検索の設定

プロセスサーバーでスマート検索を有効にして、プロセスサーバーを ZooKeeper サーバーとして設定できます。スマート検索を使用して、検索可能なビジネスエンティティタイプの範囲内でデータを検索できます。

スマート検索の設定の詳細については、『*Informatica MDM Multidomain Edition Configuration Guide*』を参照してください。

## 一致ポピュレーションの設定

一致ポピュレーションには、マッチプロセスに使用する標準ポピュレーションセットが含まれます。サポートされている国、言語、またはポピュレーションごとに標準ポピュレーションセットがあります。マッチルールに使用する一致ポピュレーションを有効にする必要があります。

一致ポピュレーションは、Informatica MDM Hub のインストールの *population.ysp* ファイルとして用意されています。ポピュレーション名は ysp ファイル名と同じです。Japanese ポピュレーションを追加する際に、Person\_Name\_Kanji 一致フィールドを使用する場合は、\_Kanji をポピュレーション名に追加します。例えば、Japan\_Kanji または Japan\_i\_Kanji になります。この場合、標準の Person\_Name 一致フィールドは使用できません。

使用するポピュレーションには、SSA-Name3 バージョンの MDM Hub との互換性が必要です。追加のポピュレーションファイルが必要な場合、または更新されたポピュレーションファイルを新しいバージョンにアップグレードする必要がある場合は、Informatica グローバルカスタマサポートにお問い合わせください。この製品で要求する最初のポピュレーションファイルは無料です。他の国用のポピュレーションファイルが必要な場合や、MDM Hub の最新バージョンにアップグレードするために更新されたポピュレーションファイルが必要な場合があります。

## 一致ポピュレーションの有効化

一致ルールに使用する一致ポピュレーションを有効にする必要があります。

1. *<population>.ysp* ファイルを以下の場所にコピーします。
  - UNIX の場合:<infamdm\_install\_directory>/hub/cleanse/resources/match
  - Windows の場合:<infamdm\_install\_directory>\hub\cleanse\resources\match
2. C\_REPOS\_SSA\_POPULATION メタデータテーブルで、ポピュレーションが登録されていることを確認します。

MDM Hub インストールのシードデータベースには、C\_REPOS\_SSA\_POPULATION テーブルに登録されたいくつかのポピュレーションがありますが、有効にはなっていません。

3. C\_REPOS\_SSA\_POPULATION テーブルにポピュレーションが含まれていない場合、それをテーブルに追加して有効にします。

ポピュレーション名は ysp ファイル名と同じです。例えば、ysp ファイル名が US.ysp の場合、ポピュレーション名は US です。

ポピュレーションをオペレーショナルリファレンスストアに追加するには、以下の手順を実行します。

- a. ポピュレーションを追加するオペレーショナルリファレンスストアスキーマに接続します。
- b. SQL\*Plus で、以下のディレクトリにある add\_std\_ssa\_population.sql スクリプトを実行します。

UNIX の場合:<infadm\_install\_directory>/server/resources/database/custom\_scripts/oracle

Windows の場合:<infadm\_install\_directory>\server\resources\database\custom\_scripts\oracle

- c. 以下の表に説明する内容に従ってプロンプトに回答します。

プロンプト	説明
追加するポピュレーションを入力します	ポピュレーションの名前。
ROWID_SSA_POP の値を入力します (例: INFA.0001)。デフォルトは [INFA.0001]	C_REPOS_SSA_POPULATION メタデータテーブルの ROWID_SSA_POP カラムの一意の値。デフォルトは INFA.0001 です。

ポピュレーションは C\_REPOS\_SSA\_POPULATION テーブルに登録されています。

- d. 次のコマンドを実行して、ポピュレーションを有効にします。

```
UPDATE c_repos_ssa_population SET enabled_ind = 1 WHERE population_name = '<Your Population>';  
COMMIT;
```

4. ポピュレーションが有効化されたら、Process サーバーを再起動します。
5. Hub コンソールにログインし、ポピュレーションが有効になっていることを確認します。  
ポピュレーションは、ベースオブジェクトの【一致/マージ設定】ユーザーインターフェースに表示されます。

## プロセスサーバーとクレンジングエンジンの設定

Process サーバーをインストールすると、Process サーバーを使用してクレンジングエンジンを設定できます。

クレンジングエンジンの設定の詳細については、『*Informatica MDM マルチドメインエディションクレンジングアダプタガイド*』を参照してください。

## 第 9 章

# アプリケーションサーバーに対する ActiveVOS のインストール後のタスク

この章では、以下の項目について説明します。

- [WebLogic 環境での信頼されたユーザーの作成, 86 ページ](#)
- [安全な ActiveVOS 通信のための WebLogic の設定, 87 ページ](#)
- [デフォルトのセキュリティレルムの編集, 87 ページ](#)
- [ActiveVOS ロールの追加, 87 ページ](#)
- [WebLogic でのユーザーおよびグループの設定, 88 ページ](#)

## WebLogic 環境での信頼されたユーザーの作成

ActiveVOS ワークフローエンジンを使用するには、アプリケーションサーバーで abTrust、abServiceConsumer、および abTaskClient のロールを持つ信頼されたユーザーを作成します。

この信頼されたユーザーは、Hub コンソールの ActiveVOS ワークフローアダプタユーザーと同じユーザーです。信頼されたユーザーの名前は、アプリケーションサーバーの管理者ユーザーと同じ名前にすることはできません。

1. WebLogic コンソールで、次のロールを作成します。
  - abTrust
  - abServiceConsumer
  - abTaskClient
2. WebLogic コンソールで、信頼されたユーザーを作成し、そのユーザーを abTrust、abServiceConsumer、および abTaskClient の各ロールに割り当てます。
3. アプリケーションサーバーを再起動します。

# 安全な ActiveVOS 通信のための WebLogic の設定

ActiveVOS と MDM Hub 間の通信にセキュアな HTTP (HTTPS) プロトコルを使用するには、アプリケーションサーバーを設定する必要があります。

1. WebLogic コンソールで、アプリケーションサーバーの SSL リスポートを有効にします。
2. コマンドプロンプトを開きます。
3. 次のディレクトリに移動します。  
 <MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\hub\server
4. 次のコマンドを実行します。  
 UNIX の場合:  
 `postinstallSetup.sh -Ddatabase.password=<MDM Hub Master Database password: MDM Hub マスターデータベースのパスワード> -Dweblogic.password=<WebLogic password: WebLogic パスワード>`  
 Windows の場合:  
 `postinstallSetup.bat -Ddatabase.password=<MDM Hub Master Database password: MDM Hub マスターデータベースのパスワード> -Dweblogic.password=<WebLogic password: WebLogic パスワード>`
5. アプリケーションサーバーを再起動します。

## デフォルトのセキュリティレルムの編集

WebLogic では、セキュリティレルムはユーザーの資格情報とロールを管理するためのコンテナです。

1. WebLogic Server 管理コンソールで、MDM10 ドメイン内で **【セキュリティレルム】** をクリックします。
2. デフォルトのレルム **【myRealm】** をクリックします。
3. **【プロバイダ】** タブをクリックして、**【認証】** タブをクリックします。
4. **【認証】** タブで、**【DefaultAuthenticator】** をクリックします。
5. **【構成】** タブをクリックして、**【Common】** タブをクリックします。
6. 制御フラグリストから **【OPTIONAL】** を選択します。
7. **【保存】** をクリックします。
8. WebLogic インスタンスを再起動します。

## ActiveVOS ロールの追加

セキュリティレルムに ActiveVOS ロールを追加します。

1. WebLogic Server 管理コンソールで、MDM10 ドメイン内で **【セキュリティレルム】** をクリックします。
2. セキュリティレルムを選択します。
3. **【ロールとポリシー】** タブをクリックし、次に **【レルムロール】** タブをクリックします。
4. **【レルムロール】** タブで、**【グローバルロール】** を展開し、**【ロール】** をクリックします。
5. **【新規】** をクリックします。
6. **【名前】** フィールドに ActiveVOS ロール abAdmin を入力し、**【OK】** をクリックします。

7. **【新規】** をクリックします。
8. **【名前】** フィールドに ActiveVOS ロール abTaskClient を入力し、**【OK】** をクリックします。
9. **【新規】** をクリックします。
10. **【名前】** フィールドに ActiveVOS ロール abServiceConsumer を入力し、**【OK】** をクリックします。
11. **【新規】** をクリックします。
12. **【名前】** フィールドに ActiveVOS ロール abTrust を入力し、**【OK】** をクリックします。

## WebLogic でのユーザーおよびグループの設定

推奨の BE ActiveVOS ワークフローエンジンを使用している場合は、このセクションを省略できます。BE ActiveVOS ワークフローエンジンは、ActiveVOS 用の MDM Identity Services を使用します。

他のワークフローエンジンを使用する場合は、MDM ユーザーロールと一致するユーザーとグループを WebLogic で作成します。

### グループの作成

MDM Hub 管理者用のグループと MDM Hub ユーザー用の別のグループを作成します。

1. WebLogic Server 管理コンソールで、MDM10 ドメイン内で **【セキュリティ レルム】** をクリックします。
2. 作成したレルムを選択します。
3. **【ユーザーとグループ】** タブをクリックします。
4. **【グループ】** をクリックします。
5. **【新規】** をクリックします。
6. **【名前】** フィールドに MDMAVadmins を入力し、**【OK】** をクリックします。
7. **【新規】** をクリックします。
8. **【名前】** フィールドに MDMAVusers を入力し、**【OK】** をクリックします。

### ユーザーの追加

ActiveVOS サーバーで認証する MDM Hub 管理者とユーザーを追加します。

1. MDM Hub 管理者およびユーザーと一致しているユーザークレデンシャルを持つユーザーを追加します。
  - a. **【ユーザーとグループ】** タブで **【ユーザー】** をクリックします。
  - b. **【新規】** をクリックします。
  - c. **【名前】** フィールドに MDM Hub 管理者またはユーザーのユーザー名を入力します。
  - d. **【パスワード】** フィールドにこのユーザー名のパスワードを入力し、もう一度入力します。
  - e. **【OK】** をクリックします。
  - f. 上記の手順を繰り返し、ActiveVOS サーバーで認証するすべての MDM Hub 管理者とユーザーを追加します。
2. MDMAVadmins グループに管理者を割り当てます。
  - a. **【ユーザーとグループ】** タブで、MDM Hub 管理者をクリックします。



- b. **【グループ】** をクリックします。
  - c. **【使用可能】** リストで **【MDMAVadmins】** グループをクリックし、**【選択済み】** に移動します。
  - d. **【保存】** をクリックします。
  - e. 上記の手順を繰り返し、残りの MDM Hub 管理者を追加します。
3. ユーザーを MDMAVusers グループに割り当てます。

## abTaskClient ロールの編集

abTaskClient ロールを編集し、MDMAVusers グループ内のユーザーに ActiveVOS サーバーでの認証を許可するセキュリティポリシーを追加します。

1. **【ロールとポリシー】** タブをクリックし、次に **【レルム ロール】** タブをクリックします。
2. **【レルム ロール】** タブで **【グローバル ロール】** > **【ロール】** を展開します。
3. **【abTaskClient】** 行で、**【ロール条件の表示】** をクリックします。
4. **【Add Conditions】** をクリックします。
5. **【Predicate】** リストから **【Group】** を選択します。
6. **【次へ】** をクリックします。
7. **【Group Argument Name】** フィールドに MDMAVusers を入力し、**【追加】** をクリックします。
8. **【完了】** をクリックします。
9. **【保存】** をクリックします。

## 第 10 章

# ビジネスエンティティアダプタに対する ActiveVOS のインストール後のタスク

この章では、以下の項目について説明します。

- [ActiveVOS Web アプリケーション, 90 ページ](#)
- [ビジネスエンティティワークフローアダプタの ActiveVOS URN の設定, 91 ページ](#)
- [ActiveVOS プロトコルの HTTPS への設定, 91 ページ](#)
- [プライマリワークフローエンジンの設定, 92 ページ](#)
- [ActiveVOS 用の MDM Identity Service の設定, 92 ページ](#)
- [タスクの設定, 93 ページ](#)

## ActiveVOS Web アプリケーション

バンドルとしてライセンス供与された ActiveVOS サーバーのバージョンをインストールする場合には、2 つの ActiveVOS Web アプリケーションを使用できるライセンスも供与されています。それらのアプリケーションを使用するには、アプリケーションサーバーのコンテナにユーザーを追加します。

以下の Web アプリケーションがあり、これらはいくつかの目的に使用できます。

### ActiveVOS コンソール

管理者は、ActiveVOS コンソールを使用して、デプロイされたプロセス、警告システム、およびエンドポイントの場所を管理します。また、パフォーマンスの監視および管理を行うようにエンジンを設定することもできます。

### ActiveVOS Central

ビジネスユーザーは、ActiveVOS Central を使用して、タスク、要求、およびレポートを管理できます。ただし、通常、タスクの管理には Informatica Data Director (IDD) アプリケーションが使用されます。これは、確認対象のエンティティをタスクマネージャから開くことができるからです。

ActiveVOS Central を使用するには、MDM Hub ユーザーをアプリケーションサーバー コンテナに追加する必要があります。

これらの Web アプリケーションの詳細については、Informatica ActiveVOS のマニュアルを参照してください。

# ビジネスエンティティワークフローアダプタの ActiveVOS URN の設定

ActiveVOS サーバーには、内部的に使用する 2 つの定義済みの Uniform Resource Name (URN) があります。URN マッピングの URL は、ActiveVOS サーバーが動作しているホスト名とポート番号に変更する必要があります。

1. ActiveVOS コンソールを起動します。ブラウザで、正しいホスト名とポート番号に置き換えて、以下の URL を入力します。  
暗号化接続: `https://[host]:[port]/activevos`  
非暗号化接続: `http://[host]:[port]/activevos`
2. ActiveVOS コンソールのホームページで、**[Administration] > [Configure Server] > [URN Mappings]** をクリックします。
3. 以下の URN について、ActiveVOS サーバーのホスト名とポート番号を反映するようにパスを更新します。

URN	URL パス
ae:internal-reporting	暗号化接続: <code>https://[host]:[port]/activevos/internalreports</code> 非暗号化接続: <code>http://[host]:[port]/activevos/internalreports</code>
ae:task-inbox	暗号化接続: <code>https://[host]:[port]/activevos-central/avc</code> 非暗号化接続: <code>http://[host]:[port]/activevos-central/avc</code>

4. **urn:mdm:service** が MDM Hub サーバーのホスト名とポート番号にマッピングされていることを確認します。  
暗号化接続: `https://[host]:[port]/cmx/services/BeServices`  
非暗号化接続: `http://[host]:[port]/cmx/services/BeServices`

## ActiveVOS プロトコルの HTTPS への設定

ActiveVOS と MDM Hub の間の安全な通信を有効にするには、Hub コンソールの Workflow Manager で HTTPS にプロトコルを設定します。

最初に、HTTPS 通信用のアプリケーションサーバーを設定する必要があります。

1. Hub コンソールを起動します。
2. 書き込みロックを取得します。
3. 設定ワークベンチの **[Workflow Manager]** をクリックします。
4. Workflow Manager で **[ワークフローエンジン]** タブをクリックします。
5. ActiveVOS ワークフローエンジンを選択し、**[編集]** ボタンをクリックします。
6. **[ワークフローの編集]** ダイアログボックスで、プロトコルを HTTPS に設定します。
7. WebLogic 環境では、**[ワークフローの編集]** ダイアログボックスで、abAdmin ロールに属するユーザーのユーザー名およびパスワードを入力します。

# プライマリワークフローエンジンの設定

プライマリワークフローエンジンを設定するには、ビジネスエンティティに基づく ActiveVOS ワークフローのワークフローエンジンを追加します。セカンダリワークフローエンジンは、廃止されたワークフローエンジンを使用して既存タスクを処理する既存顧客のためにあります。

1. Hub コンソールの設定ワークベンチで **[Workflow Manager]** をクリックします。
2. 書き込みロックを取得します。
3. **[ワークフローエンジン]** タブを選択し、**[追加]** ボタンをクリックします。
4. **[ワークフローの追加]** ダイアログボックスで、ワークフローエンジンのプロパティを入力します。

以下の表に、ワークフローエンジンのプロパティを示します。

フィールド	説明
ワークフローエンジン	ワークフローエンジンの表示名
アダプタ名	ビジネスエンティティに基づいて ActiveVOS ワークフローアダプタに <b>[BE ActiveVOS]</b> を選択します。
ホスト	Informatica ActiveVOS インスタンスのホスト名。
ポート	Informatica ActiveVOS インスタンスのポート名。
ユーザー名	信頼されたユーザーのユーザー名。
パスワード	信頼されたユーザーのパスワード。
プロトコル	MDM Hub と ActiveVOS 間の通信プロトコル。プロトコルには http または https が使用できます。

5. **[OK]** をクリックします。

## ActiveVOS 用の MDM Identity Service の設定

埋め込み ActiveVOS を使用している場合は、MDM Identity Service を使用するように ActiveVOS を設定してください。ActiveVOS 用の MDM Identity Service を設定するには、ActiveVOS コンソールを使用して、MDM Hub ワークフローエンジンユーザーのパスワードを Identity Service のパスワードに設定します。

1. ActiveVOS コンソールで、**[管理]** > **[サービスの設定]** > **[Identity Service]** を選択します。
2. **[プロバイダ設定]** セクションで、**[有効]** チェックボックスを有効にして、**[プロバイダタイプ]** から **[MDM]** を選択します。
3. **[接続]** タブで、ユーザー名を admin として MDM Hub ユーザーのパスワードを入力します。

**注:** 後で管理者ユーザーのパスワードを変更する場合、ActiveVOS ID サービス設定で新しいパスワードを入力する必要があります。

4. **[更新]** をクリックします。

5. ActiveVOS が admin ユーザーとして MDM Hub にログインできるかどうか、**【テストのユーザー】**として指定したユーザーのロールのリストを ActiveVOS が取得できるかどうかをテストします。
  - a. **【テスト】** タブを選択します。
  - b. **【テストのユーザー】** フィールドに、ロールに割り当てられた MDM Hub ユーザーを入力します。
  - c. **【テスト設定】** をクリックします。

**注:** オペレーショナル参照ストアが設定されておらず、テストのユーザーがロールに属していない場合、テストは失敗します。

## タスクの設定

Informatica Data Director でタスクワークフローの使用を開始する前に、プロビジョニングツールでタスクテンプレート、タスクトリガ、およびタスクタイプを設定します。

詳細については、『*Informatica MDM Multidomain Edition プロビジョニングツールガイド*』を参照してください。

## 第 11 章

# リソースキットのインストール

この章では、以下の項目について説明します。

- [MDM Hub サンプルオペレーショナル参照ストアの設定, 94 ページ](#)
- [Informatica MDM Hub サンプルオペレーショナルリファレンスストアの登録, 97 ページ](#)
- [グラフィカルモードでのリソースキットのインストール, 99 ページ](#)
- [コンソールモードでのリソースキットのインストール, 102 ページ](#)
- [サイレントモードでのリソースキットのインストール, 104 ページ](#)

## MDM Hub サンプルオペレーショナル参照ストアの設定

MDM Hub サンプルオペレーショナルリファレンスストアを使用するには、それを設定しておく必要があります。MDM Hub サンプルオペレーショナル参照ストアの設定は、リソースキットをインストールする前に行います。MDM Hub サンプルオペレーショナル参照ストアを設定するには、オペレーショナル参照ストアを作成し、それに `mdm_sample` をインポートします。

1. 分散ディレクトリの以下の場所に移動します。

UNIX の場合:<distribution directory>/database/bin

Windows の場合:<配布ディレクトリ>\database\bin

2. 次のコマンドを実行します。

UNIX の場合:./sip\_ant.sh create\_ors

Windows の場合:sip\_ant.bat create\_ors

3. 表示されるプロンプトに回答します。

**注:** プロンプトでは、デフォルトのテキストが括弧内に表示されます。デフォルト値を使用して次のプロンプトに進むには、**Enter** キーを押します。

**データベースタイプの入力 (ORACLE、MSSQL、DB2)**

データベースタイプ。ORACLE を指定します。

Oracle **接続タイプ (SERVICE、SID) を入力。** [SERVICE]

接続タイプ。以下の値を使用する。

- SERVICE。Oracle に接続するサービス名を使用する。

- SID。Oracle に接続する Oracle システム ID を使用する。

デフォルトは SERVICE。

**オペレーショナル参照ストアのデータベースホスト名を入力します。[localhost]**

データベースをホストするマシンの名前。デフォルトは localhost です。

**オペレーショナル参照ストアデータベースのポート番号を入力します。[1521]**

データベースリスナーが使用するポート番号。デフォルトは 1521 です。

**オペレーショナル参照ストアのデータベースサービス名を入力します。[orcl]**

Oracle サービスの名前。このプロンプトは、選択した Oracle 接続タイプが SERVICE の場合に表示される。

**オペレーショナル参照ストアデータベースの SID を入力します。[orcl]**

Oracle システム ID の名前。このプロンプトは、選択した Oracle 接続タイプが SID の場合に表示される。

**Oracle Net の接続 ID (TNS 名) を入力。[orcl]**

Oracle TNS 名。デフォルトは orcl。

**接続 URL。[jdbc:oracle:thin:@//<ホスト名>:<ポート>/<service\_name または SID>]**

データベース接続の接続 URL。

**オペレーショナル参照ストアのデータベースユーザー名を入力します。[cmx\_ors]**

MDM Hub サンプルオペレーショナルリファレンスストアデータベースのユーザー名。デフォルトは cmx\_ors。

**オペレーショナル参照ストアのデータベースのユーザーパスワードを入力します。**

MDM Hub サンプルオペレーショナルリファレンスストアユーザーのパスワード。

**リストからロケール名を入力します (de、en\_US、fr、ja、ko、zh\_CN) [en\_US]**

オペレーティングシステムのロケール。デフォルトは en\_US です。

**DBA ユーザー名を入力。[SYS]**

管理者ユーザーの名前。デフォルトは SYS です。

**DBA のパスワードを入力します。**

管理者ユーザーのパスワード。

**MDM インデックステーブルスペース名の入力。[CMX\_INDX]**

オペレーショナル参照ストア用のインデックスコンポーネントが含まれているテーブルスペースの名前。デフォルトは CMX\_INDX。

**MDM 一時テーブルスペース名の入力。[CMX\_TEMP]**

オペレーショナル参照ストア用の一時コンポーネントが含まれているテーブルスペースの名前。デフォルトは CMX\_TEMP。

**Oracle 一時テーブルスペース名の入力。[TEMP]**

Oracle 一時テーブルスペースの名前。デフォルトは TEMP。

4. オペレーショナル参照ストアを作成したら、次のディレクトリの sip\_ant.log を確認します。

UNIX の場合:<distribution directory>/database/bin

Windows の場合:<配布ディレクトリ>\database\bin

sip\_ant.log ファイルには、オペレーショナル参照ストアを作成するために sip\_ant スクリプトを実行するときに発生するすべてのエラーが記録されます。

5. mdm\_sample をインポートするには、次のコマンドを実行します。

UNIX の場合:./sip\_ant.sh import\_schema

Windows の場合:sip\_ant.bat import\_schema

6. 表示されるプロンプトに回答します。

**注:** プロンプトでは、デフォルトのテキストが括弧内に表示されます。デフォルト値を使用して次のプロンプトに進むには、**Enter** キーを押します。

**データベースタイプの入力 (ORACLE、MSSQL、DB2)**

データベースタイプ。ORACLE を指定します。

**Oracle 接続タイプ (SERVICE、SID) を入力。[SERVICE]**

接続タイプ。以下の値を使用する。

- SERVICE。Oracle に接続するサービス名を使用する。
- SID。Oracle に接続する Oracle システム ID を使用する。

デフォルトは SERVICE。

**オペレーショナル参照ストアのデータベースホスト名を入力します。[localhost]**

データベースをホストするマシンの名前。デフォルトは localhost です。

**オペレーショナル参照ストアデータベースのポート番号を入力します。[1521]**

データベースリスナーが使用するポート番号。Default is 1521.

**オペレーショナル参照ストアのデータベースサービス名を入力します。 [orcl]**

Oracle サービスの名前。このプロンプトは、選択した Oracle 接続タイプが SERVICE の場合に表示される。

**オペレーショナル参照ストアデータベースの SID を入力します。 [orcl]**

Oracle システム ID の名前。このプロンプトは、選択した Oracle 接続タイプが SID の場合に表示される。

**Oracle Net の接続 ID (TNS 名) を入力。[orcl]**

Oracle TNS 名。デフォルトは orcl。

**接続 URL。[jdbc:oracle:thin:@//<ホスト名>:<ポート>/<service\_name または SID>]**

データベース接続の接続 URL。

**オペレーショナル参照ストアのデータベースユーザー名を入力します。[cmx\_ors]**

MDM Hub サンプルオペレーショナルリファレンスストアデータベースの名前。デフォルトは cmx\_ors。

**オペレーショナル参照ストアのデータベースのユーザーパスワードを入力します。**

MDM Hub サンプルオペレーショナルリファレンスストアデータベースユーザーの名前。

**リストからロケール名を入力します (de、en\_US、fr、ja、ko、zh\_CN) [en\_US]**

オペレーティングシステムのロケール。デフォルトは en\_US です。

**ZIP 形式のダンプファイルのパスを入力します。 [<配布ディレクトリ>\resources\database]**

mdm\_sample.zip ファイルのパス。

**ZIP 形式のダンプファイルの名前を入力します。 [mdm\_sample.zip]**

ZIP 形式のダンプファイルの名前。デフォルトは mdm\_sample.zip です。



# Informatica MDM Hub サンプルオペレーショナルリファレンスストアの登録

MDM Hub サンプルオペレーショナルリファレンスストアは設定後に登録する必要があります。MDM Hub サンプルオペレーショナルリファレンスストアを登録するには、Hub コンソールを使用します。

1. Hub コンソールを開始します。  
[データベースの変更] ダイアログボックスが表示されます。
2. MDM Hub マスターデータベースを選択して、[接続] をクリックします。
3. 設定ワークベンチにあるデータベースツールを起動します。
4. [書き込みロック] > [ロックの取得] の順にクリックします。
5. [データベースの登録] ボタンをクリックします。

Informatica MDM Hub 接続ウィザードが表示され、データベースタイプの選択が求められます。

6. データベースのタイプを選択して [次へ] をクリックします。
7. データベースの接続プロパティを設定します。
  - a. Oracle の接続方式を選択して、[次へ] をクリックします。  
次の表に、選択できる Oracle の接続方式を示します。

接続方式	説明
サービス	サービス名を使用して Oracle に接続します。
SID	Oracle のシステム ID を使用して Oracle に接続します。

[接続プロパティ] ページが表示されます。

- b. 選択する接続タイプの接続プロパティを指定し、[次へ] をクリックします。  
以下の表に、接続プロパティの種類と説明を示します。

プロパティ	説明
データベース表示名	Hub コンソールに表示する必要があるオペレーショナルリファレンスストアの名前。
マシン識別子	Hub ストアインスタンスからのレコードを一意に識別するためにキーに付けられるプレフィックス。
データベースホスト名	Oracle データベースをホストするサーバーの IP アドレスまたは名前。
SID	サーバー上で実行される Oracle データベースのインスタンスを参照する Oracle システム識別子。 [SID] フィールドは、[SID] 接続タイプを選択した場合に表示される。

プロパティ	説明
サービス	Oracle データベースへの接続に使用する Oracle サービスの名前。 <b>【サービス】</b> フィールドは、 <b>【サービス】</b> 接続タイプを選択した場合に表示される。
ポート	Oracle データベースサーバー上で実行される Oracle リスナの TCP ポート。デフォルトは 1521。
Oracle TNS 名	ネットワーク上で認識されているデータベースの名前（アプリケーションサーバーの TNSNAMES.ORA ファイルで定義）。 例: mydatabase.mycompany.com Oracle TNS 名は、Oracle データベースのインストール時に設定します。Oracle TNS 名の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。
スキーマ名	オペレーショナルリファレンスストアの名前。mdm_sample を指定します。
パスワード	オペレーショナルリファレンスストアのユーザー名に関連付けられているパスワード。 Oracle の場合、パスワードでは大文字と小文字の区別がない。 デフォルトでは、これがオペレーショナルリファレンスストアを作成するときに指定するパスワードです。

**【サマリ】** ページが表示されます。

- c. サマリを確認し、追加の接続プロパティを指定します。  
以下の表に、設定可能な追加の接続プロパティを示します。

プロパティ	説明
接続 URL	接続 URL。接続ウィザードでは、デフォルトで接続 URL が生成されます。次のリストに、Oracle 接続タイプの接続 URL のフォーマットを示します。 <b>サービス接続タイプ</b> jdbc:oracle:thin:@//database_host:port/service_name <b>SID 接続タイプ</b> jdbc:oracle:thin:@//database_host:port/sid [サービス] 接続タイプの場合、カスタマイズし、後で別の接続 URL をテストするオプションがあります。
登録後データソースを作成する	登録後にアプリケーションサーバーのデータソースを作成する場合は選択します。 <b>注:</b> このオプションを選択しない場合、手動でデータソースを設定する必要があります。

- d. サービス接続タイプでは、デフォルトの URL を変更する場合には、**【編集】** ボタンをクリックし、URL を指定して **【OK】** をクリックします。
8. **【完了】** をクリックします。  
**【データベースの登録】** ダイアログボックスが表示されます。
9. **【OK】** をクリックします。  
MDM Hub により、MDM Hub サンプルオペレーショナルリファレンスストアが登録されます。

10. 登録した MDM Hub サンプルオペレーショナルリファレンスストアを選択し、**【データベース接続のテスト】** ボタンをクリックしてデータベース設定をテストします。  
[データベースのテスト] ダイアログに、データベース接続テストの結果が表示されます。
11. **【OK】** をクリックします。  
オペレーショナルリファレンスストアが登録され、データベースとの接続がテストされます。

## グラフィカルモードでのリソースキットのインストール

グラフィカルモードでリソースキットをインストールできます。

リソースキットをインストールする前に、MDM Hub をインストールおよび設定しておく必要があります。

1. アプリケーションサーバーを起動します。
2. コマンド プロンプトを開き、リソースキットインストーラに移動します。デフォルトでは、インストーラは以下のディレクトリにあります。

UNIX の場合:<配布ディレクトリ>/<オペレーティングシステム名>/mrmresourcekit

Windows の場合:<distribution directory>\windows\mrmresourcekit

3. 次のコマンドを実行します。  
UNIX の場合:hub\_resourcekit\_install.bin  
Windows の場合:hub\_resourcekit\_install.exe
4. インストールの言語を選択し、**【OK】** をクリックします。  
**【概要】** ウィンドウが表示されます。
5. **【次へ】** をクリックします。  
**【ライセンスキー】** ウィンドウが表示されます。
6. **【使用許諾契約に同意する】** オプションを選択し、**【次へ】** をクリックします。  
**【機能のインストール】** ウィンドウが表示されます。
7. インストールするリソースキットの機能を選択し、**【次へ】** をクリックします。

次のオプションを選択することができます。

### サンプルスキーマ

MDM Hub サンプルスキーマリソースをインストールします。サンプルアプリケーションをインストールする前に、サンプルスキーマを作成して Hub サーバーに登録する必要があります。

### サンプルとユーティリティ

サンプルアプリケーションとサンプルユーティリティをインストールします。

デプロイされるサンプルアプリケーションのリストは、次のディレクトリの build.properties ファイルに保存されています。

<Resourcekit\_Home>\samples

### SIF SDK および Javadoc

SIF SDK に関連する Javadoc、ライブラリ、およびリソースがインストールされます。

BPM SDK

BPM SDK に関連するリソースがインストールされます。

Jaspersoft

Jaspersoft インストーラがリソースキットのホームにコピーされます。

SSA-NAME3

SSA-NAME3 インストーラがリソースキットのホームにコピーされます。

MDM Hub でサンプルスキーマを作成、登録しておかなければならないというメッセージが表示されます。

8. **[OK]** をクリックします。

**[インストールフォルダの選択]** ウィンドウが表示されます。

9. リソースキットをインストールする場所を選択します。

- デフォルトの場所を選択するには、**[次へ]** をクリックします。
- パスを入力するには、インストールフォルダのパスを入力して **[次へ]** をクリックします。

**注:** ディレクトリまたはフォルダ名にスペースが含まれているパスを指定すると、インストールは失敗します。

- デフォルトのインストール場所に戻す場合は、**[デフォルトフォルダの復元]** をクリックする。
- 別の場所を指定する場合は、**[選択]** をクリックして **[次へ]** をクリックする。

UNIX の場合は、**[リンクフォルダの選択]** ウィンドウが表示されます。

Windows の場合は、**[ショートカットフォルダの選択]** ウィンドウが表示されます。

10. UNIX の場合は、リンクフォルダを選択するか、またはリンクを作成しないオプションを選択して、**[次へ]** をクリックします。Windows の場合は、製品アイコンを作成する場所を選択するか、または製品アイコンを作成しないオプションを選択します。

**[設定の選択]** ウィンドウが表示されます。

11. 設定オプションを選択し、**[次へ]** をクリックします。

以下のいずれかのオプションを選択することができます。

#### **サンプルの設定**

サンプルをインストールして設定します。

#### **ソースのみ**

サンプルのソースをインストールしますが、設定まではしません。

**[サンプルの設定]** を選択した場合は、**[リソースキットのアプリケーションサーバー]** ウィンドウが表示されます。 **[ソースのみ]** を選択した場合は、**[インストール前のサマリ]** ウィンドウが表示されます。

12. **[リソースキットのアプリケーションサーバー]** ウィンドウで、リソースキットをインストールするアプリケーションサーバーを選択し、**[次へ]** をクリックします。

選択したアプリケーションサーバーの **[アプリケーションサーバー: ホーム]** ウィンドウが表示されます。

13. アプリケーションサーバーを設定します。

- a. MDM Hub で使用するドメインとして、WebLogic ドメインのインストールディレクトリのパスを選択し、**[次へ]** をクリックします。

**[WebLogic アプリケーションサーバー: ログイン]** ウィンドウが表示されます。

- b. WebLogic Server のログイン情報を入力します。

次のログインパラメータフィールドに値を入力します。

**ホスト**

WebLogic をインストールしたホストコンピュータの名前。

**サーバー**

WebLogic がデプロイされているドメイン内の WebLogic Server インスタンスの名前。

**ユーザー名**

WebLogic インストールのユーザー名。

**パスワード**

WebLogic のユーザー名に対応するパスワード。

**ポート番号**

WebLogic Server がリスンするポート番号。

**[Informatica MDM Hub サーバー]** ウィンドウが表示されます。

14. Hub サーバーのインストールの情報を入力し、**[次へ]** をクリックします。

次のフィールドに値を入力します。

**サーバー名**

Hub サーバーをホストするサーバーの名前。

**サーバーの HTTP ポート**

Hub サーバーのポート番号。

**Informatica MDM の管理パスワード**

MDM Hub にアクセスするためのパスワード。

**MDM Hub ホームディレクトリ**

Hub サーバーインストールのディレクトリ。

**[リソースキットの ORS ID]** ウィンドウが表示されます。

15. リストからリソースキットの ORS ID を選択し、**[次へ]** をクリックします。

リストには、作成したオペレーショナル参照ストア ID が表示されています。サンプルスキーマに関連するオペレーショナル参照ストア ID を選択します。

サンプルスキーマを登録していない場合、サンプルスキーマのオペレーショナル参照ストア ID は表示されません。サンプルのオペレーショナル参照ストアを登録し、インストールを再起動します。

**[デプロイメントの選択]** ウィンドウが表示されます。

16. 次のいずれかのオプションを選択し、**[次へ]** をクリックします。

**このインストール中に実行する。**

インストール中にリソースキットをデプロイし、設定します。

**後でデプロイする。**

後で手動でデプロイと設定を行う場合は、このオプションを選択します。

サンプルとユーティリティ機能のインストールが選択済みの場合は、このインストール手順でリソースキットをデプロイ、設定します。この手順でリソースキットをデプロイしない場合は、変更を行ったときに、リソースキットに付属している postInstallSetup スクリプトを使用してサンプルを再デプロイすることはできません。

インストール後のセットアップを手動で実行する場合は、後で postInstallSetup スクリプトを使用して EAR ファイルをデプロイすることはできません。インストールを変更する場合は、手動で EAR ファイルを編集、デプロイする必要があります。

【インストール前のサマリ】ウィンドウが表示されます。

17. インストール前のサマリを確認してインストールの設定を確定し、【インストール】をクリックします。  
インストールが完了すると、【インストールの完了】ウィンドウが表示されます。
18. 【完了】をクリックしてリソースキットのインストーラを終了します。

## コンソールモードでのリソースキットのインストール

コンソールモードでリソースキットをインストールできます。

リソースキットをインストールする前に、MDM\_SAMPLE スキーマを登録しておきます。

1. アプリケーションサーバーを起動します。
2. MDM Hub ディストリビューション内の次のディレクトリに移動します。  
UNIX の場合:<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/<operating system name: オペレーティングシステム名>/resourcekit  
Windows の場合:<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/windows/resourcekit
3. コマンドプロンプトで次のコマンドを実行します。  
UNIX の場合:./hub\_resourcekit\_install.bin -i console  
Windows の場合:hub\_resourcekit\_install.exe -i console
4. インストールで選択するロケールに対応する番号を入力し、**Enter** を押します。  
インストールに関する概要情報が表示されます。
5. **Enter** キーを押します。  
使用許諾契約が表示されます。
6. 使用許諾契約に目を通します。使用許諾契約の条項に同意する場合は **Y** と入力し、同意しない場合は **N** と入力してインストールプログラムを終了します。
7. **Enter** キーを押します。  
前の手順で **Y** と入力した場合、インストールフォルダに関する情報が表示されます。
8. カンマで区切られたインストール対象のリソースキット機能の数を入力し、**Enter** キーを押します。  
サンプルスキーマのインストールを要求するプロンプトが表示されます。
9. リソースキットをインストールするフォルダを選択します。
  - デフォルトのフォルダを選択する場合は、**Enter** キーを押します。
  - パスを変更する場合は、インストールフォルダの絶対パスを入力し、**Enter** キーを押します。
10. インストールフォルダの場所を確認します。インストールフォルダを確認して **[OK]** を入力するか、または **[キャンセル]** を入力してインストールフォルダを変更します。
11. **Enter** キーを押します。  
リンク場所のオプションのリストが表示されます。

12. リンク場所のオプションを番号で入力します。  
リンクファイルの場所を尋ねるプロンプトが表示されます。
13. リンクファイルの場所を絶対パスで入力し、**Enter** キーを押します。  
ソースのサンプルの設定オプションが表示されます。
14. 設定オプションを入力し、**Enter** キーを押します。

オプション	説明
1	サンプルをインストールして設定する
2	サンプルのソースをインストールしますが、設定まではしない

**1**を入力した場合は、アプリケーションサーバーのオプションのリストが表示されます。**2**を入力した場合は、インストール前のサマリが表示されます。

15. **1**を入力した場合は、選択するアプリケーションサーバーの数を入力し、**Enter** キーを押します。  
アプリケーションサーバーの情報を要求するプロンプトが表示されます。
16. WebLogic 設定を設定します。
  - a. リソースキットのインストール先にする WebLogic ドメインへのパスを指定して、**Enter** キーを押します。  
WebLogic アプリケーションサーバーのログイン情報を尋ねるプロンプトが表示されます。
  - b. ホスト名、サーバー名、ユーザー名、パスワード、および WebLogic Server のリスナポートを入力するか、デフォルト値を受け入れて、**Enter** キーを押します。  
Hub サーバーのインストール情報を要求するプロンプトが表示されます。
17. Hub サーバーのインストールの情報を入力し、**Enter** キーを押します。  
以下の表で、Hub サーバーのインストール情報を要求するプロンプトについて説明します。

プロンプト	説明
サーバー名	Hub サーバーをホストするサーバーの名前。
サーバーの HTTP ポート	Hub サーバーのポート番号。
Informatica MDM の管理パスワード	MDM Hub にアクセスするためのパスワード。
MDM Hub ホームディレクトリ	Hub サーバーのインストール用ディレクトリ

MDM Hub ORS ID のリストが表示されます。

18. MDM サンプルスキーマのオペレーショナル参照ストア ID を入力し、**Enter** キーを押します。  
サンプルスキーマを登録していない場合、サンプルスキーマのオペレーショナル参照ストア ID は表示されません。サンプルのオペレーショナル参照ストアを登録し、インストールを再起動します。  
デプロイメントの選択プロンプトが表示されます。
19. インストール中に postInstallSetup を実行するか、後で手動で実行するか、いずれかの方法を選択します。
20. **Enter** キーを押します。  
インストールの設定のサマリが表示されます。

21. インストール前のサマリに表示された情報を確認します。設定内容に問題がなければ、**Enter** キーを押してインストールを開始します。  
指定した設定情報に従ってリソースキットがインストールされます。プロセスが完了すると、インストールの完了に関する情報が表示されます。
22. **Enter** キーを押してインストーラを終了します。

## サイレントモードでのリソースキットのインストール

サイレントモードでは、ユーザーとの対話なしでリソースキットをインストールできます。複数のインストールや、マシクラスタにインストールをする必要があるときは、サイレントモードでの実行をお勧めします。サイレントインストールでは、進捗や失敗に関するメッセージが表示されません。

リソースキットのサイレントインストールを実行する前に、サイレントインストールのプロパティファイルを設定する必要があります。インストーラによりこのファイルが読み込まれ、インストールオプションが決定されます。サイレントインストールのプロセスは、不正なアプリケーションサーバーのパスまたはポートなど、設定が正しくない場合でも正常に完了する場合があります。プロパティファイルに正しい設定がされていることを確認する必要があります。

リソースキットのインストール先となるマシンのハードディスクに、リソースキットのインストールファイルをコピーします。サイレントモードでインストールするには、以下のタスクを完了します。

1. インストールプロパティファイルを設定し、そのプロパティファイル内でインストールオプションを指定する。
2. インストールプロパティファイルを使用してインストーラを実行する。

### プロパティファイルの設定

Informatica では、インストーラが必要とするパラメータを含むサンプルのプロパティファイルが提供されています。このサンプルのプロパティファイルをカスタマイズして、インストールのオプションを指定できます。次に、サイレントインストールを実行します。

自動インストーラは、プロパティファイルの設定を検証しません。自動インストーラを実行する前に、正しい設定を指定したことを確認し、検証する必要があります。

1. 次のディレクトリにある `silentInstallResourceKit_sample.properties` ファイルを検索します。  
UNIX の場合: `/silent_install/mrmresourcekit`  
Windows の場合: `\silent_install\mrmresourcekit`  
ファイルをカスタマイズしたら、保存します。ファイルの名前を変更し、マシン上のどこかに保存しておくことができます。  
**注:** サイレントプロパティファイルでは、スラッシュおよびバックスラッシュが特殊文字として扱われます。インストールパスなどの情報をこのファイルに入力するときは、これらの文字のいずれかを 2 つ入力する必要があります。例えば、サーバーディレクトリのパスを入力するには、`\\u1\infamd\hub\resourcekit` と入力する必要があります。
2. `silentInstallResourceKit_sample.properties` ファイルのバックアップコピーを作成します。
3. テキストエディタを使用してファイルを開き、インストールパラメータの値を変更します。
4. プロパティファイルを `silentInstallresourcekit.properties` などの新しい名前で作成して保存します。



以下の表に、変更可能なインストールパラメータを示します。

プロパティ名	説明
INSTALLER_UI	インストールのモードを指定します。silent に設定。
SIP.INSTALL.TYPE	インストールのタイプを指定します。SIPERIAN_SAMPLE_INSTALL に設定。
SIP.INSTALL.SAMPLE.SCHEMA	サンプルスキーマをインストールするかどうかを指定します。 次のいずれかの値を指定。 - 0. サンプルスキーマをインストールしない - 1. サンプルスキーマをインストールする
SIP.INSTALL.SAMPLES	サンプルとユーティリティをインストールするかどうかを指定します。 次のいずれかの値を指定。 - 0. サンプルとユーティリティをインストールしない - 1. サンプルとユーティリティをインストールする
SIP.INSTALL.SIF.SDK	サービス統合フレームワーク（SIF）SDK をインストールするかどうかを指定します。 次のいずれかの値を指定。 - 0. SIF SDK をインストールしない - 1. SIF SDK をインストールする
SIP.INSTALL.BPM.SDK	BPM SDK をインストールするかどうかを指定します。 次のいずれかの値を指定。 - 0. BPM SDK をインストールしない - 1. SIF SDK をインストールする
SIP.INSTALL.JASPERSOFT	Jaspersoft レポートツールをインストールするかどうかを指定します。 次のいずれかの値を指定。 - 0. BPM SDK をインストールしない - 1. SIF SDK をインストールする
SIP.INSTALL.SSANAME3	SSA-NAME3 をインストールするかどうかを指定します。 次のいずれかの値を指定。 - 0. SSA-NAME3 をインストールしない - 1. SSA-NAME3 をインストールする
USER_INSTALL_DIR	リソースキットのインストール先ディレクトリ。C:\<infamd_install_directory>\hub\resourcekit など。
RUN_CONFIGURE_FLAG	サンプルを設定するかどうかを指定します。 - 0. サンプルを設定しない - 1. サンプルをインストールして設定する デフォルトは1です。 RUN_CONFIGURE_FLAG プロパティを1に設定する場合は、 RUN_CONFIGURE_SETUP プロパティをコメントアウトするか、0に設定 します。 サンプルを設定する場合は、必ずアプリケーションサーバーと Hub サーバーを起動し、Hub コンソールでサンプルスキーマを登録してお きます。

プロパティ名	説明
RUN_CONFIGURE_SETUP	<p>サンプルのソースのみを設定するかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 0. サンプルのソースをインストールしない</li> <li>- 1. サンプルのソースをインストールする</li> </ul> <p>RUN_CONFIGURE_SETUP プロパティを 1 に設定する場合は、RUN_CONFIGURE_FLAG プロパティをコメントアウトするか、0 に設定します。RUN_CONFIGURE_SETUP プロパティを 1 に設定する場合には、後からサンプルを設定、デプロイすることはできません。</p>
SIP.AS.CHOICE	アプリケーションサーバーの名前。WebLogic を指定する。
SIP.AS.HOME	WebLogic インストールディレクトリへのパス。
SIP.APPSERVER.HOST	localhost などのホスト名。
SIP.APPSERVER.SERVER	AdminServer などの管理サーバー名。
SIP.APPSERVER.USERNAME	WebLogic にアクセスするためのユーザー名。
SIP.APPSERVER.PASSWORD	WebLogic にアクセスするためのパスワード。
WEBLOGIC.AS.PORT	アプリケーションサーバーのポート番号。
SIP.SERVER.NAME	Hub サーバーがデプロイされているサーバーの名前。
SIP.SERVER.HTTP.PORT	Hub サーバーがリスンするポート。
SIP.ADMIN.PASSWORD	Hub サーバーにアクセスするためのパスワード。
HUB_SERVER_HOME	Hub サーバーインストールのディレクトリ。
SIP.ORS.ID	MDM Hub サンプルスキーマのオペレーショナル参照ストア ID。
RUN_DEPLOYMENT_FLAG	<p>サイレントインストール中の postInstallSetup スクリプトの実行。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- 0. postInstallSetup スクリプトを実行しない</li> <li>- 1. postInstallSetup スクリプトを実行する</li> </ul>

## サイレントインストーラの実行

プロパティファイルの設定後、サイレントインストールを開始できます。

1. アプリケーションサーバーが動作していることを確認します。
2. コマンドウィンドウを開きます。
3. 次のコマンドを実行します。

UNIX の場合: `./hub_resourcekit_install.bin -f <location_of_silent_properties_file_for_resourcekit>`

Windows の場合: `.\hub_resourcekit_install.exe -f <location_of_silent_properties_file_for_resourcekit>`

サイレントインストーラがバックグラウンドで実行されます。このプロセスには時間がかかる場合があります。postinstallSetup.log ファイルを確認して、インストールが成功したことを検証します。

ログファイルは、以下のディレクトリにあります。

UNIX の場合: `<infadm_install_directory>/logs/postInstall.log`

Windows の場合: `<infadm_install_directory>\logs\postInstall.log`

## 第 12 章

# MDM Hub のトラブルシューティング

- [インストールプロセスのトラブルシューティング, 107 ページ](#)

## インストールプロセスのトラブルシューティング

インストールが失敗した場合は、次の情報を利用してエラーのトラブルシューティングを行います。

### MDM Hub ユーザーがログインできない

Hub サーバーのインストール後に CMX\_SYSTEM スキーマを再作成すると、MDM Hub はハッシュされたパスワードを認識できません。その結果、ユーザーは MDM Hub にログインできません。

この問題を解決するには、postInstallSetup スクリプトを再度手動で実行します。このスクリプトにより、MDM Hub ユーザーのパスワードが再度ハッシュされ、ユーザーがログインできるようになります。

または、postInstallSetup スクリプトを再実行しない場合は、次のコマンドを実行して、ユーザーパスワードをハッシュされたパスワードに移行し、アプリケーションユーザーを作成します。

UNIX の場合:

```
cd <MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/server/bin
./sip_ant.sh hash_users_passwords
./sip_ant.sh add_application_users
```

Windows の場合:

```
cd <MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\server\bin
sip_ant.bat hash_users_passwords
sip_ant.bat add_application_users
```

**注:** WebSphere 環境では、MDM Hub ユーザーは、次のディレクトリに対するアクセス権限と書き込み権限を持っている必要があります。

<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/server/bin/resources/certificates

### ActiveVOS サーバーのデプロイメントがタイムアウトすると、PostInstallSetUp スクリプトが失敗する

Hub サーバーをインストールする際、インストール後のセットアッププロセスが ActiveVOS サーバーのデプロイ時に失敗することがあります。

この問題を解決するには、次のディレクトリの build.properties ファイルに含まれる deploy.wait.time プロパティの値を大きくします。

UNIX の場合:<infamdm のインストールディレクトリ>/hub/server/bin

Windows の場合:<infamdm のインストールディレクトリ>\hub\server\bin

### オペレーショナル参照ストア開始または終了のタイムスタンプが正確でない

作成したオペレーショナル参照ストアをエクスポートするとき、MDM Hub は.dmp ファイルを生成します。オペレーショナル参照ストアの.dmp ファイルを再利用してオペレーショナル参照ストアをもう一つ作成できます。オペレーショナル参照ストアの C\_REPOS\_DB\_VERSION テーブルの開始日および終了日の列には、正確でない開始日と終了日が記録されています。このエラーは機能には一切影響を与えないため、無視できます。

### Hub サーバーが cmx\_system スキーマに接続できない

Hub サーバーが cmx\_system スキーマに接続できないことを確認するには、アプリケーションサーバーログを確認します。

例えば、データベースへアクセスできないことを示す次のエラーが見つかる場合があります。

Caused by: java.sql.SQLException: ORA-28000: the account is locked  
DSRA0010E: SQL State = 99999, Error Code = 28,000

問題を解決するには、データベース接続の問題を解決します。アプリケーションサーバーコンソールを使用してデータベースへの接続をテストします。cmx\_system スキーマへの接続を解決できない場合は、cmx\_system スキーマを再作成します。

### レコードのトークン化の必要性の検証に失敗する

マッチプロセスの実行時、以下のようなエラーメッセージが表示されることがあります。

SIP-16062: Failed to verify the need to tokenize records.

以下の環境変数の設定を確認します。

- ライブラリパス環境変数には以下のパスが含まれる必要があります。

UNIX の場合:<infamdm\_install\_directory>/hub/cleanse/lib

Windows の場合:<infamdm\_install\_directory>\hub\cleanse\lib

ライブラリパス環境変数はオペレーティングシステムに依存します。

- AIX。LIBPATH
- HP-UX。SHLIB\_PATH
- Solaris、Suse、または RedHat: LD\_LIBRARY\_PATH
- Windows。PATH

- SSAPR 環境変数にはすべてのユーザーに対して次のパスが含まれる必要があります。

UNIX の場合:<infamdm\_install\_directory>/server\_install\_dir/cleanse/resources

Windows の場合:<infamdm\_install\_directory>\server\_install\_dir\cleanse\resources

### プロセスサーバーのロード時の major.minor バージョンエラー

Process サーバーをロードしようとして、コンソールに何度も major.minor のエラーが起きる場合は、システムに正しいバージョンの Java がインストールされていることを確認します。

### 認証中の Informatica Address Verification の例外

認証中に Informatica Address Verification が例外を生成します。JVM のスタックサイズが充分であることを確認します。

- WebLogic ホームディレクトリに移動します。
- テキストエディタで次のファイルを開きます。

UNIX の場合: setDomainEnv.sh

Windows の場合: startWeblogic.cmd

3. 次のコマンドを使用して MEM\_ARGS 変数を設定します。

UNIX の場合:

```
set MEM_ARGS=${MEM_ARGS} -Xss2000k
```

Windows の場合:

```
set MEM_ARGS=%MEM_ARGS% -Xss2000k
```

4. ファイルを保存して閉じます。

### オペレーショナル参照ストアにワークフローエンジンが設定されていません

MDM Hub をインストールし、前のバージョンからオペレーショナル参照ストア（ORS）をインポートすると、ORS にワークフローエンジンが設定されていないことを示す致命的なエラーが表示されます。このエラーの原因は、Siperian BPM ワークフローエンジンがデフォルトで登録されていないためです。ORS に設定する必要がある Siperian BPM ワークフローエンジンを登録するには、Workflow Manager を使用します。

## 第 13 章

# アンインストール

この章では、以下の項目について説明します。

- [アンインストールの概要, 110 ページ](#)
- [Hub Store のアンインストール, 110 ページ](#)
- [グラフィカルモードでの Process サーバーのアンインストール, 111 ページ](#)
- [グラフィカルモードでの Hub サーバーのアンインストール, 112 ページ](#)
- [グラフィカルモードでのリソースキットのアンインストール, 113 ページ](#)
- [コンソールモードでのプロセスサーバーのアンインストール, 114 ページ](#)
- [コンソールモードでの Hub Server のアンインストール, 114 ページ](#)
- [コンソールモードでのリソースキットのアンインストール, 114 ページ](#)
- [手動によるプロセスサーバーのデプロイ解除, 115 ページ](#)
- [手動による Hub Server のデプロイ解除, 115 ページ](#)

## アンインストールの概要

MDM Hub をアンインストールするには、Process サーバー、Hub サーバー、Hub Store を MDM Hub の実装から削除する必要があります。

MDM Hub をアンインストールするには、以下の手順を実行します。

1. Hub Store をアンインストールします。
2. Process サーバーをアンインストールします。
3. Hub サーバーをアンインストールします。

## Hub Store のアンインストール

Hub Store スキーマを削除し、Hub Store スキーマへのユーザーログインを削除して、Hub Store をアンインストールできます。Hub Store スキーマを削除する前に、Hub コンソールを使用して Hub Store スキーマの登録を解除します。

Hub Store スキーマを削除するには、管理者特権を持っている必要があります。

1. Hub コンソールを起動します。

2. 設定ワークベンチにある**データベースツール**をクリックします。  
[データベース情報] ページが表示されます。
3. [書き込みロック] > [ロックの取得] の順にクリックします。
4. データベースのリストから、登録を解除するオペレーショナルリファレンスストアを選択します。
5. [データベースの登録解除] ボタンをクリックします。  
オペレーショナルリファレンスストアの登録解除の確認を求めるメッセージが表示されます。
6. [はい] をクリックします。
7. SQL\*Plus を使用して、Oracle インスタンスに接続します。
8. 各 Hub Store スキーマに対して次のコマンドを使用して、スキーマを削除します。  
`drop user <user name> cascade;`  
[カスケード] オプションを使用してスキーマを削除する場合、関連付けられたスキーマが削除されます。

## グラフィカルモードでの Process サーバーのアンインストール

グラフィカルモードで Process サーバーをアンインストールできます。

### UNIX におけるグラフィカルモードでのプロセスサーバーのアンインストール

MDM Hub をアンインストールするには、Process サーバーを削除する必要があります。Process サーバーをアンインストールする手順は、MDM Hub の実装の Process サーバーごとに実行する必要があります。

1. アプリケーションサーバーを停止します。
2. 次のディレクトリに移動します。  
`<infamdm_install_directory>/hub/cleanse/UninstallerData`
3. アンインストーラを実行します。  
`./"Uninstall Informatica MDM Hub Cleanse Match Server"`
4. [アンインストール] をクリックします。  
アンインストールのプロセスが完了すると、[アンインストールの完了] ウィンドウが表示されます。
5. [完了] をクリックします。

### Windows におけるグラフィカルモードでのプロセスサーバーのアンインストール

MDM Hub をアンインストールするには、Process サーバーを削除する必要があります。Process サーバーをアンインストールする手順は、MDM Hub の実装の Process サーバーごとに実行する必要があります。

1. アプリケーションサーバーを停止します。
2. [スタート] をクリックし、[プログラム] > [INFAMDM] > [Hub] > [クレンジング] > [Uninstaller Data] > [Informatica MDM Hub クレンジング一致サーバーのアンインストール] の順にクリックします。  
[アンインストールの概要] ウィンドウが表示されます。

3. **【アンインストール】** をクリックします。  
アンインストールのプロセスが完了すると、**【アンインストールの完了】** ウィンドウが表示されます。
4. **【完了】** をクリックします。

## グラフィカルモードでの Hub サーバーのアンインストール

グラフィカルモードで Hub サーバーをアンインストールできます。

### UNIX におけるグラフィカルモードでの Hub サーバーのアンインストール

MDM Hub をアンインストールするには、MDM Hub の実装から Hub サーバーを削除する必要があります。

1. アプリケーションサーバーが停止していることを確認します。
2. 次のディレクトリに移動します。  
`<infamdm_install_directory>/hub/server/UninstallerData`
3. アンインストーラを実行します。  
`./"Uninstall Informatica MDM Hub Server"`  
**【アンインストールの概要】** ウィンドウが表示されます。
4. **【アンインストール】** をクリックします。  
アンインストールのプロセスが完了すると、**【アンインストールの完了】** ウィンドウが表示されます。
5. **【完了】** をクリックします。

### Windows におけるグラフィカルモードでの Hub サーバーのアンインストール

MDM Hub をアンインストールするには、MDM Hub の実装から Hub サーバーを削除する必要があります。

1. アプリケーションサーバーが停止していることを確認します。
2. **【スタート】** ボタンをクリックし、**【プログラム】** > **【Infamdm】** > **【Hub】** > **【サーバー】** > **【UninstallerData】** > **【Informatica MDM Hub サーバーのアンインストール】** の順にクリックします。  
**【アンインストールの概要】** ウィンドウが表示されます。
3. **【アンインストール】** をクリックします。  
アンインストールのプロセスが完了すると、**【アンインストールの完了】** ウィンドウが表示されます。
4. **【完了】** をクリックします。



# グラフィカルモードでのリソースキットのアンインストール

グラフィカルモードでリソースキットをアンインストールできます。

## UNIX でのグラフィカルモードによるリソースキットのアンインストール

リソースキットをアンインストールするには、MDM Hub の実装からリソースキットを削除する必要があります。

1. アプリケーションサーバーを停止します。
2. 次のディレクトリに移動します。  
`<infamdm_install_directory>/hub/resourcekit/UninstallerData`
3. 次のコマンドを実行します。  
`./"Uninstall Informatica MDM Hub Resource Kit"`  
**[Informatica MDM Hub リソースキットのアンインストール]** ウィンドウが表示されます。
4. **[アンインストール]** をクリックします。  
**[アンインストールの完了]** ウィンドウが開き、削除できなかった項目のリストが表示されます。
5. **[完了]** をクリックします。
6. 以下のディレクトリを手動で削除します。  
`<infamdm_install_dir>/hub/resourcekit`

## Windows でのグラフィカルモードによるリソースキットのアンインストール

リソースキットをアンインストールするには、MDM Hub の実装からリソースキットを削除する必要があります。

1. アプリケーションサーバーを停止します。
2. 次のディレクトリに移動します。  
`<ResourceKit_install_dir>\deploy\UninstallerData`
3. Uninstall Informatica MDM Hub Resource Kit.exe をダブルクリックします。  
**[Informatica MDM Hub リソースキットのアンインストール]** ウィンドウが表示されます。
4. **[アンインストール]** をクリックします。  
**[アンインストールの完了]** ウィンドウが開き、削除できなかった項目のリストが表示されます。
5. **[完了]** をクリックします。
6. 以下のディレクトリを手動で削除します。  
`<infamdm_install_dir>\hub\resourcekit`

## コンソールモードでのプロセスサーバーのアンインストール

UNIX では、Process サーバーをコンソールモードでアンインストールできます。コンソールモードで Process サーバーをインストールした場合、コンソールモードで Process サーバーをアンインストールします。

1. 次のディレクトリに移動します。

```
<infamd_install_dir>/hub/cleanse/UninstallerData
```

2. 以下のコマンドを入力してアンインストーラを実行します。

```
./"Uninstall Informatica MDM Hub Cleanse Match Server"
```

## コンソールモードでの Hub Server のアンインストール

UNIX では、Hub サーバーをコンソールモードでアンインストールできます。コンソールモードで Hub サーバーをインストールした場合、コンソールモードで Hub サーバーをアンインストールします。

1. 次のディレクトリに移動します。

```
<infamd_install_dir>/hub/server/UninstallerData
```

2. 以下のコマンドを入力してアンインストーラを実行します。

```
./"Uninstall Informatica MDM Hub Server"
```

## コンソールモードでのリソースキットのアンインストール

コンソールモードでリソースキットをアンインストールできます。コンソールモードでリソースキットをインストールした場合、コンソールモードでリソースキットをアンインストールします。

1. 次のディレクトリに移動します。

UNIX の場合:<infamd\_install\_dir>/hub/resourcekit/UninstallerData

Windows の場合:<infamd\_install\_dir>\hub\resourcekit\UninstallerData

2. コマンドプロンプトで次のコマンドを実行します。

UNIX の場合:"Uninstall Informatica MDM Hub Resource Kit.bin" -i console

Windows の場合:"Uninstall Informatica MDM Hub Resource Kit.exe" -i console

## 手動によるプロセスサーバーのデプロイ解除

場合によっては、Weblogic サーバー環境から Process サーバーのデプロイを手動で解除する必要があります。

- ▶ WebLogic Server 管理コンソールを使用して siperian-mrmcleanse.ear ファイルのデプロイを手動で解除します。

詳細については、WebLogic のマニュアルを参照してください。

## 手動による Hub Server のデプロイ解除

場合によっては、WebLogic Server 環境から Hub サーバーのデプロイを手動で解除する必要があります。

- ▶ WebLogic Server 管理コンソールを使用して、次のデプロイメントファイルのデプロイを解除します。

デプロイメントファイル名	説明
siperian-mrm.ear	必須。Hub サーバーアプリケーション。
entity360view-ear.ear	オプション。エンティティ 360 フレームワーク。
informatica-mdm-platform-ear.ear	オプション。Informatica プラットフォームアプリケーション。

詳細については、WebLogic のマニュアルを参照してください。

# 索引

## A

abTaskClient ロール  
編集 [89](#)  
ActiveVOS  
URN、設定 [91](#)  
ActiveVOS コンソールの管理者ユーザー  
abAdmin ロール [24](#)  
作成 [24](#)

## H

Hub コンソール  
起動 [64](#), [68](#)  
Hub サーバー  
EAR ファイルの再パッケージ化 [62](#)  
postInstallSetup スクリプト [56](#)  
WebLogic クラスタへのデプロイ [48](#)  
アンインストール [114](#)  
インストール [40](#), [44](#), [99](#)  
インストールログファイル [53](#)  
カスタム JAR ファイルの再パッケージ化 [62](#)  
サイレントインストール [47](#), [48](#), [104](#)  
手動デプロイ [55](#), [57](#)  
デプロイメント [55](#)  
デプロイメントスクリプト [55](#)  
バージョン情報 [53](#)  
ビルド番号 [53](#)  
Hub サーバーのインストールモード  
グラフィカル [40](#)  
コンソール [40](#)  
サイレント [40](#)  
Hub サーバーのプロパティファイル  
設定 [29](#)  
Hub ストア  
アンインストール [110](#)  
テーブルスペース、作成 [16](#)

## I

Infinispan  
設定 [66](#), [67](#)  
Informatica ActiveVOS  
スキーマの作成 [20](#)  
Informatica Platform  
プロパティファイル [29](#)

## J

JMS メッセージキュー  
設定 [60](#), [64](#)

## M

MDM Hub  
Java Development Kit (JDK) の要件 [15](#)  
インストールのトポロジ [11](#)  
インストールの設計 [11](#)  
インストールのタスク [12](#)  
オペレーティングシステムのロケールの設定 [15](#)  
コンポーネント [9](#)  
システム要件 [15](#)  
概要 [9](#)  
環境変数の設定 [15](#)  
MDM Hub EAR ファイル  
再パッケージ化 [62](#)

## O

Oracle の設定  
init.ora パラメータの設定 [16](#)  
MDM Hub 用 [16](#)  
Oracle リサイクルビンの無効化 [16](#)

## P

postInstallSetup スクリプト  
Hub サーバー用 [56](#)  
実行 [56](#), [83](#)  
プロセスサーバー用 [83](#)

## T

TNS 名  
追加 [16](#)

## U

URN  
ActiveVOS の設定 [91](#)

## W

WebLogic  
設定 [21](#), [54](#)  
WebLogic クラスタ  
Hub サーバーのデプロイ [48](#)  
プロセスサーバーのデプロイ [76](#)

## あ

アンインストール  
Hub サーバー [114](#)  
Hub ストア [110](#)  
プロセスサーバー [114](#)

## い

一致バッチレーション  
有効化 [84](#)  
インストール  
Hub サーバー [40, 44](#)  
プロセスサーバー [71, 73](#)  
リソースキット [99, 102](#)

## お

オペレーショナル参照ストア  
メタデータのインポート [35](#)  
作成 [32](#)  
登録 [68](#)

## さ

サイレントインストール  
Hub サーバーの [48](#)  
応答ファイルの生成 [47](#)  
サンプルスキーマ  
インストール [94](#)  
登録 [97](#)

## し

自動インストーラ  
実行 [75](#)

## せ

セキュリティレルム  
デフォルト、編集 [87](#)

## た

ターゲットデータベース  
選択 [68](#)

## て

データベース  
接続テスト [16](#)  
ターゲットデータベース [68](#)  
テーブルスペース  
作成 [16](#)

## と

トラブルシューティング  
インストール後のプロセス [107](#)

## ふ

プロセスサーバー  
postInstallSetup スクリプト [83](#)  
WebLogic クラスタへのデプロイ [76](#)  
アンインストール [114](#)  
インストール [71, 73](#)  
インストールログファイル [78](#)  
再デプロイ [83](#)  
手動デプロイ [79, 82](#)  
データソースの作成 [79](#)  
デプロイ [83](#)  
デプロイメント [79, 82](#)  
デプロイメントスクリプト [79, 82](#)  
バージョン情報 [79](#)  
ビルド番号 [79](#)  
プロセスサーバーのインストールモード  
グラフィカル [71](#)  
コンソール [71](#)  
サイレント [71](#)  
プロセスサーバーのプロパティファイル  
設定 [29](#)

## ま

マスターデータベース  
メタデータのインポート [34](#)  
作成 [30](#)

## め

メッセージキュー  
モジュールへの追加 [61](#)

## り

リソースキット  
アンインストール [113](#)  
インストール [99, 102](#)  
サイレントプロパティファイル [104](#)

## ろ

ロール  
abTaskClient、編集 [89](#)  
ActiveVOS、追加 [87](#)  
ログファイル  
Hub サーバーのログファイル [53](#)  
JBoss のログファイル [53, 78](#)  
インストール後の設定ログファイル [53, 78](#)  
インストール前提条件ログファイル [53, 78](#)  
インストールログファイル [53, 78](#)  
デバッグログファイル [53, 78](#)  
プロセスサーバーのログファイル [78](#)

## わ

ワークフローエンジン  
追加 [92](#)